

く含む。

亮

51は残存高7.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内外面は劣化のため調整等不明である。52は残存高5.7cmを測る逆「L」字状口縁のものであるが、口縁端部を欠損し、詳細は不明である。口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を施す。外面縦方向のハケ調整を行うが、内面は劣化のため調整等不明である。胎土はいずれも橙褐色を呈し5mm程度の長石粒を多く含む。

石器 (Fig.119~120)

黒色粘土出土石器 (Fig.119)

石鏃 (55・56)、石鏃未製品 (57)、磨製石包丁 (58)、打製石包丁 (59) が出土した。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。55は平基式の石鏃である。両面を調整し、一方に逆刺を作り出すが非常に薄い。切先を折損し、最大長 (1.4cm)、最大幅1.4cm、最大厚0.5cm、重量 (0.7g) を測る。56は凹基式の石鏃である。両面を調整し、切先を折損し、逆刺を欠損する。最大長 (2.1cm)、最大幅1.5cm、最大厚0.4cm、重量 (0.9g) である。

石鏃未製品

57は側縁全体に調整を施すが、切先から側縁にかけて折損している。最大長2.9cm、最大幅2.5cm、最大厚0.8cm、重量3.8gで、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁

58は背部と刃部が湾曲する杏仁形の磨製石包丁である。両刃であるが、特に表面の刃部を明瞭に作り出し、横方向の極度を確認できる。基部で欠損しており、最大長 (11.4cm)、最大幅5.5cm、最大厚0.6cm、重量 (54.0g) を測る。石材は流紋岩である。

打製石包丁

59は抉りをもつ打製石包丁である。背部には自然面と刃潰し加工が施され、刃部は簡単な両面調整によって作り

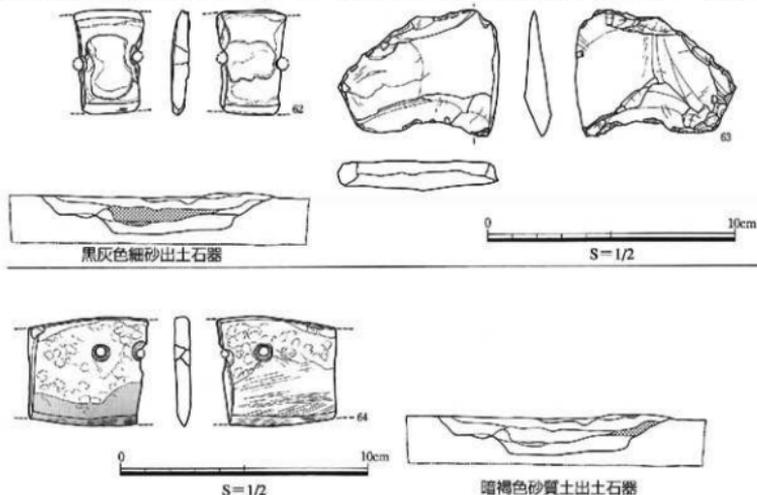


Fig.120 SD134出土石器 (2)

出されている。折損しており、最大長(6.0cm)、最大幅5.4cm、最大厚(8.5cm)、重量(27.8g)を測る。石材はサヌカイトである。

暗褐色細砂出土石器 (Fig.119)

敲き石 (60)、砥石 (61) が出土した。

敲き石

60は側面の一部と両面の体部に敲打面を有する。最大長6.7cm、最大幅6.9cm、最大厚5.2cm、重量315.0gで、石材は軟質の砂岩である。

砥石

61は砥石である。砥面に斜め方向の擦痕を残す。両端部を欠損し、最大長(9.4cm)、最大幅(8.1cm)、最大厚4.2cm、重量(430.0g)を測る。石材は流紋岩あるいは安山岩である。

黒灰色細砂出土石器 (Fig.120)

磨製石包丁 (62)、スクレイパー (63) が出土した。

磨製石包丁

62は両紐部で欠損しており、全体の形態はわからない。最大長(2.8cm)、最大幅4.3cm、最大厚(0.7cm)、重量(13.1g)を測る。石材は、緑白色の結晶片岩である。

スクレイパー

63は全体にローリングを受けており、稜線は不明瞭である。刃部は明瞭に作り出されていない。完形で、最大長5.2cm、最大幅6.5cm、最大厚1.2cm、重量36.7gを測る。石材はサヌカイトである。

暗褐色砂質土出土石器 (Fig.120)

磨製石包丁 (64) が出土した。

64の刃部は両刃で明瞭に作り出しており、斜め横方向の擦痕が確認できる。表面の刃部付近と背部に光沢面がみられる。紐部で欠損しており、最大長(4.9cm)、最大幅4.5cm、最大厚0.6cm、重量(24.7g)、石材は安山岩である。

SD167出土遺物

土器 (Fig.121~126)

黒褐色粘質土出土土器 (Fig.121~124)

壺 (1~18)、甕 (19~33・36~45)、鉢 (34・35)、ミニチュア土器 (46~48)、高坏 (49)、甕蓋 (50)、土製円板 (51~53) が出土した。

壺

1は復元口径16.0cm、残存高4.5cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には3条のヘラ描き沈線を描す。沈線は周辺を掻き取る事により削り出し突帯状に成形する。2は復元口径15.8cm、残存高6.3cmを測る。口縁部は比較的緩やかに開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を描す。3は復元口径15.5cm、残存高8.5cmを測る。頸部は直線的に傾斜し、口縁部付近で短く開く。口縁端部は丸く納める。内外面横方向の密なヘラミガキを行う。4は復元口径21.0cm、残存高10.6cmを測る。口縁部は直線的に開いた後口縁部付近で急に開き、端部に面を持つ。口唇部には斜格子状のキザミを有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。5は復元口径22.0cm、残存高8.2cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を描す。6は復元口径16.6cm、残存高8.0cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。口唇部は上方へ僅かにつまみ上げる。表面の劣化が著しいが、外面には横方向のヘラミガキを描す。7は復元口径17.0cm、残存高9.0cmを測る。頸部から緩やかに湾曲して広く開く口縁部を有し、口縁端部は丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部外面には縦方向のヘラミガキが残る。頸部には断面三角形の貼り付け突帯を描す。8は復元口径18.7cm、残存高9.0cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を描す。9は復元口径19.0cm、残存高6.1cmを測る。直線的に開き口縁部上端で強く開く口縁部を有し、口縁部内面には一条の貼り付け突帯を持つ。表面の劣化が著しく

く調整等は不明である。10は復元口径27.8cm、残存高7.5cmを測る。I緑部は「く」字状に比較的強く開き、端面に面を持つ。内外面横方向のヘラミガキを施す。11は復元口径39.3cm、残存高9.9cmを測る。I緑部は比較的緩やかに開き、端面肥厚して丸く納める。表面の劣化が著しいが、I緑部内面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には1条の削り出し突帯が存在する。12は残存高3.9cmを測る。I緑部は比較的緩やかに開き、端面を丸く納める。内面ナデ調整、外面I緑縁部に横方向のヘラミガキ、端面以下に縦方向のヘラミガキを施す。I緑部直下には削り出しによる段を有する。13は残存高6.1cmを測る。I緑部は長く緩やかに湾曲して開き、端面を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には7条以上のヘラ描き沈線を施す。14は残存高6.5cmを測る。I緑部は比較的急に開き、端面をわずかにつまみ上げる。内外面横方向のヘラミガキを施す。15は底径6.1cm、残存高7.6cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。内面板状工具によるナデを、外面底部付近を横方向・体部付近を縦方向のヘラミガキを施す。16は底径9.0cm、残存高13.3cmを測り、緩やかに湾曲して開く体部を有する。外面表面劣化が著しく調整等は不明であるが、内面ナデ調整を施す。17は復元底径3.2cm、残存高2.3cmを測る小型である。緩やかに開く体部を有し、底部外面はわずかに窪む。内外面ナデ調整を行う。18は底径5.1cm、残存高5.2cmを測り、球形を早する。表面劣化が著しく調整等は不明である。いずれも胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、10・15はやや粒子が小さく、14は含有量も少ない。14は淡褐色を呈する。5・8・9・13は赤色酸化土粒を多く含む。

壺

19は復元口径19.0cm、残存高7.4cmを測る如意状I緑のもので、短く外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。I唇部のキザミは見られず、I緑部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。外面板状工具によるナデ調整を、内面ナデ調整を行う。20は復元口径19.3cm、残存高7.1cmを測る如意状I緑のもので、やや長く緩やかに外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。I唇部にはキザミを、I緑部直下には2条1単位の内面ヘラ描き沈線に区画された竹管文を2列施文する。表面劣化のため調整等不明である。21は残存高7.6cmを測る如意状I緑のもので、弱く外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。I唇部のキザミや、I緑部直下の沈線は見られない。内外面ナデ調整を施す。胎土は灰白色で精良なもので、搬入品の可能性がある。22は残存高7.0cmを測る如意状I緑のもので、弱く外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。全体的に薄手でI唇部のキザミは見られず、I緑部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。外面縦方向のハケ調整を施すが、内面は表面劣化のため調整等不明である。23は残存高5.3cmを測る如意状I緑のもので、強く外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。I唇部のキザミや、I緑部直下の沈線は見られない。内面表面劣化のため調整等不明であるが、外面にはハケをナデ消した痕跡が残る。24は残存高4.9cmを測る逆「L」字状I緑のもので、I緑部は半縁状に肥厚する。I唇部のキザミは見られず、I緑部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。25は残存高5.3cmを測る逆「L」字状I緑のもので、上向を傾斜させるやや長いI緑部を有する。I唇部にはキザミを、I緑部直下には竹管文と刺突文を沈線で区画した文様を刻む。内外面ナデ調整を施す。26は復元口径22.3cm、残存高8.2cmを測るもので、短く強く外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。如意状I緑と逆「L」字状I緑の中間的な形態を呈する。I唇部のキザミは見られず、I緑部直下には9条のヘラ描き沈線を施す。外面ランダムなハケ調整を施し、内面は表面劣化のため調整等不明である。27は復元口径22.2cm、残存高11.2cmを測る薄手の如意状I緑のもので、弱く外反するI緑部と「S」字状を呈する体部を有する。I唇部のキザミは見られないが、I緑部直下に2条を1単位とした半截竹管文による沈線を3単位巡らし、間に竹管文を配する。表面劣化のため調整等不明である。28は復元口径25.5cm、残存高8.4cmを測る如意状I緑のもので、「く」字状に強く外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。I唇部のキザミは見られないが、I緑部直下には11条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。29は復元口径26.9cm、残存高6.3cmを測る如意状I緑のもので、「く」字状に外反するI緑部とやや直線的な体部を有する。I唇部のキザミは見られないが、I緑部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。外面板状工具によるナデを、内面ナデ調整を行う。30は復元口径19.0cm、残存高9.7cmを測る逆「L」字状I緑のもので、I緑部を水平に長くのばす断面三角形の貼り付けI緑を有する。I唇部にキザミは見られないが、I緑部直下には8条以上のヘラ描き沈線を施す。劣化のため調整等は不明である。31は復元口径20.8cm残存高6.8cmを測る逆「L」字状I緑のもので、長くのばす断面三角形のI緑を貼り付ける。I唇部にはキザミを、I緑部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。内面表面劣化のため調整等

は不明、外面縦方向の板状工具によるナデ調整を行う。32は復元口径23.6cm、残存高9.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面四角形の内厚の口縁部を貼り付ける。口唇部には幅広のキザミを有し、口縁部直下に9条のヘラ描き沈線を施す。内面ナデ調整を行うが、外面表面劣化のため調整等是不明である。33は復元口径24.5cm、残存高7.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部を水平に長くのばす断面四角形の口縁を貼り付ける。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には9条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等是不明である。36は復元口径25.2cm、残存高16.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部が短い断面三角形の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を有する。内面体部は縦方向、口縁付近は横方向の板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。37は残存高4.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い断面三角形の口縁を貼り付ける。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。38は残存高3.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の口縁を貼り付ける。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には2条以上の沈線が存在する。劣化のため調整等是不明である。39は残存高1.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部をやや長く水平に引き出す断面三角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを有し、口縁部直下には沈線を施す。また、口縁部上面には竹管文を施す。内外面ナデ調整を施す。40は残存高2.9cmを測る。直立する口縁部を有し、口縁部直下には一条の貼り付け突帯を有する。口唇部にはキザミを有し、突帯直下には沈線を施す。41は残存高4.6cmを測る。直立する口縁部を有し、口縁部直下には一条の貼り付け突帯を有する。口唇部は波状口縁を呈し、突帯直下には沈線を持たない。42は体部の破片である。残存高5.5cmを測る。口縁部直下のもと思われる、4条1単位の柳葉文を3単位以上と、山形の刺突文を施す。43は底径7.1cm、残存高6.4cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内外面劣化のため調整等是不明である。底部には径0.7cm程度の焼成後穿孔が存在する。44は底径6.5cm、残存高7.8cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は不明瞭である。内面劣化のため調整等是不明であるが、外面にはわずかに縦方向のハケ調整の痕跡が残る。底部には径1.2cm程度の焼成後穿孔が存在する。45は底径7.1cm、残存高9.9cmを測る。直線的に開く体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。内外面ナデ調整を施す。底部には径0.9cm程度の焼成後穿孔が存在する。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、25・29・31はやや粒子が小さく、29・31は含有量も少ない。18・25・28・29・31・37は暗褐色を、24・41は淡褐色を呈する。22・27・32は赤色酸化土粒を多く含む。21は先述の通り精良な胎土で搬入品の可能性がある。

鉢

34は復元口径23.8cm、残存高8.7cmを測り、やや湾曲する体部とわずかに外側に引き出す口縁部を有する。あるいは無頸甕である可能性もある。キザミや沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。35は復元口径25.7cm、器高13.7cm、底径7.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、短い断面三角形の貼り付け口縁を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。胎土は共に径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものである。

ミニチュア土器

46は底径2.6cm、残存高2.7cmを測り、強くすばまる底部を有する。てづくね成形である。47は底径3.2cm、残存高4.0cmを測り、直線的な体部を有する。内外面ナデ調整を行う。48は底径4.5cm、残存高4.3cmを測り、歪みが著しい。てづくね成形である。胎土は共に径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものである。

甕蓋

50は天井部復元径7.0cm、残存高6.6cmを測り、天井部外面は広く窪む。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。内面はナデ、外面はミガキを施す。

高坏

49は脚部底径7.3cm、坏部残存高5.2cm、脚部残存高3.0cmを測る。表面劣化が著しく調整等是不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多く含み、橙褐色を呈する。

土製円板

51は径4.6cm、厚さ2.5cmで楕円形を呈し、重量44.2gを測る。専用品である。側縁部にはキザミを、中央部には径3mmの焼成前穿孔が存在する。内外面表面劣化のため調整不明である。52は直径3.7cmの円形を呈し、重量10.5gを

測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等は行わない。外面ヘラミガキの痕跡が見られるが、内面は表面劣化のため調整不明である。53は直径4.6cmの円形を呈し、重量14.1gを測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等は行わない。内外面表面劣化のため調整不明である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多く含み、橙褐色を呈するものであるが、51は化粧土を塗布する。

暗灰色砂質土出土土器 (Fig.124)

壺 (54・57)、甕 (56・59～60)、鉢 (55・58) が出土した。

壺

54は復元口径17.2cm、残存高6.2cmを測り、口縁部はラッパ状に広く開く。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。57は胴部の破片である。残存高6.0cmを測る。胴部中央付近に4条のヘラ描き沈線と2条の貼り付け突帯を有する。突帯には幅広のキザミを施す。内面ユビオサエが傑出し、外面調整は表面劣化のため不明である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多く含み、54は橙褐色、57は淡褐色を呈する。

甕

56は残存高5.5cmを測る如意状口縁のもので、やや強く外反する口縁部と張り気味の体部を有する。劣化が著しくキザミの有無については不明であるが、口縁部直下には2条1単位のヘラ描き沈線と竹管文を施す。胎土・形彫・施文などから黒褐色粘質土出土のもの (20) と同一個体である可能性がある。59は復元口径17.3cm、残存高6.6cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。60は残存高4.9cmを測る逆「L」字状口縁のもので、肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には6条のヘラ描き沈線を施す。外面は劣化のため調整等不明であるが、内面にはナデの痕跡を有する。胎土は58・59・60が褐色で砂粒が少ないに対し、56は橙褐色を呈し赤色酸化土粒を多く含む。

鉢

55は残存高3.2cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部を丸く納める。内外面ナデ調整を、頸部には2条以上の沈線を施す。胎土は橙褐色を呈しやや砂粒が少ない。58は残存高5.7cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部とやや強く張る体部を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。

暗灰色粘土出土土器 (Fig.124～126)

壺 (61～68)、甕 (69～81)、甕蓋 (82・83)、土製円板 (84) が出土した。

壺

61は復元口径13.8cm、残存高7.6cmを測る。口縁部は比較的直線的に開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には削り出し突帯を有する。62は復元口径18.0cm、残存高7.8cmを測る。口縁部はやや強く屈曲して開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、頸部には4条のヘラ描き沈線を施し、沈線の周辺を掻き取り、削り出し突帯状に成形する。63は底径4.4cm、残存高4.1cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面はやや上げ底になる。劣化が著しく、調整等は不明である。64は底径6.0cm、残存高5.9cmを測り、直線的に立ち上がった後緩やかに湾曲して開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。外面劣化が著しく、調整等不明であるが、内面には密なヘラミガキが残る。65は復元底径7.5cm、残存高5.3cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面はやや上げ底になる。外面ナデ調整、内面ユビオサエを施す。66は残存高3.1cmを測る。口縁部は屈曲して開き、端部わずかに面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部には焼成前に穿たれた円孔を有する。67は残存高4.7cmを測る。口縁部は湾曲して広く開き、端部に面を持つ。口唇部と口縁部内面にヘラ描き沈線を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。68は復元口径36.3cm、残存高17.3cmを測る。口縁部は比較的強く開き、端部を丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、口縁部外面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には3条のヘラ描き沈線を施し、沈線付近を掻き取ることによって削り出し突帯状に成形する。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、64は暗褐色を、65・66は淡褐色を呈する。

甕

69は口径29.2cm、器高34.4cm、底径8.8cmを測る如意状口縁のもので、やや強く外反する口縁部と緩やかに湾曲す

る体部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下に4条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化が著しいが、体部外面には縦方向のハケ調整が見られる。70は残存高6.9cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と、屈曲して強く張る体部を有する。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。71は残存高4.0cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部と直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を施す。内面板状工具によるナダ調整を、外面ナダ調整を施す。72は残存高4.8cmを測る如意状口縁のもので、短く強く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線と沈線間に刺突文を施す。表面劣化のため調整等不明である。73は残存高6.5cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上端を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部のキザミはみられないが、口縁部直下に5条のヘラ描き沈線を施す。表面劣化のため調整等不明である。74は残存高6.2cmを測る逆「L」字状口縁のもので、薄手である。水平にやや長くのぼす口縁部を貼り付け、直線的な体部を有する。口唇部のキザミはみられず表面劣化のため沈線も不明瞭で、調整等も不明である。75は残存高11.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、水平に伸びる貼り付け口縁部と、緩やかに湾曲する体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には4条を1単位とする沈線に画される2条1単位のヘラ描きによる山形文を有する。内外面ナダ調整を施す。76は残存高7.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の小さい口縁部と、強く張る体部を有する。口唇部のキザミはみられず口縁部直下には8条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化のため調整等不明であるが、外面はナダ調整を施す。77は残存高5.1cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上端を傾斜させる断面三角形の貼り付け口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には8条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面ナダ調整を施す。78は残存高5.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、玉縁状の口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面ナダ調整、外面板状工具によるナダ調整を行う。79は残存高5.3cmを測る。直線状の口縁を有し、口縁部直下に1条の貼り付け突帯を有する。突帯はキザミを有し、突帯直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナダ調整を行う。80は復元口径22.2cm、残存高7.4cmを測る逆「L」字状口縁のもので、上端を水平にする断面三角形の貼り付け口縁部と、直線的な体部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には2条1単位のヘラ描き沈線とそれに画される山形文を施す。内面板状工具によるナダ調整を、外面下半には粗いヘラミガキを施す。81は残存高5.4cmを測り、直線的な口縁部と1条の貼り付け突帯を有する。口縁部は波状を呈し、キザミや沈線は見られない。表面劣化のため調整等不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、71・72・78・79は暗褐色を、73・81は淡褐色を呈する。71は砂粒の含有が少なく、70は赤色酸化土粒を多く含む。

壺蓋

82は天井径5.8cm、残存高5.4cmを測り、天井部外面は広く窪む。表面劣化のため外面調整等は不明であるが、内面にはヘラミガキの痕跡が残る。83は天井部径7.0cm、残存高5.8cmを測り、天井部外面は広く窪む。表面劣化のため内外面調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。

土製円板

84は土器転用の円板である。直径3.2cm、厚さ1.2cm、重量14.0gを測り、周部を打ち欠きで仕上げる。胎土は径5mmの長石粒を少量含み、暗褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。

暗灰褐色砂質土出土土器 (Fig.126)

壺 (85・94)、甕 (86~92)、高坏 (93) が出土した。

壺

85は肩部の破片である。残存高4.6cmを測る。幅広い削り出し突帯を成形した後、ヘラ描きによる斜格子状のキザミを施す。表面劣化のため調整は不明である。94は底径8.9cm、残存高5.7cmを測り、直立気味に立ち上がった後直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。劣化が著しく調整等は不明である。胎土は共に径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。

甕

86は残存高3.6cmを測る如意状口縁を有し、口唇部には竹管文を施す。口縁部直下には6条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等は不明である。87は復元口径24.4cm、残存高5.3cmを測る逆「L」字状口縁のも

ので、口縁部上面を傾斜させる断面三角形の口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条1単位の沈線に画された2条1単位の山形文を施す。表面劣化のため内外面調整等不明である。88は残存高8.0cmを測る如意状口縁のもので、強く短く屈曲させる口縁部を有する。口唇部のキザミは見られず、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施すと思われるが、表面の劣化が著しく詳細は不明である。89は復元口径15.0cm、残存高5.3cmを測る直立する1線を有するもので、口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有す。突帯端部にはキザミを有し、直下には11条以上のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。90は復元口径19.4cm、残存高6.7cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする肉厚の貼り付け口縁を有する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られない。内外面劣化のため調整等は不明である。91は残存高7.6cmを測る逆「L」字状口縁のもので、土縁状の貼り付け口縁を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等は不明である。92は残存高5.3cmを測る直立する口縁を有するもので、口縁部直下には1条の貼り付け突帯を有す。突帯端部にはキザミを有し、突帯直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、89はやや粒子が小さく、89は含有量も少ない。88は暗赤褐色を、89は暗褐色を、90・92は淡褐色を呈する。

高坏

93は残存高6.6cmを測る。内外面ユビオサエとナデで調整する。胎土は3mm程度の長石粒を多く含み、暗褐色を呈する。

黒色粘土出土土器 (Fig.126)

壺 (95~98)、甕 (99・100) が出土した。

壺

95は復元口径16.9cm、残存高7.7cmを測る。頸部はやや直立し、口縁部は比較的急に開いた後丸く納める。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが外面には横方向のヘラミガキが残る。頸部には5条のヘラ描き沈線を施した後沈線周辺を掻き取り、削り出し突帯状に仕上げる。96は復元口径19.9cm、残存高6.4cmを測る。口縁部は比較的急に開き、端部に面を持つ。表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、内面僅かに横方向のヘラミガキが残る。97は復元底径6.6cm、残存高3.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部は円板状を呈し、底部と体部の境界にはヘラ状工具により沈線が施される。内外面ナデ調整を施す。98は復元底径7.8cm、残存高3.2cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面は広く窪む。内面は表面の劣化が著しく、調整等は不明であるが、外面横方向のヘラミガキを施す。体部下端にヘラ状工具による2条の沈線を施す。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、97・98は暗褐色を呈する。

甕

99は残存高4.2cmを測る如意状口縁のもので、強く外反する口縁部と直線的な体部を有する。キザミ及び沈線を持たない。表面劣化のため調整等不明である。100は残存高3.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、土縁状の口縁部を有する。口唇部にはキザミを、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を行う。暗灰色粘土出土のもの (78) と同一個体である可能性がある。胎土は99が径3mm程度の長石粒を多く含み黒褐色を、100は砂粒が少なく淡褐色を呈する。

灰白色地山ブロック土出土土器 (Fig.126)

甕 (101) が出土した。

101は残存高4.3cmを測る如意状口縁を呈するものである。弱く外反する口縁部を有し、口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を施す。胎土は径5mm前後の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。表面劣化のため調整は不明である。

石器 (Fig.127~130)

黒褐色粘質土出土石器 (Fig.127~129)

石鏃 (102~107・109・110)、石鎌木製品 (108)、石錐 (111・112)、石匙 (113)、スクレイパー (114)、磨製石包丁 (115)、打製石包丁 (116~119)、楔形石器 (120)、柱状片刃石斧 (121)、籠き石 (122)、石皿 (123) が出土

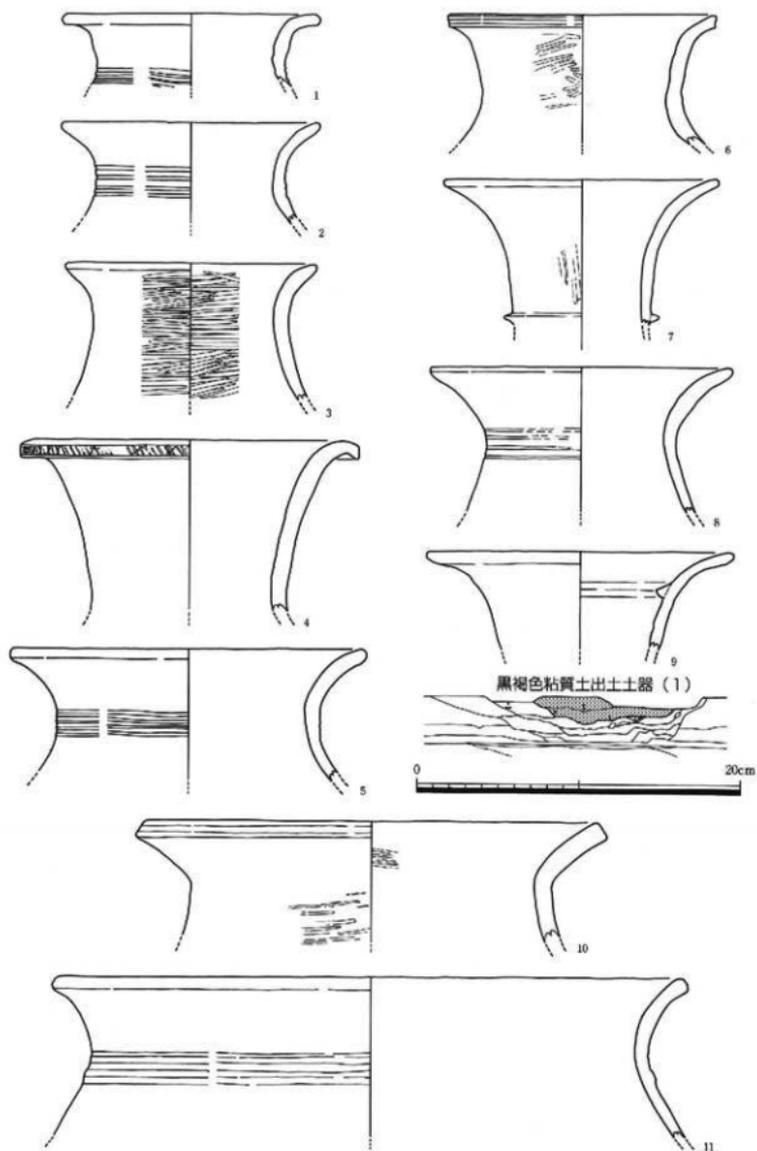
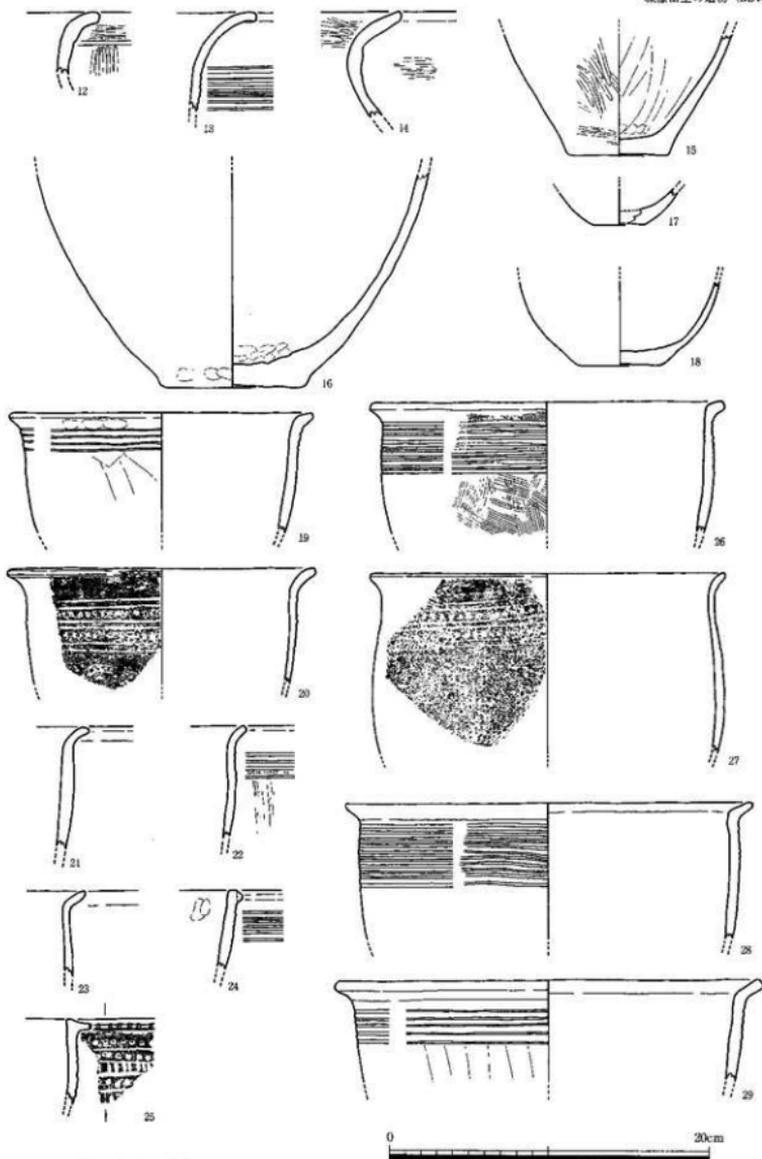


Fig.121 SD167出土器 (1) (S=1/3)



黒褐色粘質土出土器 (2)

Fig.122 SD167出土土器 (2) (S=1/3)

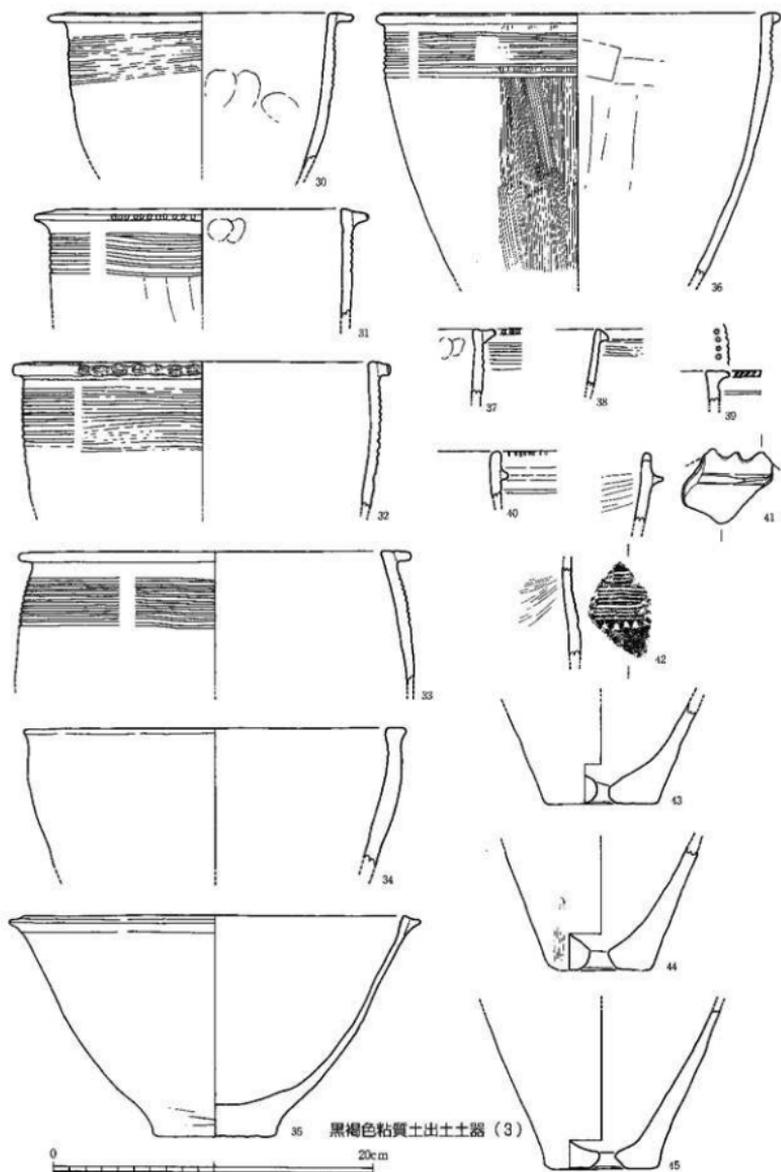


Fig.123 SD167出土土器 (3) (S=1/3)

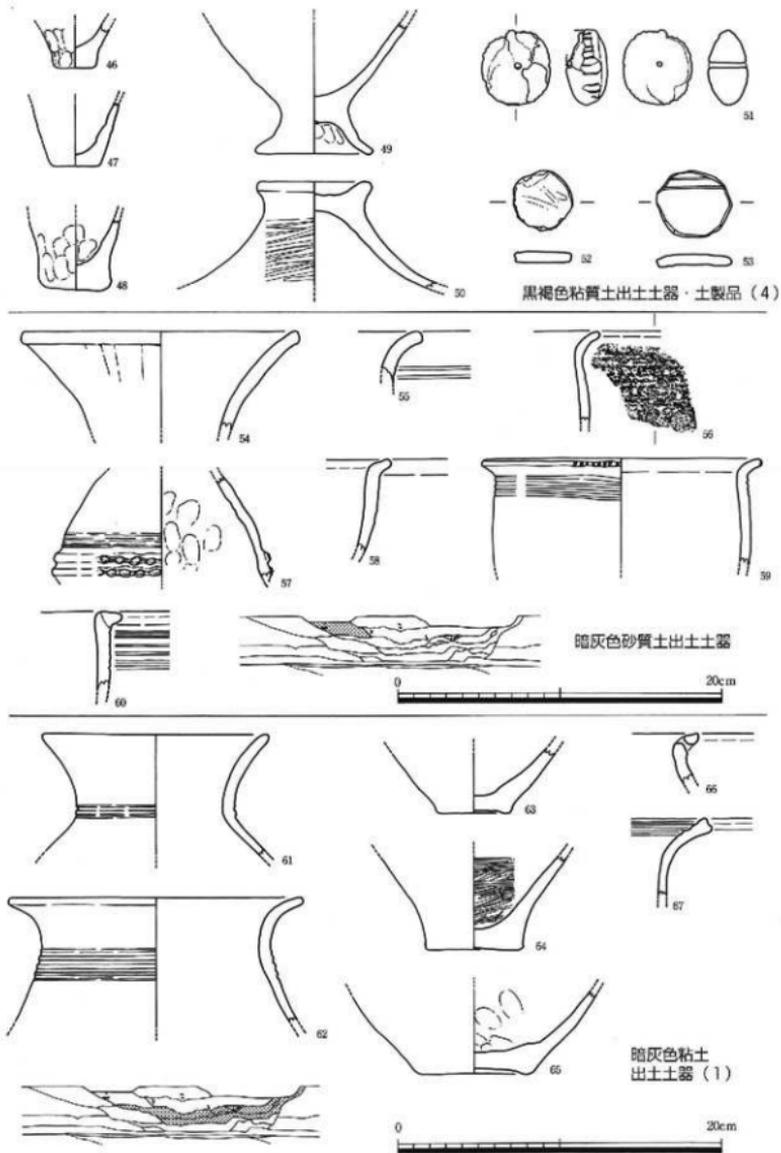


Fig.124 SD167出土土器・土製品 (4) (S=1/3)

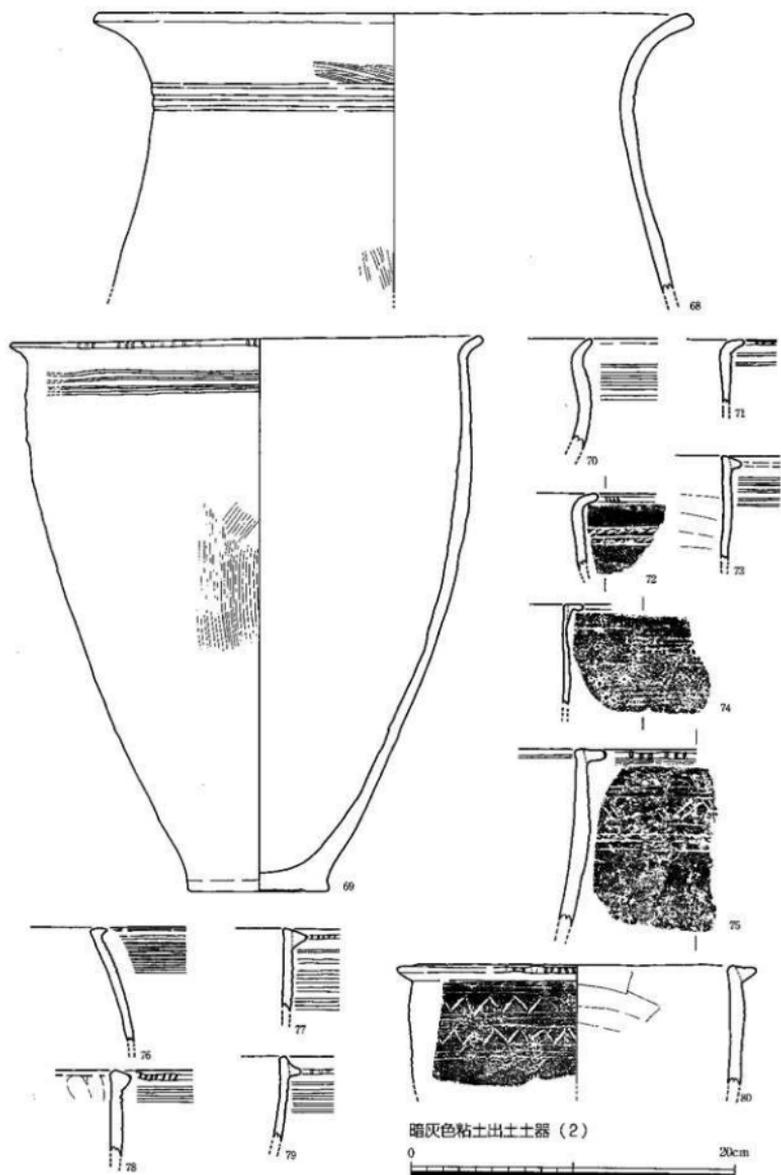


Fig.125 SD167出土土器 (5) (S=1/3)

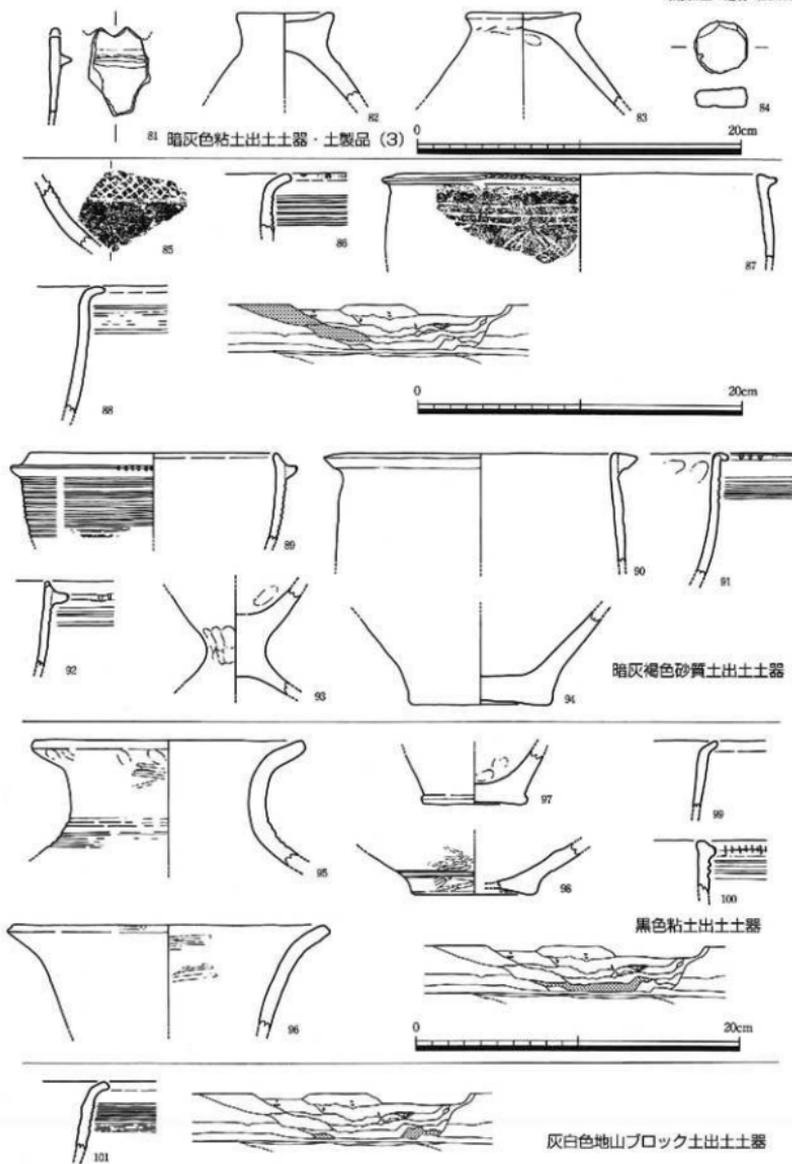
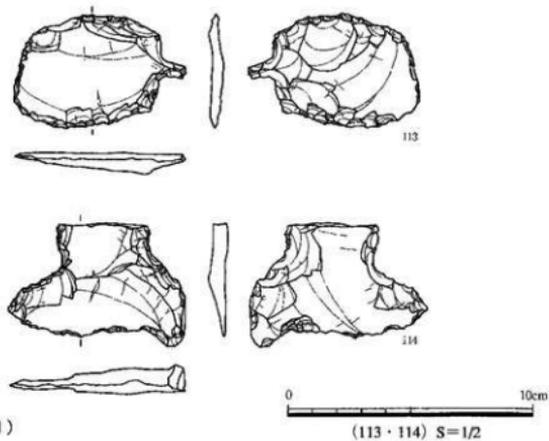
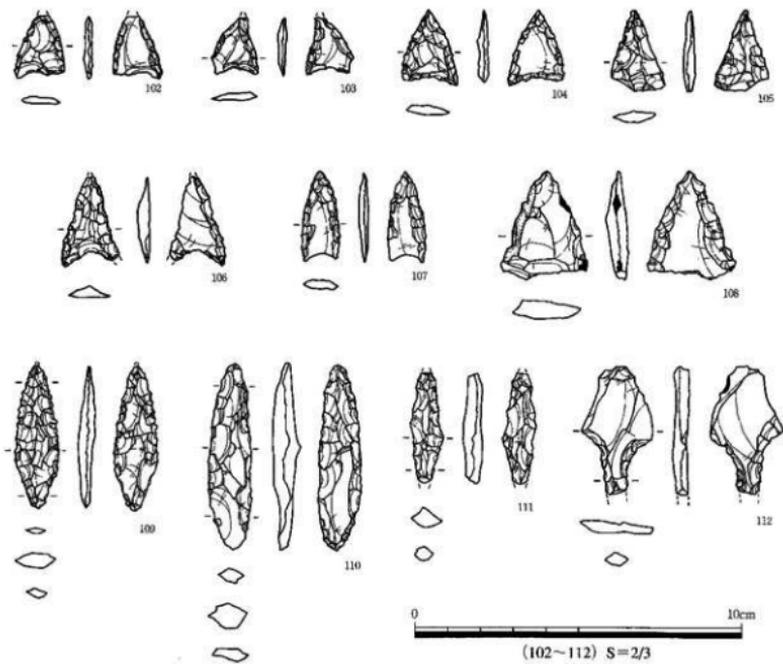
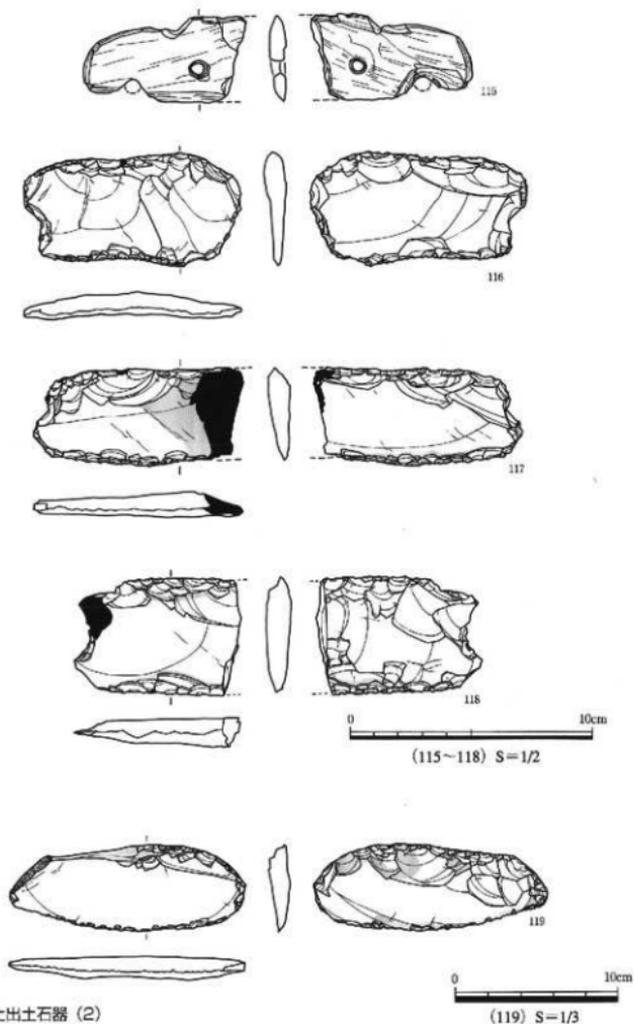


Fig.126 SD167出土土器・土製品 (6) (S=1/3)



黑褐色粘質土出土石器 (1)

Fig.127 SD167出土石器 (1)



黒褐色粘質土出土石器 (2)

Fig.128 SD167出土石器 (2)

した。

石鏃

石材はすべてサヌカイトである。102は凹基式の石鏃であるが、一方の逆刺は作り出されていないため平基式と

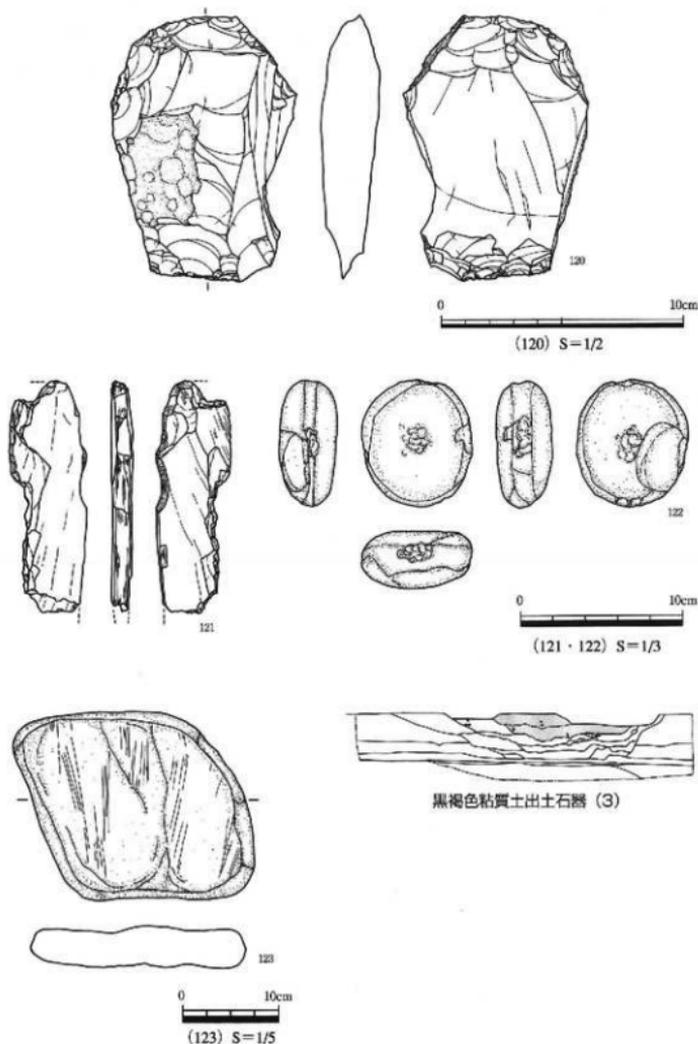


Fig.129 SD167出土石器 (3)

も考えられる。腹面に素材面を残す。先端を折損し、最大長(1.9cm)、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重量(0.8g)である。103は平基式の石鏃である。両面に素材面を残す。先端を欠損し、最大長(1.7cm)、最大幅1.4cm、最大厚0.3cm、重量(0.6g)を測る。104は平基式の石鏃である。腹面に素材面を残している。完形で最大長2.3cm、最大幅

1.7cm、最大厚0.3cm、重量1.0gを測る。105は平基式の石鏃である。全面に調整が施され、基部を折損する。最大長2.5cm、最大幅(1.8cm)、最大厚0.5cm、重量(1.0g)である。106は凹基式の石鏃である。素材面を残し、切先と逆刺の先端を折損する。最大長(2.8cm)、最大幅1.8cm、最大厚3.5cm、重量(1.1g)を測る。107は平基式の石鏃である。背腹両面に素材面をのこす。基部は折れ面で、側縁の調整が折れ面を切っていることから素材の段階から折れていたと考えられる。最大長2.8cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重量0.8gで完形である。109は凸基式の大型の石鏃である。両面を調整しており、刃部は2~3mmの鋸歯状に調整されている。先端を欠損し、最大長(4.4cm)、最大幅1.4cm、最大厚0.6cm、重量(2.1g)を測る。110は凸基式の大型の石鏃である。両面を調整するが、先端は折損している。石鏃の可能性も考えられる。最大長(5.7cm)、最大幅1.8cm、最大厚0.9cm、重量(5.1g)を測る。

石鏃未製品

108は自然面を残すが、切先と側縁には調整が施されている。基部は折損しており、調整は施されていない。最大長3.4cm、最大幅2.7cm、最大厚0.7cm、重量5.0gで、石材はサヌカイトである。

石錐

石錐はすべてサヌカイトである。111は頭部と錐部の境がなく、ほぼ一定の幅を持つ棒状の石錐である。両刃部を折損している。最大長(3.4cm)、最大幅1.4cm、最大厚0.6cm、重量(1.8g)を測る。112は頭部と錐部の境が明瞭で、錐部が細長い石錐である。背腹両面に素材面を残している。刃部を折損する。最大長(3.9cm)、最大幅2.2cm、最大厚0.6cm、重量(3.1g)を測る。

石匙

113はつまみが刃部側に向く形態と考えられるが、縦長の形態の可能性も考えられる。両面に素材面を残し、刃部には両面調整を施す。背部に折損面がみられる。完形で最大長4.7cm、最大幅7.0cm、最大厚0.8cm、重量22.2gを測る。石材はサヌカイトである。

スクレイパー

114は両側に抉りを持つスクレイパーである。素材面を残し、刃部は両面調整が施されている。基部を折損する。最大長(5.0cm)、最大幅7.2cm、最大厚1.2cm、重量(31.4g)で、石材はサヌカイトである。

磨製石包丁

115は磨製石包丁であるが、紐部の位置が不自然であるため、石剣・石戈からの転用の可能性が考えられる。背部は研磨によって作り出され、刃部は片刃で横方向に擦痕がみられる。最大長(6.7cm)、最大幅3.5cm、最大厚(0.8cm)、重量(24.2g)を測り、石材は青色結晶片岩である。青色の結晶片岩製の遺物は中の池遺跡ではこの石包丁のみであり、製作の際に石材が選択されている可能性が考えられる。

打製石包丁

石材はすべてサヌカイトである。116は片側に抉りをもつ打製石包丁である。背部には刃潰し加工が、刃部は直線状に両面調整が施されている。刃部の磨減は著しい。完形で最大長9.0cm、最大幅4.7cm、最大厚1.1cm、重量44.4gである。117は抉りをもつ打製石包丁である。背部に刃潰し加工、刃部は直線状に両面調整が施されている。背面の背部から体部にかけて、腹面の刃部に弱い光沢面がみられる。欠損しており、最大長(8.7cm)、最大幅4.1cm、最大厚0.9cm、重量(38.1g)を測る。118は抉りを持つ打製石包丁である。背部に刃潰し加工が、刃部に粗い両面調整が施されている。背部付近に弱い光沢面がみられる。折損しており、最大長(6.9cm)、最大幅4.8cm、最大厚1.2cm、重量(45.9g)である。119は抉りをもたない大型の打製石包丁である。背部には研磨による刃潰し加工が施され、刃部は明瞭に作り出されていない。背面背部と腹面背部付近および刃部に弱い光沢面がみられる。側辺部に自然面が残る。完形で最大長13.7cm、最大幅5.4cm、最大厚1.5cm、重量107.0gを測る。

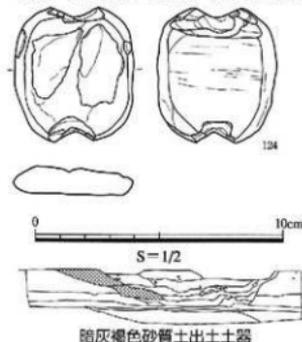


Fig.130 SD167出土石器 (4)

楔形石器

120は板状薄片を素材とし、両側面の折れ面は不純物で折損したと考えられる。背面体部と側面の一部に自然面が残る。最大長10.9cm、最大幅7.7cm、最大厚2.4cm、重量241.0gで、石材はサヌカイトである。

柱状片刃石斧

121は挟りをもつ柱状片刃石斧である。挟りは丁寧な研磨によって作り出されている。石理に沿って剥離しており、全体の形状は復元できない。最大長(14.4cm)、最大幅(4.8cm)、最大厚(1.4cm)、重量(120.5g)を測り、石材は緑白色の結晶片岩である。

敲き石

122は側面と両面に敲打痕を有する。最大長7.8cm、最大幅6.9cm、最大厚3.6cm、重量243.0gで、石材は軟質の砂岩である。

石皿

123は表面に2面の皿部があり、それぞれに捺痕が確認できる。最大長19.3cm、最大幅24.9cm、最大厚4.3cm、重量3010.0gで石材は硬質の砂岩である。

暗灰褐色砂質土出土石器 (Fig.130)

打欠石鏃(124)が出土した。

124は緑白色の結晶片岩の扁平な石を打ち欠いている。完形で最大長5.5cm、最大幅4.8cm、最大厚1.2cm、重量51.6gである。

第3項 その他の弥生時代の溝出土遺物

SD131出土遺物

土器・土製品 (Fig.131)

黒灰色細砂・暗褐色細砂出土土器・土製品 (Fig.131)

壺(2~5)、甕(1・6~10)、甕蓋(11)、鉢(12・13)、土製円板(14・15)が出土した。

壺

2は復元底径8.3cm、残存高7.4cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。3は底径9.0cm、残存高6.0cmを測り、緩やかに内凹しながら開く体部を有する。外面は表面劣化が著しく調整等不明であるが、内面にはナデ調整を施す。4は復元頸部径17.4cm、残存高8.9cmを測る。口縁部は「く」字状に開き、口頸部境界に削り出しによる段を持つ。外面縦方向の板状工具によるナデの後横方向のヘラミガキを、内面口縁部に横方向のヘラミガキを行う。5は広く開く口縁部の破片である。残存高4.1cmを測る。口縁端部に面を持ち、1条の沈線を施す。表面の劣化が著しく調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈するものが大半であるが、2・5はやや粒子が小さく、含有量も少ない。4・5は淡褐色を呈する。

甕

1は復元底径6.4cm、残存高4.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化が著しく調整等は不明である。6は残存高4.8cmを測る如意状口縁のもので、短くやや強めに外反する口縁部を有する。口縁部のキザミは持たないが、口縁部直下には5条のヘラ描き沈線を施す。外面ナデ調整、内面劣化のため調整等不明である。7は残存高5.4cmを測る如意状口縁のもので、やや長く外反する口縁部を有する。口縁部劣化のためキザミの有無は不明であるが、口縁部直下には4条のヘラ描き沈線を施す。8は残存高6.3cmを測る逆「L」字状口縁のもので、口縁部上面を水平にする貼り付け口縁を有する。劣化のため口縁部のキザミの有無については不明であるが、口縁部直下には10条程度のヘラ描き沈線を施す。内外面劣化のため調整等不明である。9は残存高3.9cmを測る如意状口縁のもので、強くやや長く外反する口縁部を有する。口縁部劣化のためキザミの有無は不明であるが、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を有する。劣化のため調整等は不明である。10は残存高4.9cmを測る如意状口縁のもので、口縁部端部を欠損する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕蓋

11は天井径6.1cm、残存高6.9cmを測り、天井部外面は広く窪む。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み橙褐色を呈する。表面劣化のため調整は不明である。

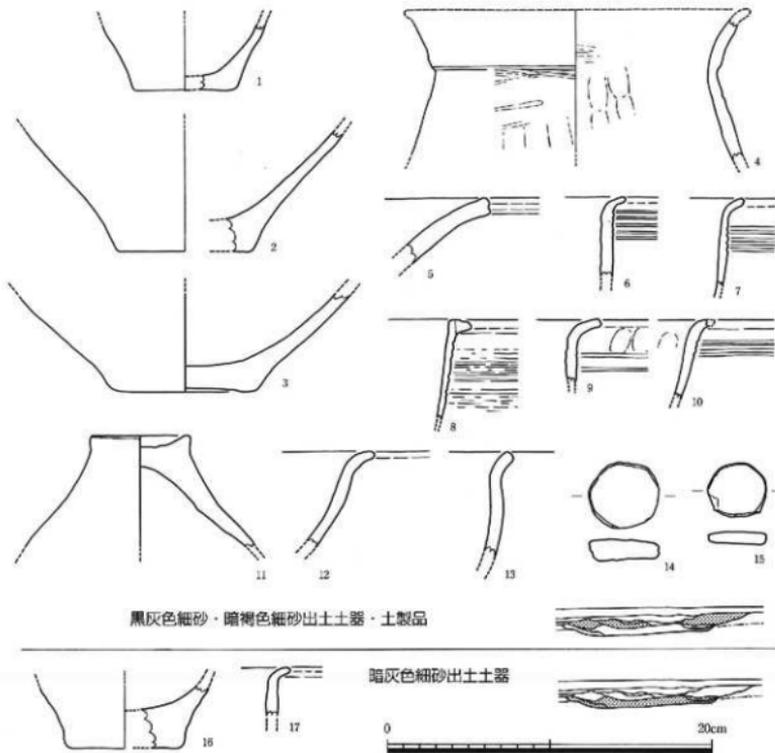


Fig.131 SDI31出土土器・土製品 (S=1/3)

鉢

12は残存高5.9cmを測る如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを持たず、口縁部直下の沈線も見られない。劣化のため外面調整等は不明であるが、内面にはナデもしくはヘラミガキの痕跡が残る。13は残存高6.8cmを測る如意状口縁のもので、弱く外反する口縁部を有する。口唇部のキザミや口縁部直下の沈線は見られない。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

土製円板

14は直径4.3cmの円形を呈し、重量21.9gを測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等を行わない。内外面表面劣化のため調整不明である。15は直径3.6cmの円形を呈し、重量11.2gを測る。土器転用のものである。周囲を打ち欠き後研磨等を行わない。内外面ナデ調整を施す。胎土は14が径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を、15が暗灰色を呈する。

暗灰色細砂出土土器 (Fig.131)

壺 (16)、甕 (17) が出土した。

蓋

16は復元底径6.6cm、残存高3.9cmを測る。底部付近は直立気味に立ち上がった後、緩やかに湾曲する体部を有し、底部と体部の境界の稜は明瞭である。劣化のため調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕

17は残存高3.0cmを測る如意状口縁のもので、やや強く短く外反する口縁部を有する。口唇部にキザミを持たず、口縁部直下の沈線も見られない。劣化のため外面調整等は不明である。胎土は径5mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

第4項 古墳時代の溝出土遺物

SD082出土遺物 (Fig.132)

須恵器蓋 (1~3) が出土した。

いずれも天井部みの破片である。残存高は1が1.5cm、2が3.5cm、3が2.2cmを測る。内面ヨコナデ、天井部外面ヘラ切りの後1・3は回転ヘラケズリ、2はヘラ切り後にヨコナデ調整を施す。2は1・3に比してやや口径が小さく、3は天井部内面に当て具痕を有する。若干の時期差を有するようであるが、1・3はローリングを受けており、2の年代観から遺構の廃絶時期を7世紀第2四半期に置くことができる。

SD084出土遺物 (Fig.132)

土師器甕 (9)、須恵器甕 (10)、弥生土器甕 (11) が出土した。

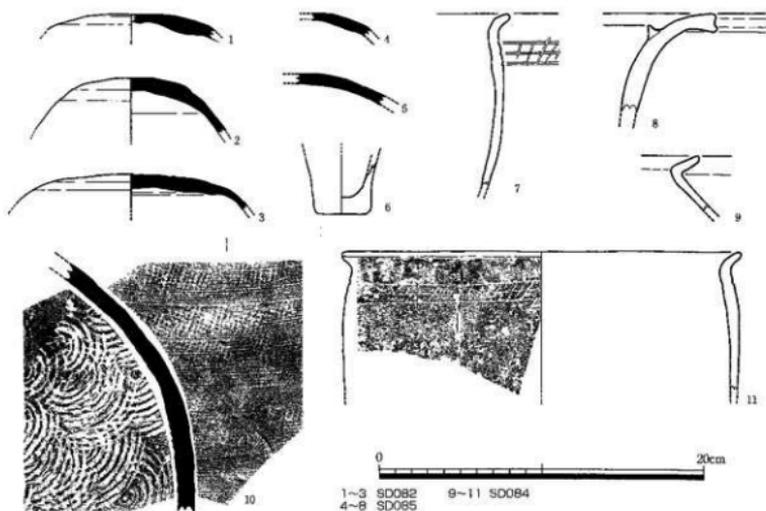


Fig.132 SD082・084・085出土土器 (S=1/3)

上師器蓋

9は「く」字状に強く屈曲する口縁部の破片である。残存高3.4cmを測る。磨減が著しく調整等は不明であるが、口縁端部がわずかに肥厚する。胎土は暗褐色を呈し、1mm程度の砂粒を含む。下川津式の範疇にはいると考えられるが、ローリングが著しく遺構の年代を示すものではない。

須恵器蓋

10は肩部の破片と考えられる。残存高17.3cmを測る。外面は間の細かい方格の叩き後にカキメを施す。内面は同心円の当て具痕を多数有する。胎土は砂粒が少なく精良である。

弥生土器蓋

11は復元口径24.2cm、残存高8.6cmを測り、短く屈曲する口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線とそれを切るタテ方向の条線を有する。後述するSD085川土のもの(7)と接合する。胎土は暗褐色を呈し、3mm程度の長石粒を多量に含む。

SD085出土遺物 (Fig.132)

須恵器蓋 (4・5)、弥生土器ミニチュア (6)、弥生土器蓋 (7)、弥生土器蓋 (8) が出土した。

須恵器蓋

4・5はいずれも天井部の破片である。残存高は4が1.4cm、5が1.9cmを測る。内面ヨコナデ調整を行う。5は天井部外面回転ヘラケズリを行うが、4はヨコナデ調整を施す。5は4に比して口径が大きいが、具体的な数字は不明である。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。

弥生土器ミニチュア

6は底径3.4cm、残存高3.3cmを測る。壺のミニチュアと考えられる。胎土は3mm程度の長石粒を少量含む。

弥生土器蓋

7は短く屈曲する口縁部を有する。口縁部直下には3条のヘラ描き沈線とそれを切るタテ方向の条線を有する。SD084出土のもの(11)と接合する。

弥生土器蓋

8は残存高6.0cmを測り、広く開く口縁部を有し、口縁端部に向を持つ。口唇部には1条の沈線を、口縁部内面には1条の貼り付け突帯を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

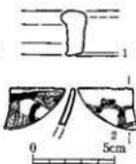


Fig.133 SD141
出土土器
(S=1/3)

第5項 古代以降の溝出土遺物

SD141出土遺物 (Fig.133)

瓦質土器 (1)、染付皿 (2) が出土した。

瓦質土器

1は器種不明である。残存高2.8cmを測る輪状のもので、一部被熱痕を有する。行灯などが考えられるが破片のため不明である。

染付皿

2は残存高2.5cmを測る。口縁端部は輪花状を呈するものと考えられる。呉須の発色は良好でない。波佐見窯の18世紀後半のものと考えられる。

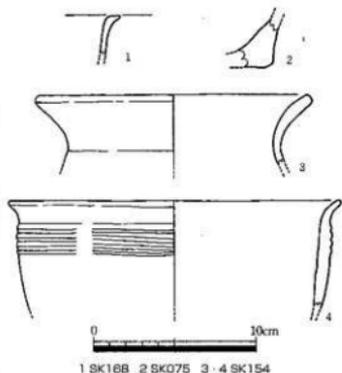


Fig.134 土坑出土土器 (S=1/3)

第6項 土坑出土の遺物

SK075出土遺物 (Fig.134)

弥生土器 (2) が出土した。

底部の破片で、壺と考えられるが破片のため詳細は不明である。残存高3.0cmを測る。表面劣化のため調整についても不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多く含み淡褐色を呈する。

SK168出土遺物 (Fig.134)

弥生土器甕 (1) が出土した。

残存高2.4cmを測る。口縁内面に後を持ち、一見逆「L」字状口縁を呈する。口唇部のキザミや、口縁直下の沈線は表面劣化のため確認できない。表面劣化のため調整等についても不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み暗褐色を呈する。

SK154出土遺物 (Fig.134)

弥生土器壺 (3)、甕 (4) が出土した。

壺

3は復元口径17.0cm、残存高4.4cmを測る。頸部から口縁部にかけてやや広く開き、端部に面を持つ。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多量に含み赤色酸化土粒を少量含む。

甕

4は復元口径20.3cm、残存高6.5cmを測る如意状口縁のもので、口縁部を短く弱く屈曲させる。口唇部のキザミは見られないが、口縁直下には3条のヘラ描き沈線を施す。沈線周辺を掻き取る事によって削り出し突帯状に成形する。内面劣化の為調整等不明で、外面には板状工具によるナデ調整を施す。

SK185出土遺物 (Fig.135)

弥生土器壺 (1~7)、甕 (8~11)、甕 (12) が出土した。

壺

1は残存高4.5cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、端部に面を持つ。内面表面の劣化が著しく調整等は不明であるが、外面にはヘラミガキを施す。頸部にはキザミを持つ1条の削り出し突帯を有する。2は残存高2.1cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲して開き、端部に面を持つ。口唇部には1条の沈線を有する。表面の劣化が著しく内面調整等は不明であるが、外面にはヘラミガキを施す。3は復元底径6.6cm、残存高2.4cmを測る。表面の劣化が著しく調整等は不明である。4は復元底径5.2cm、残存高3.6cmを測り、直立気味に立ち上がった後直線的に開く体部を有する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。5は底径6.3cm、残存高3.2cmを測る。表面の劣化が著しく調整等は不明である。6は底径7.2cm、残存高5.5cmを測り、体部は直線的に開く。表面の劣化が著しく調整等は不明である。7は底径8.2cm、残存高4.5cmを測り、底部は広く含む。体部は広く開く。表面の劣化が著しく調整等は不

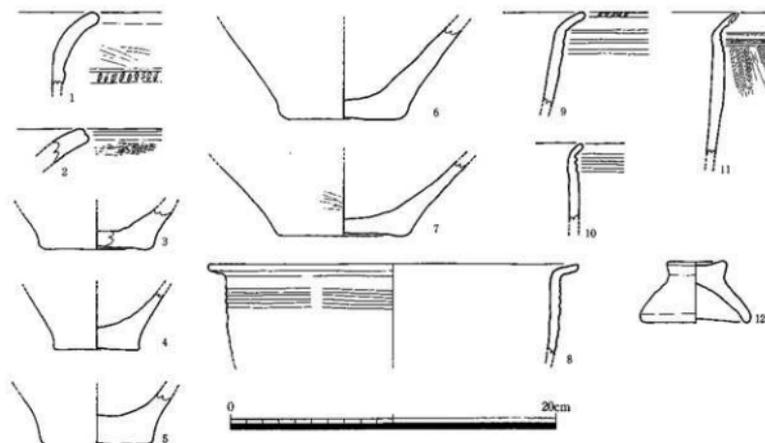


Fig.135 SK185出土土器 (S=1/3)

明であるが、外面にはわずかにヘラミガキの痕跡が見られる。胎土はいずれも径5mm程度の長石粒を多量に含み、褐色を呈するものである。

蓋

8は復元口径22.7cm、残存高5.7cmを測り、やや長く引き出す口縁部を有する。体部は直線的に開く。I口唇部のキザミは見られないが、I口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。9は残存高5.7cmを測る如意状のI口縁部を有する。I口縁部は弱く長く屈曲する。口唇部にはキザミを口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。10は残存高4.9cmを測る如意状口縁のものである。短く屈曲させるI口縁部を有し、口唇部のキザミは見られないが、I口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内外面ナデ調整を施す。11は残存高8.8cmを測る如意状口縁のものである。屈曲した後長く伸びる口唇部を有し、口唇部のキザミの有無は不明だが、口縁部直下には3条のヘラ描き沈線を施す。内面劣化のため調整不明であるが、外面縦方向のハケ調整を施す。胎土はいずれも径5mm程度の砂粒を多量に含み、8・10は褐色、9・11は暗褐色を呈する。

釜

12はI径6.6cm、器高3.8cm、天井部径3.2cmを測る小型品である。天井部外面はやや広く窪む。内外面表面劣化のため調整等不明である。胎土は2mm程度の砂粒をやや多く含み褐色を呈する。

第7項 柱穴ほか出土の遺物

SA049・050出土遺物 (Fig.136)

弥生土器釜(1~3)が出土した。

1は底径5.0cm、残存高1.2cmを測る底部の破片である。SA050出土である。2は復元底径7.4cm、残存高4.7cmを測り、竪立気味に立ち上がった後広く

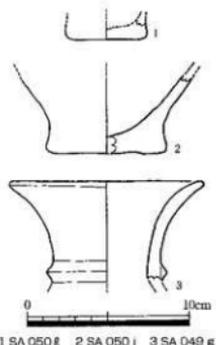


Fig.136 SA049・050出土土器 (S=1/3)

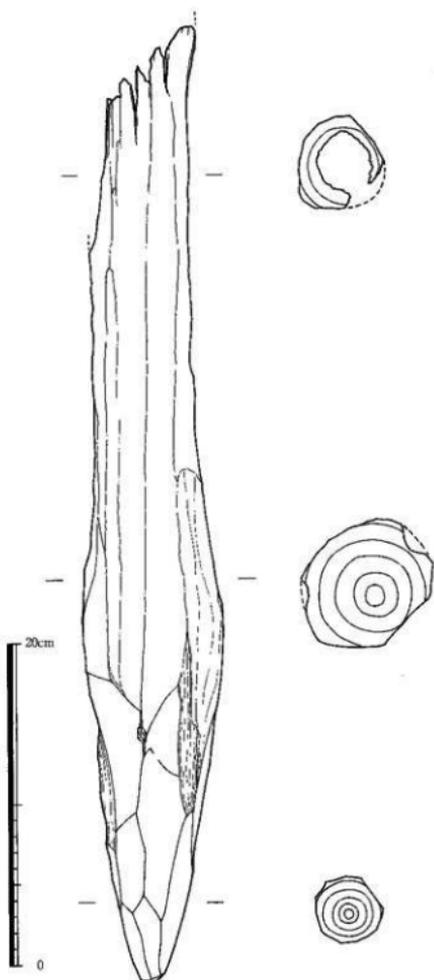


Fig.137 SX197出土土坑 (S=1/3)

開く体部を有する。内外面表面劣化のため調整等是不明である。SA050 j 出土である。3は復元口径12.0cm、残存高6.2cmを測り、広くラッパ形に開く口縁部を有する。頸部には1条の貼り付け突帯を施す。SA049 g 出土である。胎土はいずれも3mm程度の長石粒を多量に含み、1・2は橙褐色、3は暗褐色を呈する。

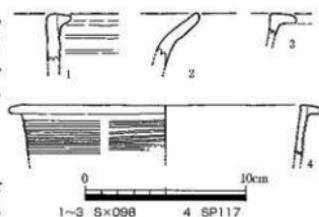


Fig.138 SX098・SP117出土土器

(S=1/3)

SX197出土土物 (Fig.137)

杭が出土した。残存長59.3cm、最大幅8.8cmを測り、先端を尖らせる。先端の加工痕は比較的明確で単位も大きい。コナラ節の芯持ち材である。

SP117出土土物 (Fig.138)

弥生土器甕 (4) が出土した。復元口径19.3cm、残存高3.1cmを測る逆「L」字状口縁を有するもので、水平にのびる断面四角形の貼り付け口縁を有する。1]唇部にキザミは持たないが、口縁部直下には7条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等是不明である。胎土は3mm程度の長石粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

SX098出土土物 (Fig.138)

弥生土器甕 (1・3)、壺 (2) が出土した。

甕

1は残存高3.0cmを測る逆「L」字状口縁のもので、断面三角形の口縁部を貼り付ける。口唇部のキザミは見られないが、口縁部直下には2条のヘラ描き沈線を施す。内外面表面劣化のため調整等是不明である。3は残存高1.4cmを測る逆「L」字状口縁を呈するもので、口唇部のキザミは見られない。口縁部直下の沈線については不明である。胎土はいずれも3mm程度の砂粒・赤色酸化土粒を含み、褐色を呈する。

壺

2は残存高3.2cmを測り、緩やかに開く口縁部の破片である。口縁端部をわずかにつまみ上げる。内外面調整等是不明である。胎土は3mm程度の砂粒を含み、淡赤灰色を呈する。

第2節 南区出土の遺物

第1項 溝出土の遺物

SD209出土土物 (Fig.139)

黄灰色粘土出土土物

弥生土器甕 (1・2) が出土した。

1は底径10.0cm、残存高4.3cmを測り、比較的急に立ち上がる体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等是不明である。2は残存高5.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等是不明である。胎土はいずれも3mm程度の砂粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

暗灰色細砂出土土物

弥生土器甕 (3~5) が出土した。

3は底部付近の破片である。残存高5.3cmを測る。残存する部分が少なく、詳細は不明である。調整等も表面劣化のため不明である。4は残存高3.2cmを測り、緩やかに開く体部を有する。表面劣化のため調整等是不明である。5は残存高3.7cmを測り、比較的強く立ち上がる体部を有する。表面劣化のため調整等是不明である。胎土はいずれも3mm程度の砂粒を多く含み、3は淡褐色、4・5は褐色を呈する。

灰褐色細砂出土土物

弥生土器甕 (6・7) が出土した。

6は底径8.6cm、残存高10.4cm、胴部最大径17.2cmを測る。胴部の張りは強く、表面劣化のため内外面調整等是不明である。7は復元底径10.8cm、残存高9.4cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等是不明である。胎土は6は砂粒が少なく淡褐色を呈する。7は3mm程度の砂粒を多く含み、橙

褐色を呈する。

暗灰褐色砂出土遺物

弥生土器甕 (8) が出土した。

復元底径7.8cm、残存高4.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み、黒褐色を呈する。

出土層位不明の遺物

断ち割り内より出土した遺物である。壺 (9) と甕 (10) が出土した。

弥生土器壺

9は残存高8.5cmを測る頸部の破片である。直立した後強く開く口縁部を有し、内面に2条、外面に3条の突帯を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は径3mm程度の砂粒を多量に含み、橙褐色を呈する。

甕

10は残存高4.8cmを測る如意状と逆「L」字状の中間的な形態を有する口縁のものである。口縁部直下には1条の沈線を施しているようであるが、詳細は不明である。内面ナデ調整、外面板状工具によるナデ調整を施す。胎土は

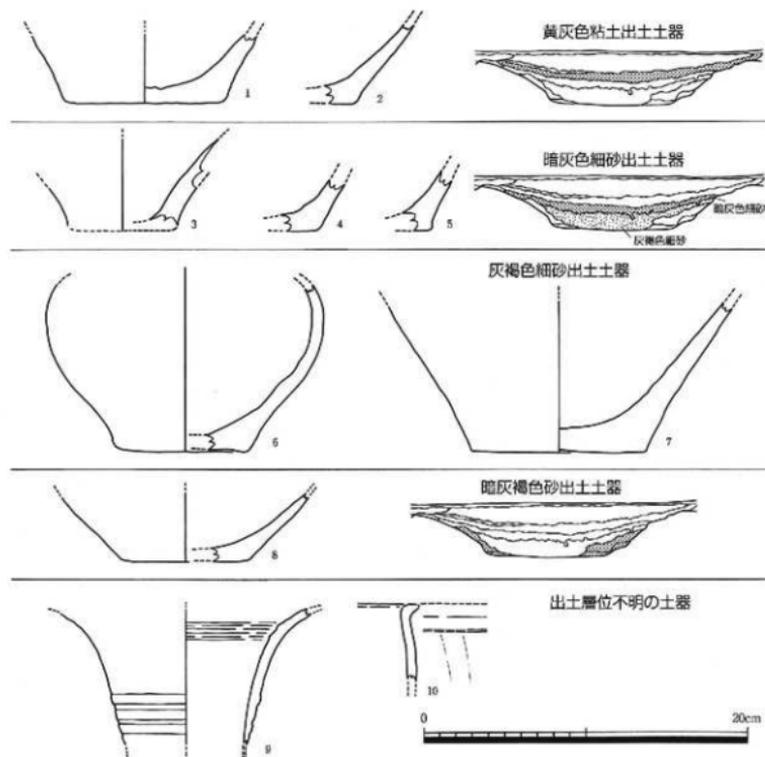


Fig.139 SD209出土土器 (S=1/3)

径3mm前後の砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。

SD210出土遺物 (Fig.140)

須恵器坏 (1)、須恵器皿 (2) が出土した。

須恵器坏

1は復元底径9.3cm、残存高3.3cmを測り、直線的な体部と平坦な底部、低い断面四角形の貼り付け高台を有する。内外面ヨコナデ調整、底部外面ヘラ切りの後ヨコナデを施す。8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

須恵器皿

2は復元底径11.0cm、残存高0.9cmを測る。平坦な底部と広く開く体部を有し、内外面ヨコナデ調整、底部外面ヘラ切り後ヨコナデ調整を施す。8世紀末～9世紀初頭のものと考えられる。

第2項 水田域の出土遺物

土器・土製品 (Fig.141)

黒色粘土出土土器

須恵器坏 (1)、弥生土器壺 (2)、古式土師器甕 (3) が出土した。

須恵器坏

1は復元底径8.0cmを測り、平坦な底部を有する。内面ヨコナデ、外面ヘラ切りの後ヨコナデ調整を施す。

弥生土器壺

2は復元底径8.7cm、残存高3.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

古式土師器甕

3は残存高8.1cmを測り、球形形を呈する。器壁は2～3mmと薄手で、口縁部は強く屈曲する。内面板状工具によるナデ調整を行うが、外面調整は不明である。下川津式の範疇に収まると考える。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み褐色を呈する。

赤灰色粘土出土土器

弥生土器壺 (4)、甕 (5～7)、甕蓋 (8) が出土した。

壺

4は残存高2.3cmを測り、緩やかに開く口縁部を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。胎土は砂粒少なく暗褐色を呈する。

甕

5は底径4.4cm、残存高3.9cmを測る小型のものである。比較的直線的に立ち上がる体部を有する。表面劣化のため調整等は不明である。6は復元底径6.8cm、残存高3.8cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、表面劣化のために調整等は不明である。7は底径5.3cm、残存高2.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。胎土いずれも3mm程度の砂粒多く含み橙褐色を呈する。

甕蓋

8は天井部径5.7cm、残存高5.3cmを測る。2次焼成を受けており、調整等詳細は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

暗赤灰色粘土出土土器

弥生土器壺 (9～11) が出土した。

9は底径9.9cm、残存高2.6cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。内面ナデ調整、外面ヘラミガキを施す。10は復元底径10.0cm、残存高3.4cmを測り、緩やかに開く体部を有する。円板状の底部を有し、内外面ナデ調整を施す。11は復元底径5.9cm、残存高3.6cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。表面の劣化が著しく、調整等は不明である。いずれも胎土は3mm程度の砂粒を多く含み橙褐色を呈する。

暗黄褐色細砂出土土器・土製品

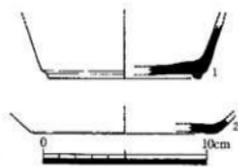


Fig.140 SD210出土土器
(S=1/3)

弥生土器壺 (12~14)、阿甕 (15・16)、土製円板 (17) が出土した。

壺

12は復元底径6.0cm、残存高5.4cmを測り、直立気味に立ち上がった後直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面板状工具によるナデ調整、外面密なヘラミガキを施す。13は復元底径8.2cm、残存高4.1cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面密なヘラミガキを施す。14は復元底径10.0cm、残存高4.0cmを測り、広く開く体部を有する。底部の稜は不明瞭で、外底面ドーナツ状にやや窪む。内底面には板状工具によるナデ調整を施すが、外面調整は表面劣化のため調整不明である。胎土は、13・14は3mm程度の砂粒を多く含む橙褐色を呈するが、12は灰褐色を呈し砂粒少ない。

甕

15は底径8.2cm、残存高4.3cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面板状工具によるナデ調整を施す。16は復元底径6.5cm、残存高3.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。外面板状工具によるナデ調整を施すが、内面調整は表面劣化のため不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む橙褐色を呈する。

土製円板

17は土器転用の円板である。直径3.4cm、厚さ1.1cm、重量10.2gを測り、周州を打ち欠きした後研磨する。胎土は径2mmの長石粒を少量含み、暗褐色を呈する。表面の劣化が著しく調整等は不明である。胎土は3mm程度の砂粒を多く含む橙褐色を呈する。

石器 (Fig.142~143)

黒色粘土出土石器 (Fig.142)

石鏃 (18)、環状石斧 (19) が出土した。

石鏃

18は平基式の石鏃である。腹面に素材面を残す。切先と側縁の一部を欠損する。最大長 (1.9cm)、最大幅1.5cm、最大厚3.5cm、重量 (0.8g) で、石材はサヌカイトである。

環状石斧

19は環状石斧である。2つ以上の突起をもつと考えられるが、欠損・磨滅しており、形態或使用痕は不明である。最大長 (9.2cm)、最大幅 (5.8cm)、最大厚 (3.0cm)、重量 (170.6g)。石材は砂岩である。

赤灰色粘土出土石器 (Fig.142)

打製石包丁 (20) が出土した。

20は抉りのない打製石包丁である。背部には刃潰し加工を施し、刃部はやや明瞭さに欠く両面調整を施して外湾刃に仕上げている。背部および腹面刃部に光沢面がみられる。最大長12.9cm、最大幅5.2cm、最大厚1.2cm、重量68.1gを測り、石材はサヌカイトである。

暗赤灰色粘土出土石器 (Fig.142)

磨製石包丁 (21)、砥石 (22) が出土した。

磨製石包丁

21は背部・刃部ともに直線的で、全体が長方形を呈する磨製石包丁である。両面に刃部を作り出す。刃部には斜め横方向の擦痕がみられる。欠損しており、最大長 (9.5cm)、最大幅4.9cm、最大厚0.8cm、重量 (58.3g) で、石材は安山岩である。

砥石

22は砥石と考えられる。21の磨製石包丁とセットで出土した。全体に磨滅しており、擦痕は確認できない。最大長7.1cm、最大幅5.1cm、最大厚5.1cm、重量334.0gを測り、石材は安山岩系の岩石であると考慮される。

暗黄褐色細砂出土石器 (Fig.143)

打製石包丁 (23) が出土した。

23は片方に抉りをもつ打製石包丁である。縦長の剥片素材とする。背部は折れ面で、目立った加工はみられない。刃部は両面調整されている。側面に自然面を有する。最大長11.7cm、最大幅4.7cm、最大厚1.0cm、重量54.8gで完形である。石材はサヌカイトである。

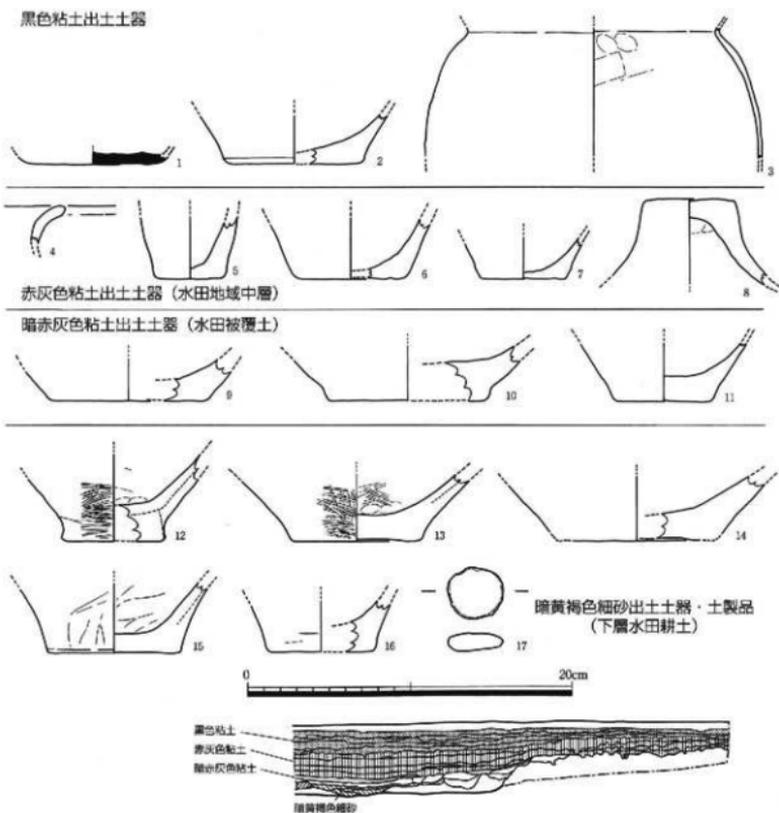


Fig.141 水田域出土土器 (S=1/3)

第3項 水田関連の溝出土遺物

SD204出土遺物 (Fig.144)

甕 (1-6, 9-12)、甕 (7)、甕蓋 (8) が出土した。

甕

1は復元口径13.4cm、残存高7.2cmを測る。口縁部は緩やかに湾曲し、端部を丸く納める。外面縦方向の細かいハケ調整の後、横方向に粗いヘラミガキを施し、内面は細かい横方向のハケ調整の後、同じく粗いヘラミガキを施す。2は底径7.8cm、残存高3.0cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面ヘラミガキを施し、底部外面にも及ぶ。体部には一部煤が付着するが、この煤は破断面まで及ぶ。土器焼成の際の失敗品である可能性もある。3は底径7.9cm、残存高3.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面に指頭圧痕を残し、外面ナデ調整を施す。4は底径7.0cm、残存高3.8cmを測り、直立気味に立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面に指頭圧痕を残し、外面ヘラミガキを施す。5は底径8.2cm、

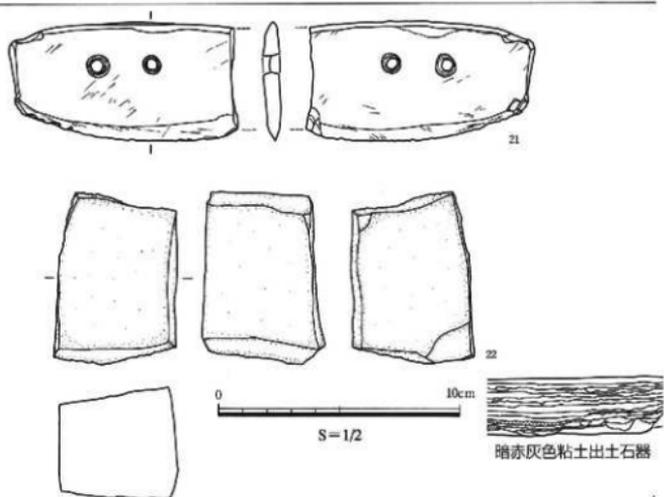
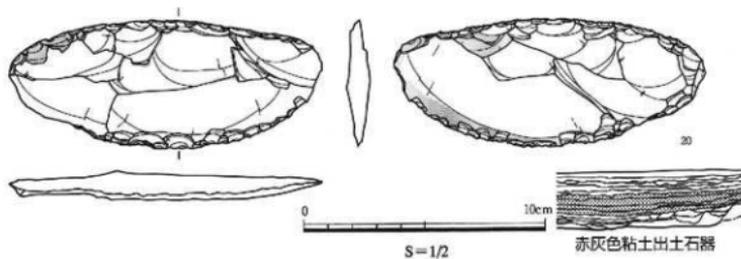
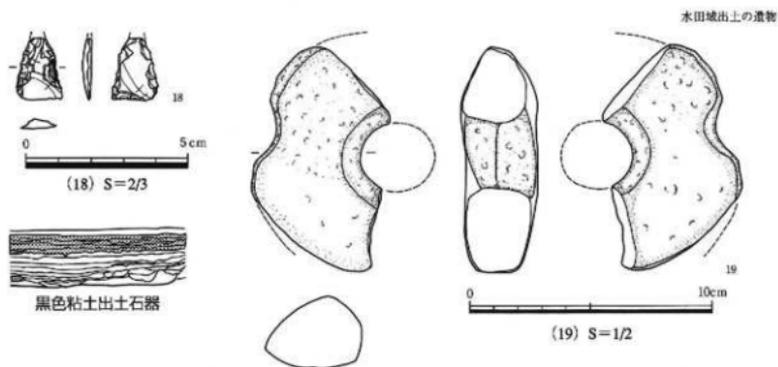


Fig.142 水田城出土石器 (1)

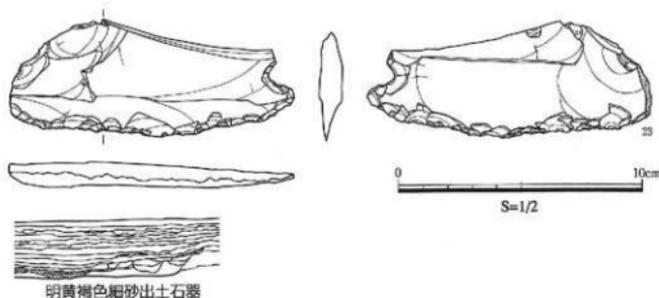


Fig.143 水田域出土石器 (2)

残存高3.9cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内外面表面劣化のため調整等は不明である。6は残存高2.5cmを測り、やや強く開く口縁部を有する。口縁端部を丸く納め、内外面ナア調整を施す。9は復元底径7.6cm、残存高2.7cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内底面には指頭圧痕を残し、外面ヘラミガキを施す。10は復元底径10.4cm、残存高5.0cmを測り、直立気味に立ち上がった後緩やかに開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面板状工具によるナア調整を、外面ナアの後ヘラミガキを施す。11は底径10.0cm、残存高8.4cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面には指頭圧痕を残し、外面ヘラミガキを施す。12は残存高3.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面ナア調整を、外面ヘラミガキを施す。いずれも胎土は径3mm前後の長石粒を含み、1・2・4~11は褐色を、3・12は暗褐色を、10は淡褐色を呈する。

甕

7は残存高2.2cmを測る如意状口縁のものである。器壁はやや得手で、比較的強く湾曲する。口唇部にはキザミを有し、内外面ナア調整を施す。外面には煤が付着する。暗灰色を呈し、胎土は比較的精良である。

甕蓋

8は残存高9.3cmを測り、広く外面が窪む天井部となだらかに開く体部を有し、内外面密にヘラミガキを施す。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み褐色を呈する。

SD205出土遺物 (Fig.145)

弥生土器甕が出土した。底径8.4cm、残存高7.0cmを測り、直線的に開く体部を有する。底部の稜は明瞭である。内面にはナア調整を、外面ヘラミガキを施す。胎土は雲母を多く含み暗褐色を呈する。

SD212出土遺物 (Fig.146)

木製品が出土した。残存長22.8cmを測り、縦・横に欠損する。端部は丁寧な面取りし、遺存は良好である。横楕と考えられる。材質は針葉樹である。

SD218出土遺物 (Fig.147)

弥生土器甕 (1~2)、甕 (3) が出土した。

甕

1は底径9.2cm、残存高5.1cmを測り、緩やかに開く体部を有する。底部の稜は不明瞭である。内底面には指頭圧痕を残すが表面の劣化が著しく、調整等は不明である。2は底径8.2cm、残存高6.1cmを測り、直立気味に立ち上がった後広く開く体部を有する。底部の稜は明瞭で、外底面広く窪む。内外面横方向のヘラミガキを施す。

甕

3は残存高4.9cmを測る。残存状況が悪く詳細については不明である。

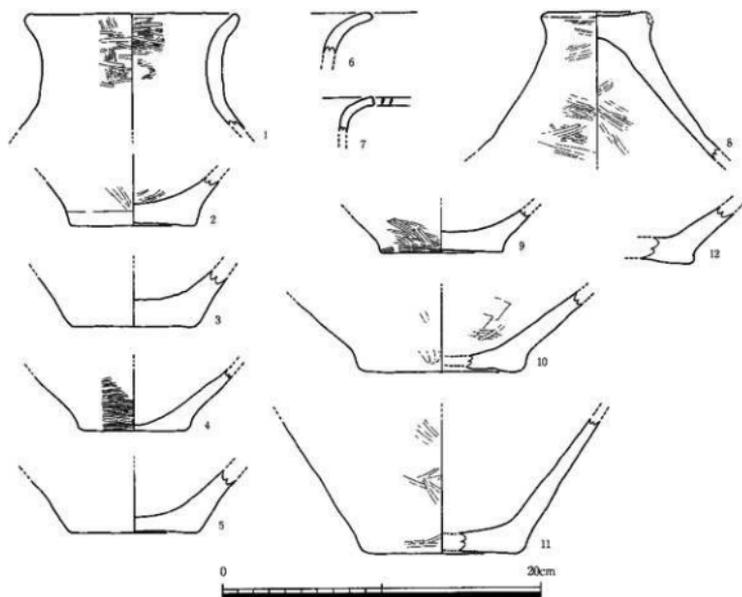


Fig.144 SD204出土土器 (S=1/3)

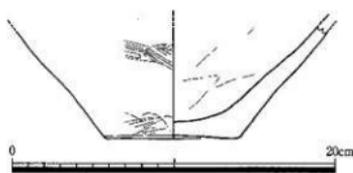


Fig.145 SD205出土土器 (S=1/3)

第4項 墓出土の遺物

ST203出土遺物 (Fig.148)

石鏃が出土した。凹基式の石鏃である。作用部の切先に近い側縁に屈曲がある。両面に素材面を残している。切先を折損する。上坑の西側底部より10cm程上面から出土。最大長(2.6cm)、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm、重量(1.1g)を測る。石材はサヌカイトである。

第5項 深掘出土の遺物 (Fig.149)

調査後、水田の基盤となった旧河道の深掘を行った。土器・石器類の出土は一切なかったが、断面図中55層相当の層中より木製品が1点出土した。長軸19.2cm、短軸6.3cm、厚さ4.4cmを測り、両端部は被熱。側縁部には加工痕を有する。器種等は不明であり、材質は広葉樹である。

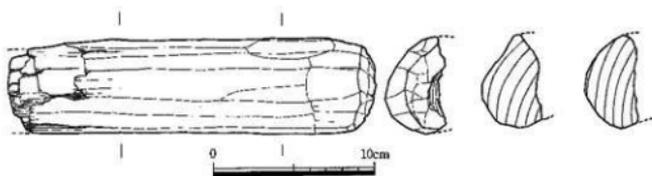


Fig.146 SD212出土木製品 (S=1/3)

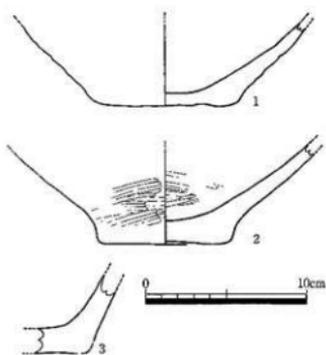


Fig.147 SD218出土土器 (S=2/3)

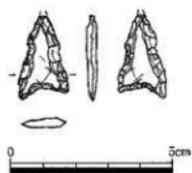


Fig.148 ST203出土石器 (S=1/3)

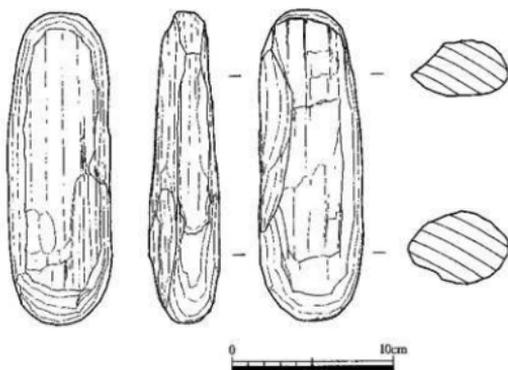


Fig.149 深掘出土木製品 (S=1/3)

第7章 自然化学分析

第1節 分析の目的と資料の採取

本調査における自然化学分析の主な目的は、1. 環濠の堆積環境の復元、2. 環濠周辺の環境復元、3. 環濠掘削時の環境復元、4. 水田遺構における耕作の確認、5. 水田における人糞尿利用の有無についての確認、を設定し、それぞれ1・2・3については珪藻分析を、1・2については花粉分析を、3・5については寄生虫卵分析を、4についてはプラントオバール分析を行った。資料の採取に当たっては、各環濠の断面観察から得られたいくつかの単位（本文中では遺物取りあげ単位として反映されている）をもとに、5cm×5cm×5cmのブロックで採取した。各採取地点はFig.29・Fig.32・Fig.150・Fig.151のとおりである。なおプラントオバール分析資料の採取にあたっては、No.1地点においては10cm毎に、No.2地点においては層位毎に採取した。

第2節 中の池遺跡における花粉分析

第1項 はじめに

種下植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布す

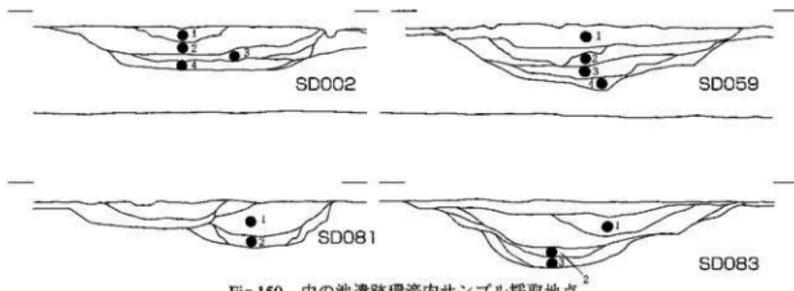


Fig.150 中の池遺跡環濠内サンプル採取地点

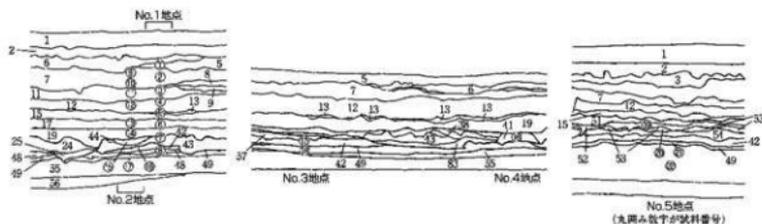


Fig.151 中の池遺跡プラント・オバールサンプル採取地点

る水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

第2項 試料

中の池遺跡、SD083 (①、②、③)、SD002 (①、②、③、④)、SD059 (①、②、③、④)、ベース上、1期水田耕上より採取された堆積物、計13点である。

第3項 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び水酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、2分間)の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

第4項 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉23、シダ植物胞子3形態の計54である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数および樹木花粉数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マン属、複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ハインキ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリガサ科、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタ節、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノアズキ属、チドメグサ亜科、セリ軍科、ナス科、オオバコ属、ゴキツル、タンポポ科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、ミズワラビ、二条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) SD083 (③、②、①)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属、マツ属複雑管束亜属、シイ属が出現する。③は草本花粉のイネ科が優占し、イネ属型、アカザ科-ヒユ科等が伴われる。②は草本花粉のアカザ科-ヒユ科が優占し、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等が伴われる。①は花粉密度が非常に低い。

2) SD002 (④、③、②、①)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギが出現する。草本花粉はイネ科が優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、イネ属型等が伴われる。また、シダ植物胞子のミズワラビが出現する。④から①へコナラ属アカガシ亜属が減少し、クワ科-イラクサ科、ヨモギ属が増加している。

3) SD059 (④、③、②、①)

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より3帯の花粉分帯を行った。

・I帯 (④)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のガマ属-ミクリ属、イネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が出現し、カヤツリグサ科、ギンギク属、セリ亜科、ゴキツル、オノモミ属が伴われる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属等が出現する。

・II帯 (③、②)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のイネ科が優占し、イネ属型、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が出現し、マツ属複雑管束亜属シイ属が出現する。

・III帯 (①)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉のイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われる。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属が出現し、コナラ属コナラ亜属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイ属が伴われる。

4) ベース土

花粉密度が非常に低い。

5) I期水山耕土

草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が出現し、マツ属複雑管束亜属、シイ属、ハンノキ属が伴われる。草本花粉はイネ科が出現し、イネ属型、カヤツリグサ科、ヨモギ属、チドメグサ亜科が伴われる。

第5項 花粉分析から推定される植生と環境

1) SD083 (③、②、①)

乾燥し開けた環境に生育するアカザ科-ヒユ科が高率に出現し、同様に乾燥を好むヨモギ属も出現するため、環濠周辺は乾燥し開けていると推定される。また、イネ属型が出現しており、水田が営まれていたと示唆される。周辺地域の森林植生は、コナラ属アカガシ亜属等が分布していた。

2) SD002 (④、③、②、①)

④から①へと、コナラ属アカガシ亜属が減少し、クワ科-イラクサ科、ヨモギ属が増加するため、環濠周辺は開けていくことがうかがえる。また、イネ属型が出現しており、水田が営まれていたと示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属等が分布していた。

3) SD059 (④、③、②、①)

花粉分帯に沿って、植生変性の復元を行う。

・I帯 (④)

乾燥した環境に生育するアカザ科・ヒユ科、ヨモギ属等が出現するため、周囲は乾燥した堆積環境であったと示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属等が分布していた。

・II帯 (③、②)

イネ属型、水田雑草であるミズアオイが出現するため、水田が営まれていたと考えられる。乾燥を好むアカザ科・ヒユ科が減少し、湿地を好むイネ科、カヤツリグサ科の増加がみられるため、周囲は湿潤化したと推定される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属等が分布していた。

・III帯 (①)

イネ科が増加し、抽水植物であるガマ属・ミクリ属が出現するため、環濠は浅水域から湿った環境であったと示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属が分布していた。

4) ベース土

花粉がほとんど検出されていない。これは、花粉等の有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であるか、堆積速度が速かったかという理由が考えられる。

5) I期水山講土

抽水植物であるガマ属・ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属が出現することから、浅水域から湿った環境で、イネ属型の出現から、水田が示唆される。周辺地域の森林植生はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が近隣に分布していた。

第6項 まとめ

中の池遺跡の環濠などの堆積物の花粉分析を行った結果、環濠は抽水植物が生育し浅水域から湿地の環境を呈し、周囲はアカザ科・ヒユ科の生育する乾燥地から水田などの湿地の環境が分布していた。また、上位に向かって草本がより優勢になる。周辺地域はコナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が分布していた。

参考文献

- 中村純 (1973) 花粉分析, 古今書院, p.82-110.
金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新編古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
島倉仁三郎 (1973) 日本植物の花形形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5編, 60p.
中村純 (1980) 日本産花粉の標置, 大阪自然史博物館収蔵目録第13巻, 91p.
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

第3節 中の池遺跡における寄生虫卵分析

第1項 はじめに

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されだした研究であり分析例も少ない。

第2項 試料

中の池遺跡、SD083 (①、②、③)、SD002 (①、②、③、④)、SD059 (①、②、③、④)、ベース土、1期水田耕土より採取された堆積物、計13点である。

第3項 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

第4項 結果と考察

1) SD083 (①、②、③)

試料③から回虫卵、鞭虫卵が低密度に検出された。他の試料は寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

2) SD002 (①、②、③、④)

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

3) SD059 (①、②、③、④)

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

4) ベース土

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

5) 1期水田耕土

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

第5項 まとめ

中の池遺跡の寄生虫卵分析を行った結果、環濠SD083 (③) から回虫卵、鞭虫卵が検出された。低密度であり、居住域周辺の汚染と考えられる。

参考文献

Peter J.Warneock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊一、奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口謙一 (1987) 線形動物・扁形動物。動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明 (1999) 寄生虫。考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

第4節 中の池遺跡における珪藻分析

第1項 はじめに

珪藻は主に水域に生息する珪藻の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多様な環境要因に生育する。珪藻の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

第2項 試料

試料は、中の池遺跡より検出されたSD083 (①、②、③)、SD002 (①、②、③、④)、SD059 (①、②、③、④)、ベース土の堆積物12点である。

第3項 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残液をマイクロビペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

第4項 結果

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水性種) 68分類群、真-中塩性種(海-汽水性種) 8分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表1に示す。また、珪藻総数を基準とする百分率を算定したダイアグラムを図1に示す。

1) SD083 (③、②、①)

試料①は、珪藻密度は低いが陸生珪藻が検出される。試料②は、止水性種の*Amphora veneta*が特徴的に出現する。他に、各生態性が不定性の*Anomooneis sphaerophora*、*Navicula cryptotenella*、陸生珪藻の*Amphora montana*などが伴う。試料③は各生態性が不定性の*Achnanthes hungarica*が多く検出され、止水性種の*Amphora veneta*、流水性種の*Navicula capitata*、陸生珪藻の*Amphora montana*などが伴う。

2) SD002 (④、③、②、①)

試料①から③は、珪藻密度は低い。試料④は各生態性が不定性の*Amphora copulata*、流水性種の*Gomphonema parvulum*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*などがやや多い。

3) SD059 (④、③、②、①)

試料①、②は珪藻がほとんど検出されなかった。試料③は、各生態性が不定性の*Amphora copulata*、*Gyrosigma* sp. や止水性種で沼沢湿地付着性種群の*Pinnularia acrosphacria*、*Stauroneis phoenicenteron*などが出現する。試料④は、流水性種の*Navicula capitata*、止水性種で沼沢湿地付着性種群の*Gomphonema gracile*、各生態性が不定性の*Gomphonema pseudoaugur*、陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*や*Navicula mutica*が検出される。

4) ベース土

珪藻は検出されなかった。

第5項 珪藻分析から推定される堆積環境

(1) SD083 (③、②、①)

下部の試料③の時期は、不定性種、止水性種、流水性種が多く、陸生珪藻も伴うため、流水の影響のあるやや不安定な止水域であったと推定される。試料②は、止水性種が優占し、不定性種と陸生珪藻が伴われ、止水域の環境が推定される。上部になると珪藻数密度は低いが陸生珪藻は検出されるため、珪藻の生育しにくい乾燥した環境から湿った土壌の環境の分布が示唆される。

(2) SD002 (④、③、②、①)

下部の試料④の時期は各生態性が不定性の珪藻に流水性種、陸生珪藻などが伴われ、流水の影響のあるやや不安定な止水域で湿った土壌の環境を伴っていたと推定される。上部の試料①から③の時期は、珪藻数密度が低く珪藻の生育しにくい乾燥した環境から湿った土壌の環境の分布が示唆される。

(3) SD059 (④、③、②、①)

試料④の時期は、流水性種、止水性種で沼沢湿地付着性種群、各生態性が不定性種、陸生珪藻などが出現し、流水の影響があり、湿った土壌の環境を伴う水生植物が生育する止水域の環境であったと推定される。試料③は、各生態性が不定性種や止水性種で沼沢湿地付着性種群が検出され、不安定な止水域が示唆される。上部の試料①、②の時期は珪藻がほとんど検出されず、珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境が推定される。

4) ベース土

珪藻は検出されず、珪藻の生育しにくい乾燥した堆積環境が推定される。

第6項 まとめ

中の池遺跡の珪藻分析を行った結果、環濠の下部の時期は滞水し、上部では乾燥化したことが推定された。

参考文献

- Husteded, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Patrick, R. Cincir, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.
- Patrick, R. Cincir, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Fossiliferous Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saprogenous taxa. Diatom., 10, p. 35-47.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展開—, 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 農藤・勇 (1990) 淡水系珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良水・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

第5節 中の池遺跡におけるプラント・オパール分析

第1項 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検出することで埋蔵水山跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

ここでは、中の池遺跡における稲作の可能性について、プラント・オパール分析から検討を行う。

第2項 試料

調査地点は3区西壁の5箇所である。ここでは、便宜的に北側より順にNo. 1~No. 5地点とした。

分析試料は、No. 1地点では上位より暗褐色粘質土 (試料1)、黒灰色粘土 (試料2)、赤灰色粘土 (試料3)、赤灰色粘土 (試料4)、暗赤灰色粘土 (試料5)、暗赤灰色粘土 (試料6)、暗黄褐色細砂 (試料7) および灰色粘土 (試料8) の8点、No. 2地点では上位より黒灰色粘土 (試料9, 10)、赤灰色粘土 (試料11)、赤灰色粘土 (試料12)、暗赤灰色粘土 (試料13)、暗赤灰色粘土 (試料14) および暗灰色粘土 (試料15) の7点、No. 3地点では暗赤褐色粘土 (試料16, 1期水田畦畔)、No. 4地点では明黄褐色粘土 (試料17) と黒色粘土 (試料18) の2点、No. 5地点では上位より黒灰色粘土 (試料19)、明黄褐色粘土 (試料20)、黒色粘土 (試料21) および淡灰色粘土 (試料22) の4点の合計22点が採取された。各地点における試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

第3項 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞 (葉身にのみ形成される) に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数 (試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10 \sim 5g) を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.94 (標実重は1.03)、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザザ節は0.48およびクマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75である。

第4項 結果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属、タケ属科 (ネザザ節型、クマザサ属型、その他) および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1~2および図1~4に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、各地点における検出状況を記す。

1) No.1 地点

イネは試料1～7で検出されている。このうち、試料1、試料4および試料6では高い密度である。ヨシ属は試料1、試料3、試料4、試料6、試料7および試料8で検出されている。ただしいずれも低い密度である。ススキ属型はすべての試料で検出されているが、全体に低い密度である。ネザサ節型もすべての試料から検出されている。いずれも高い密度である。クマザサ属型は試料8を除く各試料で検出されているが、低い密度である。

2) No.2 地点

イネは試料15を除く各試料で検出されている。試料9、試料12および試料13は高い密度である。ヨシ属は試料9を除く各試料で検出されている。試料12で比較的高い他はいずれも低い密度である。ススキ属型は試料14を除く各試料で検出されている。試料11では比較的高い密度である。ネザサ節型およびクマザサ属型はすべての試料で検出されている。このうち、試料9～14ではネザサ節型の密度が高い。

3) No.3 地点

試料16について分析を行ったところ、イネ、ススキ属型およびクマザサ属型が検出されている。このうち、イネは比較的高い密度であり、ネザサ節型は高い密度である。

4) No.4 地点

ここでは、試料17と試料18について分析を行った。その結果、ヨシ属とススキ属型が試料18で、ネザサ節型とクマザサ属型が両試料よりそれぞれ検出されている。ただし、いずれもやや低い密度である。

5) No.5 地点

試料19～22について分析を行った。その結果、ヨシ属は試料19のみで、ススキ属型は試料21のみで検出されているが、どちらも低い密度である。ネザサ節型はすべての試料で検出されているが、いずれもやや低い低い密度である。クマザサ属型は試料19と試料21で検出されているが、どちらも低い密度である。

第5項 中の池遺跡における稲作跡の可能性

上位より暗褐色粘質土(試料1)、黒灰色粘土(試料2、試料9、試料10)、赤灰色粘土(試料4、試料12)および暗赤灰色粘土(試料6、試料13)では、プラント・オパール密度が5,000～9,600個/gであり、稲作跡の探査や検証を行う際の判断基準値である5,000個/gを上まわっている。こうしたことから、これら4層準については稲作跡である可能性が高いと考えられる。また、赤灰色粘土(試料3、試料11)では、プラント・オパール密度が3,000～3,800個/gと比較的高い値であることから、当該層準では調査地点もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が考えられる。暗赤灰色粘上(試料5)、暗赤灰色粘上(試料14)および暗黄褐色細砂(試料7)については、プラント・オパール密度が2,000個/g前後とやや低いことから、これらの層準においても稲作が行われていた可能性が考えられるものの、上層等から後代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。なお、灰褐色粘土(試料16)の採取箇所は発掘調査において畦畔とされていた部分である。通常、畦の作り替えや畦造りの際に水田土壌が使われるため、畦畔からも比較的高い密度でイネのプラント・オパールが検出されることが多い。分析結果をみると、ここからもイネのプラント・オパールが3,000個/gと比較的高い密度で検出されている。このことは、本試料の採取地点が畦畔であったことを支持している。

第6項 プラント・オパール分析から推定される植生と環境

イネ以外の分類群の検出状況(図の右側)をみると、各層準ともおおむねネザサ節型が優勢であり、赤灰色粘上(試料12)と暗赤灰色粘上(試料6)ではヨシ属も多い。したがって、調査の対象となった各層準の堆積時は、調査区周辺はササ類やススキ属などの生育する比較的真ん干した環境であったと推定される。さらにこのことは、各層準で存在の可能性が指摘された水田が、地下水位の低い乾田もしくは半湿田であったことを示唆している。なお、赤灰色粘上や暗赤灰色粘上の堆積時は、周辺に湿地的なところもみられたと推定される。

第7項 まとめ

中の池遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の可能性について検討した。その結果、下位より貯

赤灰色粘土(試料6, 試料13)、赤灰色粘土(試料4, 試料12)、黒灰色粘土(試料2, 試料9, 試料10)および暗褐色粘質土(試料1)については、稲作跡である可能性が高いと判断された。さらに、赤灰色粘土(試料3, 試料11)では、調査地点もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が示唆された。また、発掘調査において畦畔とされていた灰褐色粘土(試料16)からもイネのプラント・オパールが比較的高い密度で検出されたことから、分析のうえからもここが水田にともなう畦畔であった可能性が認められた。

なお、調査の対象となった各層準の堆積時は、調査区周辺は比較的乾いた環境であり、赤灰色粘土や暗赤灰色粘土の堆積時は周辺に湿地的なところもみられたと推定された。

文献

- 杉山真二(1987)タケ藨科植物の機動細胞壁微体、富士竹類植物同報告、第31号、p.70-83。
杉山真二(2000)植物壁微体(プラント・オパール)、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の壁微体標本と定分析、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-、考古学と自然科学、17、p.73-85。

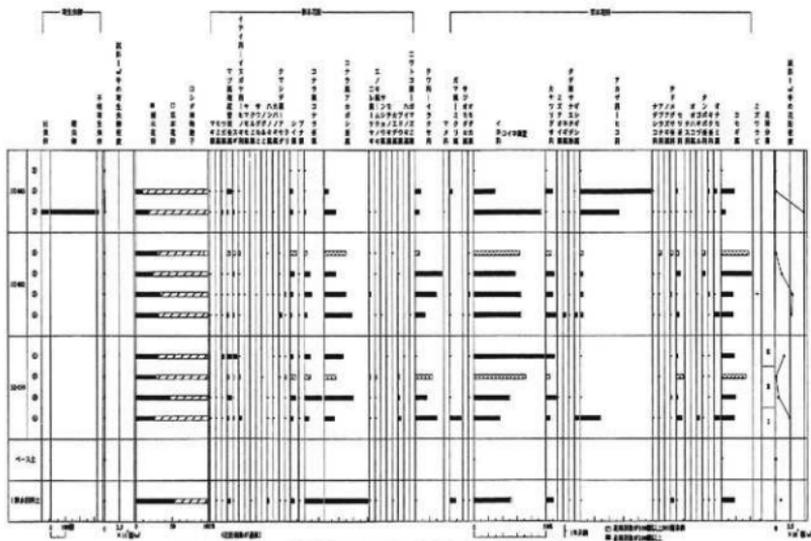


Fig.152 中の池遺跡における寄生虫卵・花粉ダイアグラム

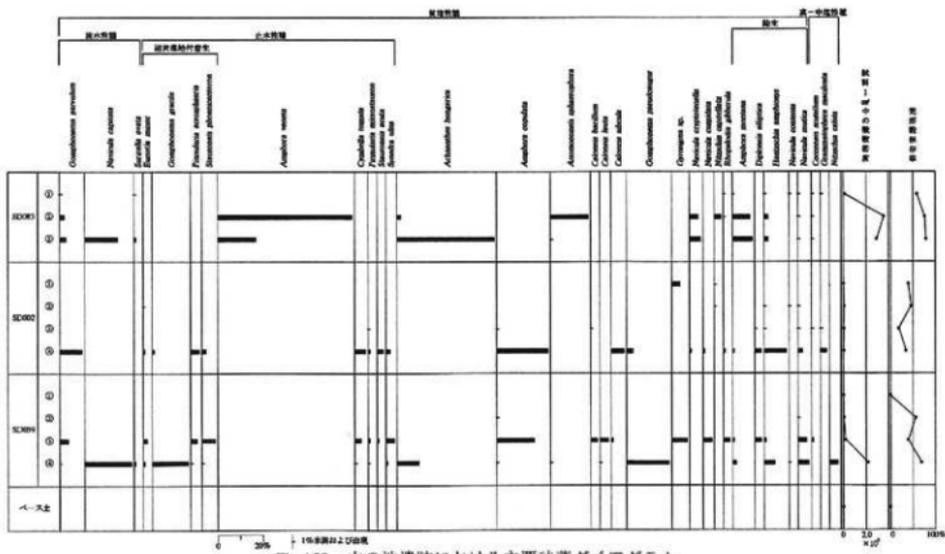


Fig.153 中の池遺跡における主要建藻ダイアグラム

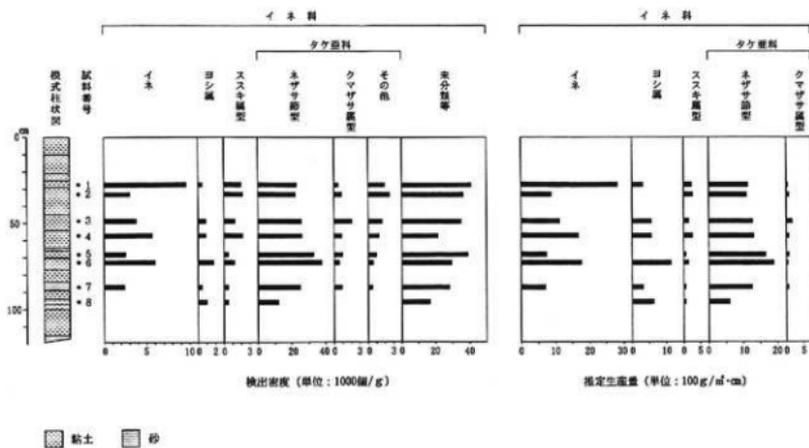


Fig.154 N01地点におけるプラントオパール分析結果

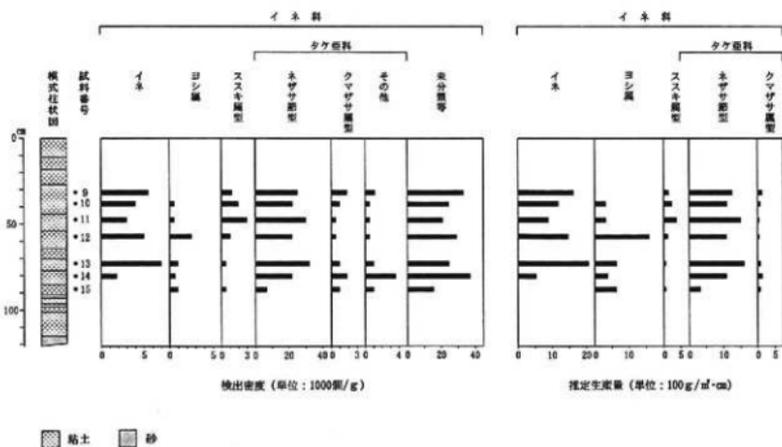


Fig.155 N02地点におけるプラント・オパール分析結果

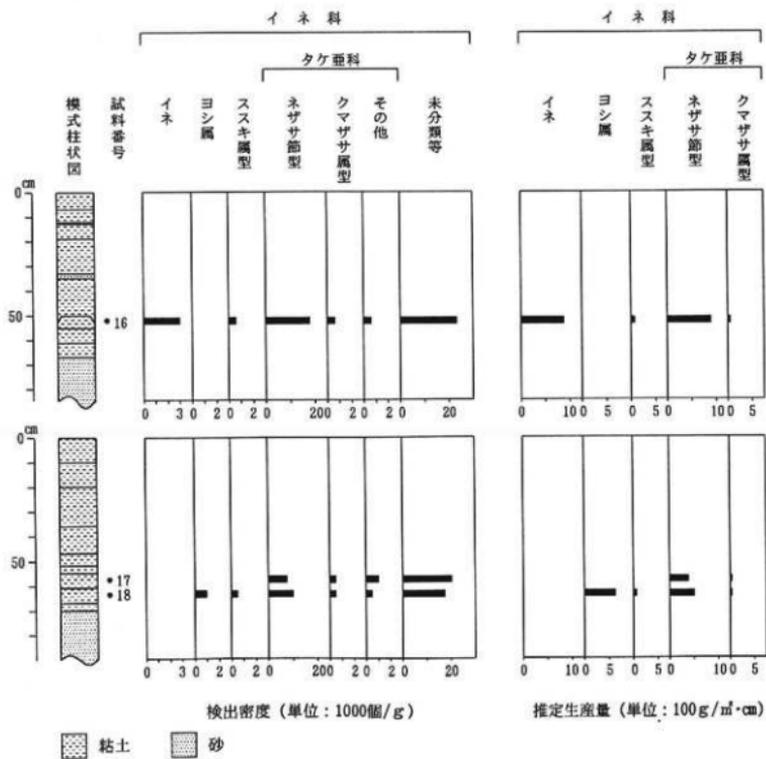


Fig.156 N03・N04地点におけるプラント・ポールの分析結果

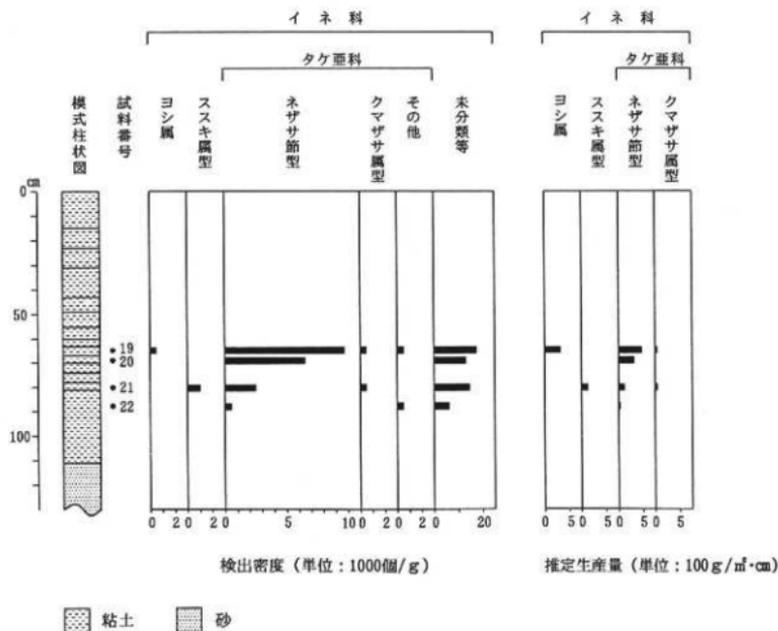


Fig.157 N05地点におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名) \ 土 層	No. 1								No. 2						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
イネ科 Gramineae (Grasses)															
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	96	30	38	57	25	60	24	55	40	30	50	70	18		
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	5	9	9			18	5	10	5	5	25	10	6	10	
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	20	22	13	22	5	12	5	5	12	20	30	10	5	5	
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)															
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	227	220	256	261	330	378	250	121	251	220	300	216	322	216	66
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	5	9	21	9	10	6	9	18	10	5	5	10	18	10	
その他 Others	20	26	17	13	10	6	5	12	5	5	5	10	36	10	
未分類等 Unknown	409	362	350	213	391	294	283	167	331	245	210	291	246	372	157
プラント・オパール総数	783	668	704	583	772	774	579	303	680	545	585	603	674	666	258

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	2.82	0.89	1.13	1.66	0.75	1.76	0.69	1.62	1.18	0.88	1.46	2.07	0.53		
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)	0.32		0.54	0.55		1.14	0.30	0.64	0.32	0.32	1.59	0.63	0.38	0.64	
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	0.25	0.27	0.16	0.27	0.06	0.15	0.06	0.06	0.15	0.25	0.37	0.12	0.06	0.06	
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	1.09	1.05	1.23	1.25	1.58	1.81	1.30	0.58	1.21	1.06	1.44	1.04	1.54	1.04	0.32
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.04	0.06	0.16	0.07	0.08	0.05	0.07	0.14	0.08	0.04	0.04	0.08	0.14	0.08	

Tab.2 中の池遺跡のプラント・オパール分析結果 (1)

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 (和名・学名) \ 試 料	No. 3			No. 4		No. 5			
	16	17	18	19	20	21	22		
イネ科 Gramineae (Grasses)									
イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	30								
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)			10	5					
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	6		5		10				
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)									
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	180	77	100	97	65	25	5		
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	6	5	5	5		5			
その他 Others	6	10	5	5	5				
未分類等 Unknown	234	204	175	175	131	146	61		
プラント・オパール総数	462	296	300	286	196	186	71		

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.88						
ヨシ属 <i>Phragmites</i> (reed)		0.63	0.29				
ススキ属型 <i>Miscanthus</i> type	0.07	0.06	0.12				
ネザサ節型 <i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i> type	0.86	0.37	0.48	0.47	0.31	0.12	0.02
クマザサ属型 <i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>) type	0.05	0.04	0.04	0.03	0.04		

Tab.3 中の池遺跡のプラント・オパール分析結果 (2)

学名	分類群	科名	1991			1992			1999			ベース	種
			①	②	③	①	②	③	①	②	③		
Helicth eggs		新巻虫卵											
Jacarlis		国虫卵	5										
Trichuris		種虫卵	34										
Worms eggs		不明虫卵	1										
Total		計	0	0	43	0	0	0	0	0	0	0	0
		試験中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
			$\times 10^3$										
		顕微鏡による消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen		樹木花粉											
Podocarad		マコノ木	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Aleis		モミ木	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2
Tsuga		ツガ木	1	6	1	4	3	5	2	2	1	1	1
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属硬葉亜属	7	6	4	2	1	6	7	2	11	6	8
Cryptomeria japonica		スギ	1	7	4	4	1	5	6	2	1	8	1
Tsukaguchi-Ochiaiitaniaceae-Cupressaceae		イチイ科-イチイガヤ科-ヒノキ科	1	4	2	2	4	4	2	2	2	7	1
Myrica		ヤマモミ木	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Juniper		クルミ木											1
Perocarya rhoifolia		サワグルミ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Platanus strabocata		ノグロ木											4
Alnus		ハンノ木			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Betula		カバノ木	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Carpinus-Ostrya japonica		クマシラ木-アサダ			1	2	1	6	2	1	1	2	2
Castanea crenata		クリ			1	1	1	1	2	1	2	2	2
Castanopsis		シロ木			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Fagus		ブナ木	2	4	12	10	12	10	6	4	7	14	10
Quercus subgen. Leiodobalanus		コナラ属コナラ亜属	1	1	7	4	14	20	19	8	8	46	14
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属アカガシ亜属	1	1	47	29	29	67	39	12	7	32	15
Vitaceae-Vitis		ニレ属-ブドウ			1	1	5	1	1	1	1	1	1
Celastraceae-Elaeagnaceae		エノキ木属-クノキ			1	1	1	1	1	2	3	2	2
Zanthoxylum		サンショウ木			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Ilex		モチノ木								1	1	1	1
Acer		カエデ木			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Vitis		ブドウ木								2	4	9	1
Symplocos		ハイノ木								1	1	1	1
Sambucus-Viburnum		ニワトコ属-ガマズミ属								1	1	1	1
Arboreal-Nonarboral pollen		樹木・草本花粉											
Wacaceae-Vitaceae		クワ科-イラクサ科	11	16	6	67	64	34	2	19	27	69	2
Leguminosae		マメ科	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
Nonarboreal pollen		草本花粉											
Typha-Sparganium		ガマ属-ミクリ木	6				2	2	1	2	37	14	1
Alisma		アジサイ科											1
Sagittaria		サギタリ木				1	1	1	1	1	1	1	1
Gramineae		イネ科	6	37	263	61	103	125	147	110	57	66	84
Griza type		イネ科型			2	1	1	1	1	1	1	1	1
Cyperaceae		カヤツリグサ科	1	12	5	6	20	21	30	13	5	14	19
Monocotyledonae		エビノ木											1
Allium		ネギ木			5					7			
Polygonum sect. Persicaria		タデ木サナエナ科			1			2	1				2
Rumex		キンギン木			2	2	1	1	1	1	1	1	1
Cymodoceaceae-Amaranthaceae		アカガシ科-ヒユ科	4	125	152	4	6	10	7		3	64	1
Caryophyllaceae		アザミ科			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Cruciferae		アブラナ科			2	3	1	1	2	1	1	1	1
Dunbaria		ノアズ木			1								1
Hydrocotylaceae		アトメダグサ科			1	4	5	4			4	1	1
Nitidaceae		ネリ木科			3	2	4	9	3	6	5	17	1
Scrophulariaceae		ツツ木科			1								1
Plantago		オオバコ木			2								1
Actinostemma lobatum		コキツ木											7
Lactuciferae		タンポポ科					4	7	1	1	1	1	1
Helicth-type		新巻虫卵			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Helicth-type		種虫卵			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Trichuris-type		不明虫卵			1	1	1	1	1	1	1	1	1
Arboreal pollen		樹木花粉	4	25	99	58	71	129	143	73	41	61	101
Arboreal-Nonarboral pollen		樹木・草本花粉	5	11	37	6	67	64	34	2	19	27	69
Nonarboreal pollen		草本花粉	4	217	457	134	224	229	262	157	200	66	302
Total pollen		試験中の花粉密度	16	359	693	198	362	421	456	236	160	316	472
			1.4	3.2	6.0	1.7	3.1	3.6	4.0	2.1	1.4	2.7	4.1
			$\times 10^3$										
Unknown pollen		未特定花粉	2	5	3	12	7	7	0	5	12	9	2
Fern spore		シダ植物胞子	1	4	1	11	6	4	4	4	7	2	6

Tab.4 中の池遺跡における寄生虫・花粉分析結果

分類群	S083			S002				S059				ヘース +	
	(1)	(2)	(3)	(1)	(2)	(3)	(4)	(1)	(2)	(3)	(4)		
非塩性種 (淡水生種)													
<i>Achnanthes hungarica</i>		7	93									15	
<i>Achnanthes lanceolata</i>										2		1	
<i>Amphora copulata</i>					4	23			3	18		1	
<i>Amphora montana</i>	11	25	20									3	
<i>Amphora veneta</i>		185	37										
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i>		53	2									1	
<i>Caloneis bacillum</i>					1					3			
<i>Caloneis hyalina</i>										1			
<i>Caloneis lauta</i>										4		1	
<i>Caloneis silicula</i>						6				1			
<i>Cyclotella</i> sp.												1	
<i>Cymbella cesatii</i>					1								
<i>Cymbella minuta</i>										2			
<i>Cymbella naviculiformis</i>										2			
<i>Cymbella silesiaca</i>										1			
<i>Cymbella sinuata</i>										1			
<i>Cymbella</i> sp.						1							
<i>Cymbella funida</i>						5				3		1	
<i>Diploneis elliptica</i>					1	3				3			
<i>Diploneis ovalis</i>										2			
<i>Diploneis yatsukaensis</i>					2	1							
<i>Eunotia bilunaris</i>												1	
<i>Eunotia minor</i>					1	1				2		2	
<i>Gomphonema acuminatum</i>					1	1							
<i>Gomphonema angustum</i>												2	
<i>Gomphonema gracile</i>						1						24	
<i>Gomphonema grovei</i>					2	1							
<i>Gomphonema minuta</i>						1							
<i>Gomphonema olivaceum</i> v. <i>salinum</i>												1	
<i>Gomphonema parvulum</i>	1	5	6				10			4		1	
<i>Gomphonema pseudosagur</i>							3					29	
<i>Gomphonema</i> sp.										2			
<i>Gomphonema subtile</i>						1							
<i>Gomphonema vibrio</i>									1				
<i>Gyrosigma acuminatum</i>										1			
<i>Gyrosigma</i> sp.							4			8			
<i>Hantzschia amphioxys</i>	4	5	4		10	1	10			1		8	
<i>Navicula capitata</i>												32	
<i>Navicula confervacea</i>							2					1	
<i>Navicula contenta</i>	2				1							1	
<i>Navicula cryptotenella</i>		11	11				1						
<i>Navicula cuspidata</i>										1		4	
<i>Navicula elgimensis</i>										1		2	
<i>Navicula hasta</i>										1			
<i>Navicula laevisima</i>										1			
<i>Navicula mutica</i>	6	1	2		38	2	2		2	4		7	
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>												1	
<i>Navicula pupula</i>							1					2	
<i>Nitzschia amphibia</i>		2	1										
<i>Nitzschia angustata</i>												2	
<i>Nitzschia capitellata</i>		9			1	2							
<i>Nitzschia clausii</i>									1	1			
<i>Pinnularia acrophaeria</i>							4			3		1	
<i>Pinnularia borealis</i>							1						
<i>Pinnularia brevicostata</i>										1			
<i>Pinnularia gibba</i>										1			
<i>Pinnularia major</i>							1			2			
<i>Pinnularia microstauron</i>						1	1			1		1	
<i>Pinnularia nodosa</i>										2			
<i>Pinnularia obscura</i>						1							
<i>Pinnularia schroederii</i>							1						
<i>Pinnularia subcapitata</i>		1	1										
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1	1					1			3			
<i>Stauroneis acuta</i>							3			1		1	
<i>Stauroneis rhoenocenteron</i>							2			6		1	
<i>Staphandiscus</i> sp.					1								
<i>Surirella ovata</i>	1		3									2	
<i>Synedra ulna</i>							2			4		2	
真-中塩性種 (海-汽水生種)													
<i>Achnanthes brevisipes</i>												1	
<i>Actinopterychus</i> sp.												1	
<i>Cocconeis scutellum</i>	2	1	2							1			
<i>Grammatophora macilentata</i>	1					2	3						
<i>Nitzschia calida</i>												6	
<i>Nitzschia constricta</i>										2			
<i>Nitzschia levidensis</i>										1		1	
<i>Thalassionema nitzschiorides</i>							1						
集計	29	307	214		1	53	19	102	0	7	104	155	0
未同定	2	9	23		1	4	5	7		1	8	14	
總計	22	89	60		3	73	104	205		7	112	79	1
試料 1 cm ² 中の個数密度	1.1	3.6	2.9		8.0	2.3	9.6	3.6	0.0	2.0	7.9	2.2	0.0
	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$		$\times 10^{-7}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$		$\times 10^{-8}$	$\times 10^{-5}$	$\times 10^{-4}$	$\times 10^{-4}$
完形殻保存率 (%)	58.5	78.0	79.8		40.0	43.8	18.8	34.7		53.3	39.4	68.1	0.0

Tab.5 中の池遺跡における珪藻分析結果

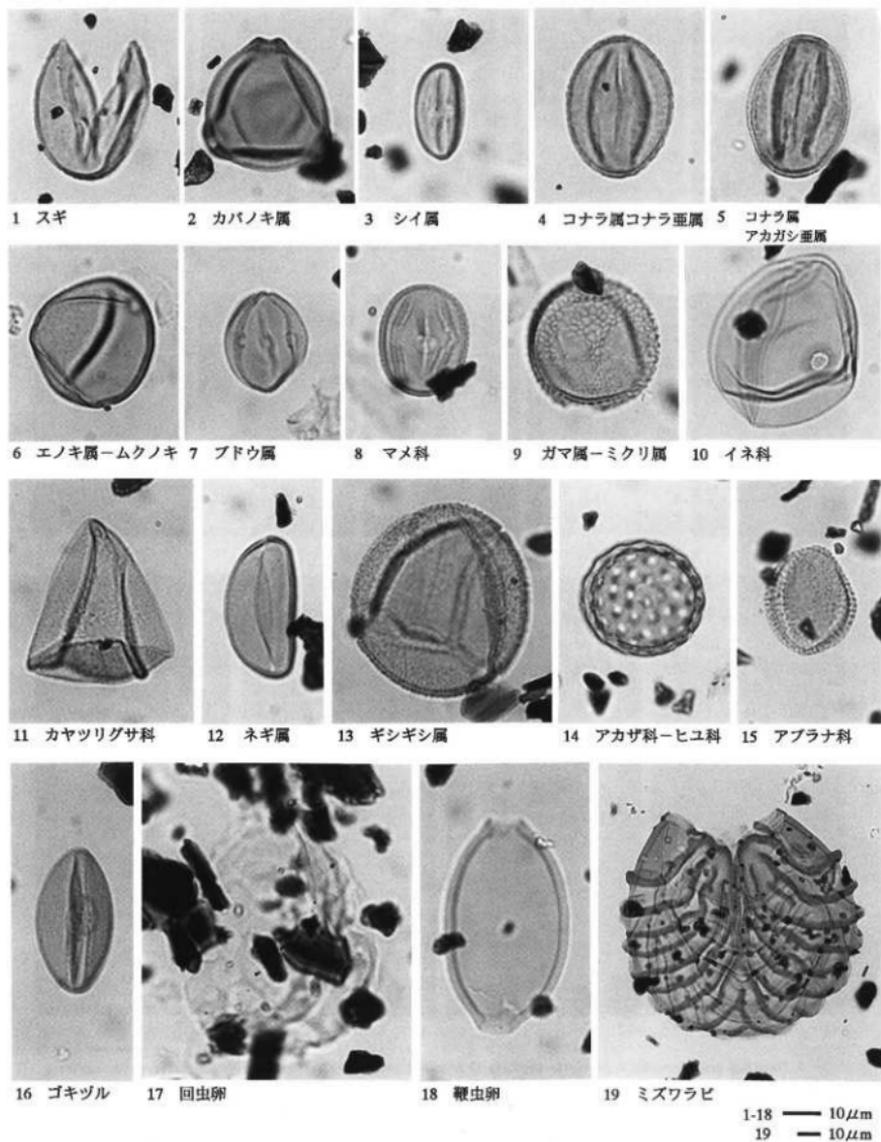
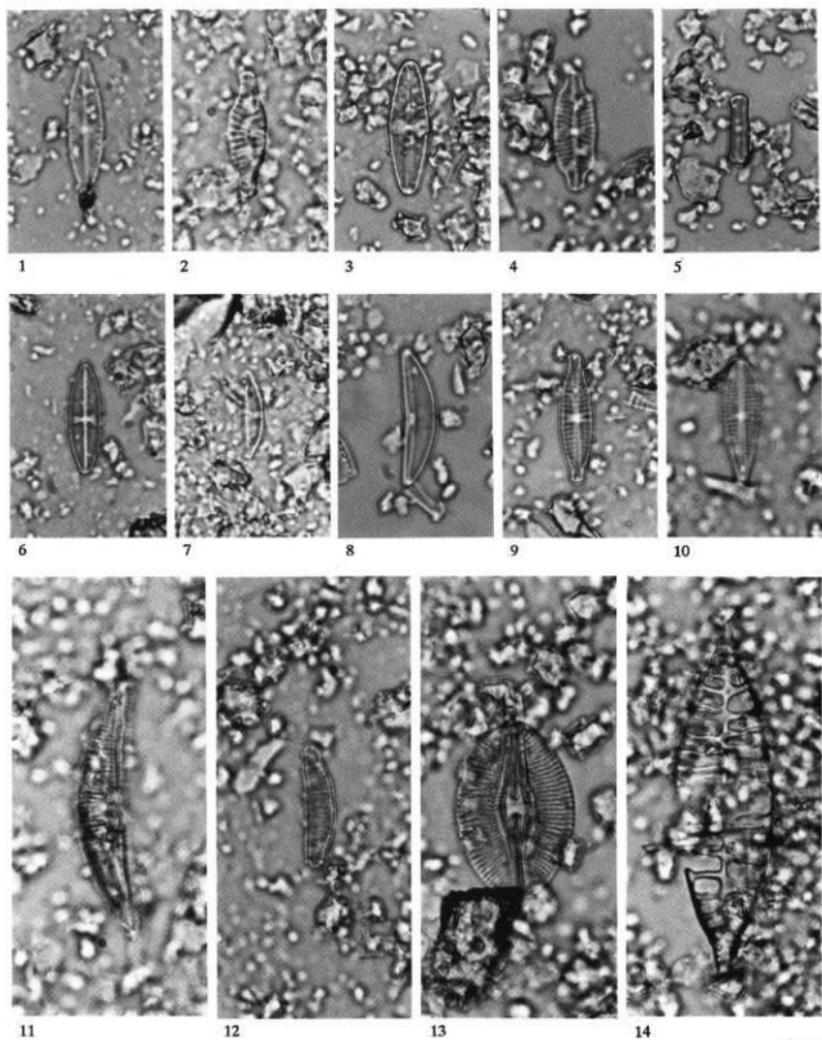
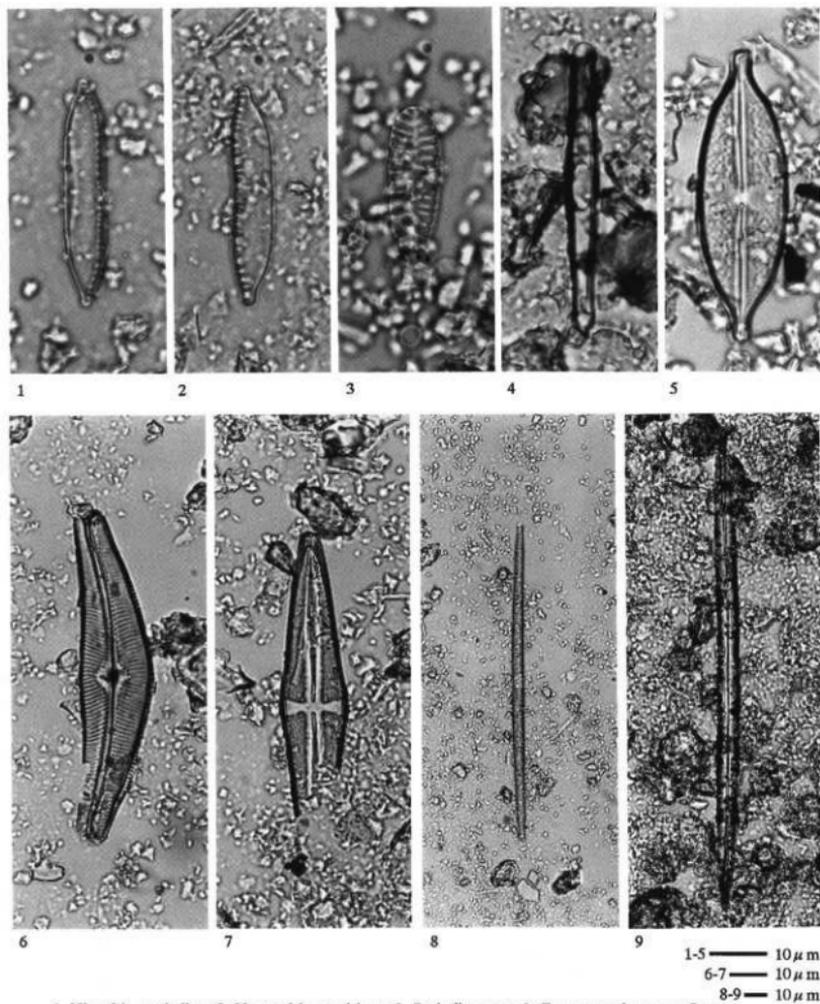


Fig.158 中の池遺跡の花粉・寄生虫卵・胞子



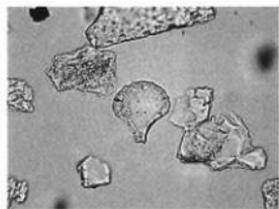
1. *Navicula cryptotenella* 2. *Navicula capitata* 3. *Navicula mutica* 4. *Navicula elginensis* 5. *Navicula contenta*
 6. *Achnanthes hungarica* 7. *Amphora montana* 8. *Amphora veneta* 9. *Gomphonema parvulum*
 10. *Gomphonema pseudoaugur* 11. *Amphora copulata* 12. *Eunotia minor* 13. *Diploneis elliptica*
 14. *Navicula cuspidata*

Fig.159 中の池遺跡の珪藻 I

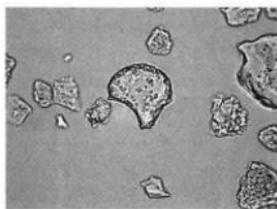


1. *Nitzschia capitellata* 2. *Hantzschia amphioxys* 3. *Suirella ovata* 4. *Grammatophora macilenta*
 5. *Anomoeoneis sphaerophora* 6. *Cymbella tumida* 7. *Stauroneis acuta* 8. *Synedra ulva* 9. 海綿骨針

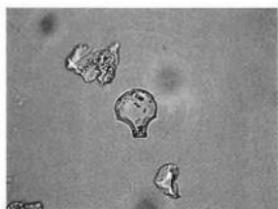
Fig.160 中の池遺跡の珪藻Ⅱ



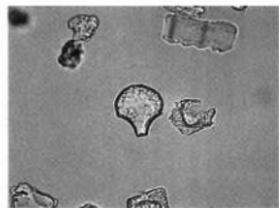
イネ



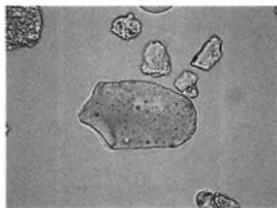
イネ



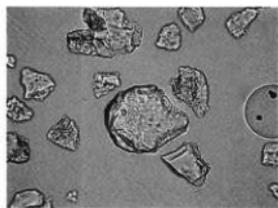
イネ



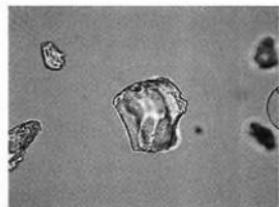
イネ



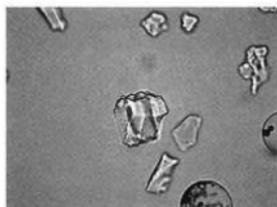
ヨシ属



ヨシ属



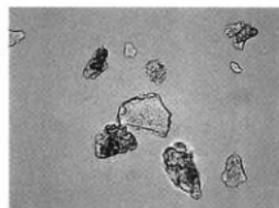
ネザサ節型



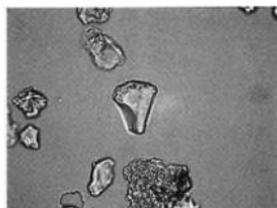
ネザサ節型



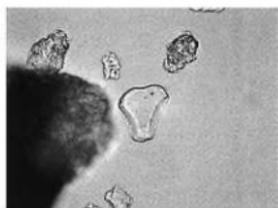
クマザサ属型



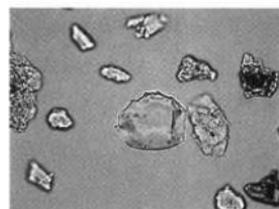
クマザサ属型



ススキ属型



ススキ属型



ジュズダマ属型



シバ属

Fig.161 中の池遺跡のプラントオパール

第8章 調査のまとめ

第1節 出土土器の時期と遺構の変遷

第1項 目的

当遺跡の最大の特徴は、香川県内屈指の環濠集落であることと言える。現在、弥生時代における社会構成を考える上で、拠点集落の性格をどう考えるかが重要となっている。それに伴い環濠集落研究においては集落を巡る溝の機能の解明、環濠集落を取り巻く景観変遷の復元が課題として提示されている。当遺跡の評価を行うにあたり、本節では出土遺物の分析をもとに、当遺跡における遺物群の相対的関係を整理する。そしてそれを元に遺構の変遷を分析し、多環濠成立のプロセスを探る。なお、文中でふれる遺物番号は、本文中の遺物番号に依拠する。

第2項 方法

当遺跡の資料は溝からの出土資料が中心で、また既往の編年観を基にする限りそれほど大きな時期差を持たないことが予想される⁽¹⁾。しかし、細分された取り上げ単位と、まとまった遺物量という遺跡特性をもとに、数量的処理を行うことで、各出土遺物群の相対的な新旧関係の追求が可能になると考える。そこで、先学によって指摘されている時期差を示す属性をもとに、下記の基準を設定して数量的処理を行った。なお、カウントの基準は破片数である。

- ・逆「L」字状の口縁部を有するいわゆる瀬戸内型甕の比率
- ・口縁部キザミの保有率
- ・口縁部直下に貼り付け突帯を有する甕の保有率
- ・口縁部直下の条線の数

また、これら諸属性の数比的比率に加え、特徴的な壺類、甕の有無についても、補助的な検討素材とした。

第3項 検討資料の抽出

まず、対象遺物群の抽出を試みる。当遺跡において一括性のある良好な遺物群としてはSK185、SD081暗灰色粘土、SD081明黄褐色粘土があげられる。SD081は暗灰色粘土が堆積した後、明黄褐色粘土で人為的に埋没する。この明黄褐色粘土は他の溝の最終埋土と異なり下層遺物を含んだ土壌化層ではなく、地山土のブロックである。その後SD081が再掘削や液漂を受けた痕跡は見られず、この層位の遺物群は一括性が強いと考えてよい。SK185はSD081に切られる土坑である。SD081に再掘削の痕跡がなく、081の縦断面にSK185掘削時の排土の痕跡などが見られないことから、SK185の掘削時期はSD081に先行すると考えてよい。また、出土土器は剥片類が卓越することから、石器製作の際の屑を投棄したと考えることが可能であり、埋土観察から得られた塵絶状況と矛盾しない。したがってこれら良好な一括性を示す遺物群の序列はSK185→SD081暗灰色粘土→SD081明黄褐色粘土となる。ただ、ここで図式化された遺物の中いくつか新しい要素を持つ遺物が見られる。混入の可能性のあるものを本文の図版作成段階で除外するのではなく、一旦図式化した上でまとめの段階で混入と判断する遺物を除外することにした。新しい要素を持つ遺物としては、Fig.63-47やFig.68-133・69-137などがそれに該当するが、まずFig.68-133については壺において口縁部の開き、頸部の直立化傾向などに明らかに後出する要素が認められる。この遺物は調査区北端付近から出したもので、灰褐色細砂出土のものと同接関係を有し、明黄褐色粘土が尽きて灰褐色細砂と暗灰色粘土が接する部分において灰褐色細砂の遺物を誤って暗灰色粘土として取り上げたものとする。Fig.69-137についてはセクションc付近出土であることが確認できる。この付近は攪乱に近接する地点であり、攪乱からの混入が最大の原因と考えられる。Fig.63-47は直立気味の頸部や頸部体部境界の貼り付け突帯などに新しい要素を見出すことができる。しかし川土状況に不審な点は見られず、現段階では明黄褐色粘土出土として扱っておく。

次に遺物のまとまりがあまり良好ではないが、数量処理に耐えうる遺物量を有する遺構としてSD083があげられる。SD083は埋土の観察から数度の掘り直しを想定している。下層・最下層に当たる暗灰色砂質土・黒灰色粘土は

渡瀬も行われているが、溝底まで大々的に行うようなものではなかったと考えられる。しかし、中・上層にあたる暗灰色粘質土・暗灰色粘土・暗褐色砂質土は、例えばFig.94-150のような4期以降に降る遺物が混在することから、かなり渡瀬・掘り直しが行われたものと考えられる。その後の黒褐色粘土・暗褐色粘質土については最後の比較的規模の大きな掘り直し後の埋め戻し土と考えられる。以上の堆積環境をふまえて遺物群を観察すると、SD083は最下層に当たる暗灰色砂質土においてFig.97-196のような刺突文を持つものや、最下層直上の黒灰色粘土においてFig.96-166・167のような、Fig.95の確領に比して明らかに後出する要素を持つものが存在している。これらの遺物についても、上層の渡瀬による遺物が混入したものとして理解してよいと考える。なお、Fig.97-186の土師が最上層にあたる暗褐色粘質土から出土したものと接合関係を有することや、縦断面に中層から最下層まで達する掘りこみが見られることはこの想定を補強する。

Tab.6 SK185・SD081・083土器組成分析表
(トーンは遺物総数が20以下で扱いに注意を有するもの)

	遺物群の年代別分布状況										天竺鉢の年代別分布状況				その他の陶器類				種類	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	1	2	3	4		
SK185-1 黒色土器																				土師
SK185-2 黒色土器																				土師
SK185-3 黒色土器																				土師
SK185-4 黒色土器																				土師
SK185-5 黒色土器																				土師
SK185-6 黒色土器																				土師
SK185-7 黒色土器																				土師
SK185-8 黒色土器																				土師
SK185-9 黒色土器																				土師
SK185-10 黒色土器																				土師
SK185-11 黒色土器																				土師
SK185-12 黒色土器																				土師
SK185-13 黒色土器																				土師
SK185-14 黒色土器																				土師
SK185-15 黒色土器																				土師
SK185-16 黒色土器																				土師
SK185-17 黒色土器																				土師
SK185-18 黒色土器																				土師
SK185-19 黒色土器																				土師
SK185-20 黒色土器																				土師
SK185-21 黒色土器																				土師
SK185-22 黒色土器																				土師
SK185-23 黒色土器																				土師
SK185-24 黒色土器																				土師
SK185-25 黒色土器																				土師
SK185-26 黒色土器																				土師
SK185-27 黒色土器																				土師
SK185-28 黒色土器																				土師
SK185-29 黒色土器																				土師
SK185-30 黒色土器																				土師
SK185-31 黒色土器																				土師
SK185-32 黒色土器																				土師
SK185-33 黒色土器																				土師
SK185-34 黒色土器																				土師
SK185-35 黒色土器																				土師
SK185-36 黒色土器																				土師
SK185-37 黒色土器																				土師
SK185-38 黒色土器																				土師
SK185-39 黒色土器																				土師
SK185-40 黒色土器																				土師
SK185-41 黒色土器																				土師
SK185-42 黒色土器																				土師
SK185-43 黒色土器																				土師
SK185-44 黒色土器																				土師
SK185-45 黒色土器																				土師
SK185-46 黒色土器																				土師
SK185-47 黒色土器																				土師
SK185-48 黒色土器																				土師
SK185-49 黒色土器																				土師
SK185-50 黒色土器																				土師
SK185-51 黒色土器																				土師
SK185-52 黒色土器																				土師
SK185-53 黒色土器																				土師
SK185-54 黒色土器																				土師
SK185-55 黒色土器																				土師
SK185-56 黒色土器																				土師
SK185-57 黒色土器																				土師
SK185-58 黒色土器																				土師
SK185-59 黒色土器																				土師
SK185-60 黒色土器																				土師
SK185-61 黒色土器																				土師
SK185-62 黒色土器																				土師
SK185-63 黒色土器																				土師
SK185-64 黒色土器																				土師
SK185-65 黒色土器																				土師
SK185-66 黒色土器																				土師
SK185-67 黒色土器																				土師
SK185-68 黒色土器																				土師
SK185-69 黒色土器																				土師
SK185-70 黒色土器																				土師
SK185-71 黒色土器																				土師
SK185-72 黒色土器																				土師
SK185-73 黒色土器																				土師
SK185-74 黒色土器																				土師
SK185-75 黒色土器																				土師
SK185-76 黒色土器																				土師
SK185-77 黒色土器																				土師
SK185-78 黒色土器																				土師
SK185-79 黒色土器																				土師
SK185-80 黒色土器																				土師
SK185-81 黒色土器																				土師
SK185-82 黒色土器																				土師
SK185-83 黒色土器																				土師
SK185-84 黒色土器																				土師
SK185-85 黒色土器																				土師
SK185-86 黒色土器																				土師
SK185-87 黒色土器																				土師
SK185-88 黒色土器																				土師
SK185-89 黒色土器																				土師
SK185-90 黒色土器																				土師
SK185-91 黒色土器																				土師
SK185-92 黒色土器																				土師
SK185-93 黒色土器																				土師
SK185-94 黒色土器																				土師
SK185-95 黒色土器																				土師
SK185-96 黒色土器																				土師
SK185-97 黒色土器																				土師
SK185-98 黒色土器																				土師
SK185-99 黒色土器																				土師
SK185-100 黒色土器																				土師

Tab.7 SD002・059土器組成分析表
(トーン部分は遺物総数が20以下で扱いに注意を有するもの)

	遺物群の年代別分布状況										天竺鉢の年代別分布状況				その他の陶器類				種類	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	1	2	3	4		
SD002-1 黒色土器																				土師
SD002-2 黒色土器																				

第4項 時期区分の設定

以上のかなり限定された出土状況の遺物群ではあるが、上記をもとにまず遺構・層位の序列を決定し、土器様相の特徴を抽出、時期区分を明確にしたい。Tab. 6は先述の遺構出土の遺物群のうち特に臺に重点を置いた構成要素を一覧にした表である。これを見ると、それぞれの要素の増減からいくつかの段階を設定できる。

1期 (Fig.162)

逆「L」字状の口縁部を持つ甕が存在せず、口縁部直下に1~3条の沈線を施す甕が中心の遺物群である。SK185が該当する。甕には口縁部の折り曲げの強いもの(135-8)が出現しており、貼付突帯系甕(135-1)の口縁部の伸びは弱い。

2期 (Fig.162)

逆「L」字状の口縁部を持つ甕が1~20%存在し、口縁部に1~3条の沈線を施す甕を中心とする遺物群。逆「L」字状の口縁部は断面四角形で肉厚のものが主体である。甕の大半は口縁部と頸部の境界が明確である。SD081暗灰色粘土が該当する。沈線文系甕の中にはSD081暗灰色粘土(68-130・133)のような口縁部の伸びの大きいものも少数含まれる。如意状口縁の甕は口縁部を短く強く折り返すもの(69-152・70・159)が主体である。

3期 (Fig.162・163)

口縁部直下に4~6条の沈線を施す甕を主体とし、甕は口縁部と頸部の境界が不明瞭なものが主体となる。SD081明黄褐色粘土、SD081灰褐色細砂、SD081暗褐色粘土、SD083暗灰色砂質土、SD083黒灰色粘土が該当する。甕は口縁部の伸びが長いものが主体となり、胴部最大径が下位にくるものが多い。SD081明黄褐色粘土Fig.63-47のような胴部と頸部の境界を明確にするもの、(63-53)のような口縁部が水平近くまで開くものも見られる。逆「L」字状の口縁部を持つ甕の比率の違いや、甕口縁部直下の沈線多条化を指標として2時期に分かれる可能性がある。

4期 (Fig.163)

甕は口縁部直下に4~6条の沈線を持つものを主体とし、7~10条のものがこれに次ぐ。また口縁部直下に沈線を持たない甕も増加し、後半には、主体を占めるようになる。甕の逆「L」字状口縁は深くシャープなものが存在し、多条化が顕著である。SD083暗灰色粘土、暗灰色粘質土、暗褐色砂質土が該当する。段系甕が姿を消し、貼付突帯系甕の口縁の伸びも著しくなる。またSD083暗灰色粘土(92-126)、暗灰色粘質土(94-150)のように口唇部に面を持ち、しっかりと刻み目や文様帯を形成するものが出現する。無頸甕(94-143)も存在する。

5期 (Fig.164・165)

逆「L」字状の口縁部を持つ甕の比率や、甕口縁部直下沈線数の傾向は変わらないが、キザミ、沈線を持たない甕が増加、柳掻き沈線が採用される。また、臺に加飾性が増し、バリエーションが豊かになる。最終段階には口縁部直下に貼り付け突帯を有する、いわゆる突帯文系甕の比率が低下する傾向がある。SD083黒灰色粘土・暗褐色粘質土が該当する。甕のバリエーションは増加し、棒状浮文を持つもの(86-74)、口縁上面に山形文を施すもの(86-77)、口縁部内面に多重の刻み目突帯を有するもの(82-15)などがある。キザミ・沈線を持たない甕は体部の直線化が顕著で、内外面ともにヘラミガキを施す傾向がある。

これらの遺物群の変遷は、従来いくつかの編年案において編年基準資料として利用されていた中の他遺跡の既存資料の時期幅を確認することにつながる。また、当該時期は瀬戸内型臺に代表される遠賀川式期以降の地色色が発現する重要な時期に当たっており¹⁰、土器研究のみならず地域社会復元の意味でも重要な位置づけができる。しかしながら、本稿の目的は編年ではなく、環濠掘削・埋没プロセスの検討であるため、ここでは今回設定した各時期がおおよそ既存編年のどの枠に該当するかについておおまかにふれるに留める。

先述のとおり、香川県内の弥生前期土器の編年は先学により一定の完成をみている。中でも森下英治氏による編年案は弥生前期を大きくI期とII期に大別し、さらにそれぞれをa~cに細分、逆「L」字状口縁を有する甕出現直前をIIa期とし、出現以降をIIb期、甕の沈線が著しく多条化する時期をIIc期と位置づけている。今回設定した時期区分のうち、1期がIIa期に、2・3期がIIb期に、4期がIIc期に、5期が弥生中期初頭に該当しよう。

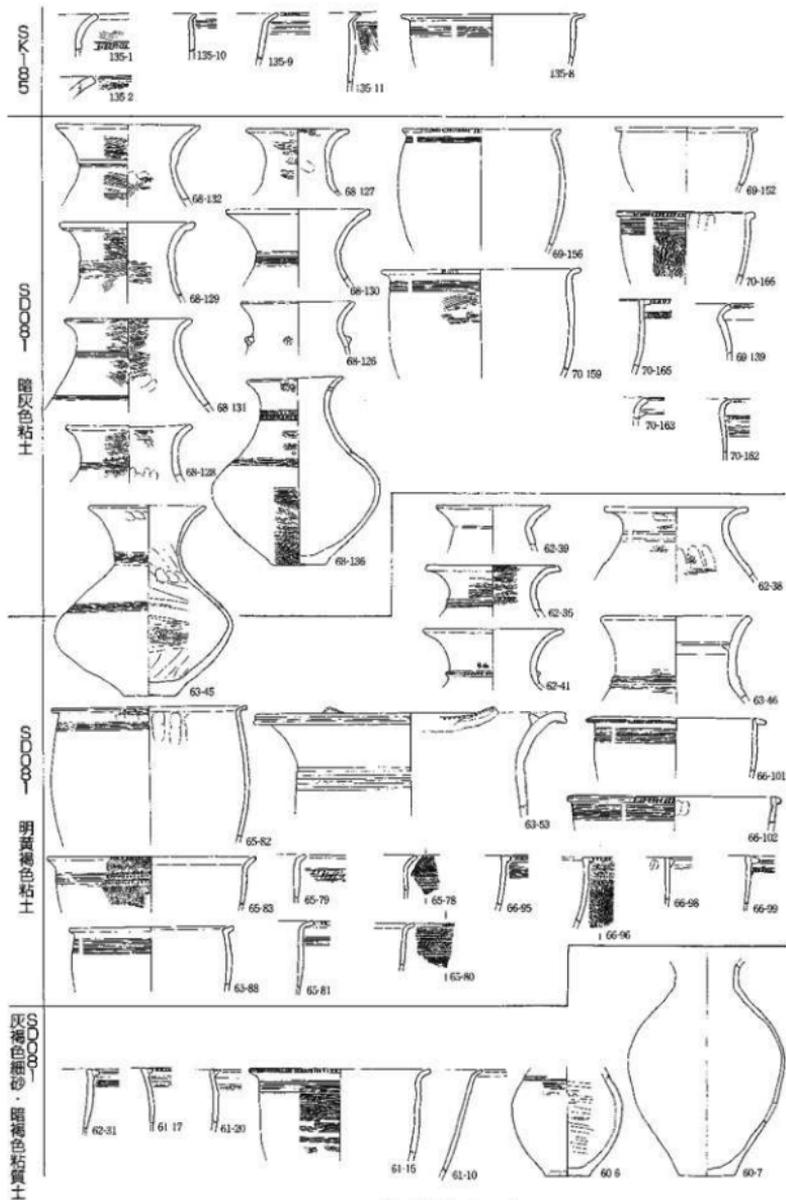


Fig.162 1～3期の遺物群 (S=1/6)

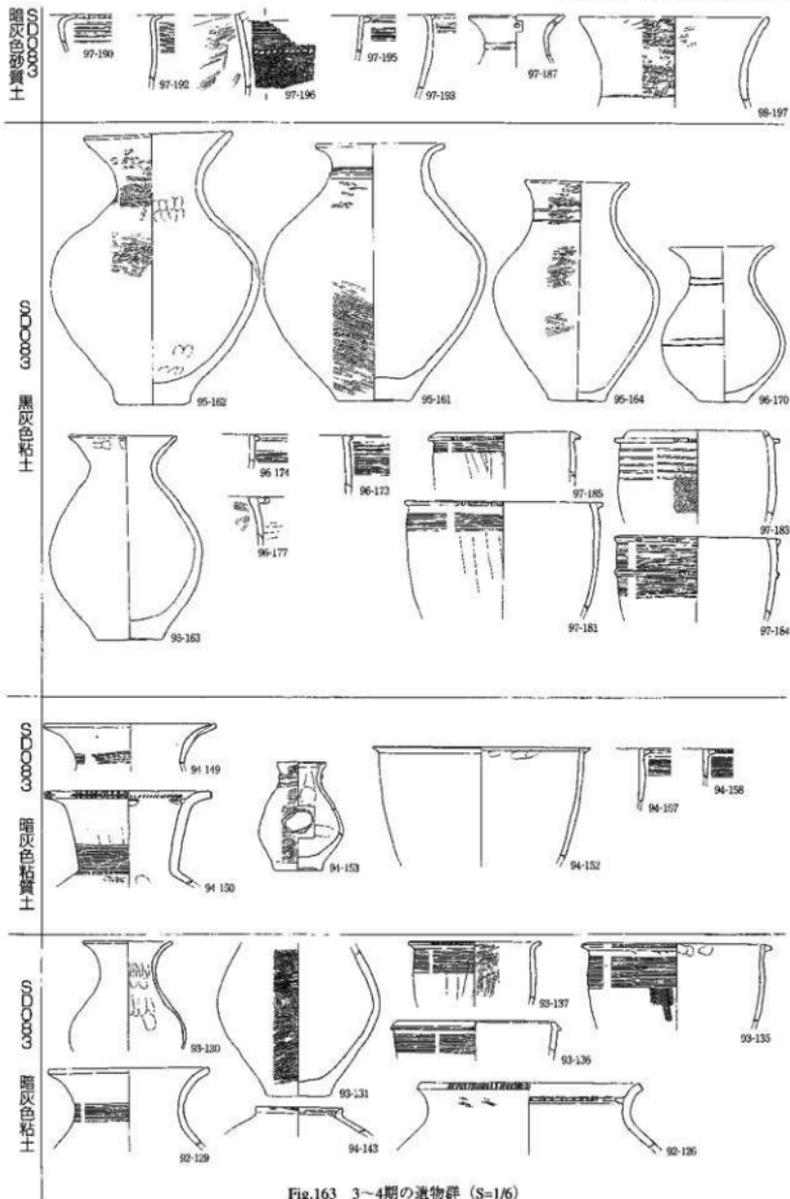


Fig.163 3~4期の遺物群 (S=1/6)

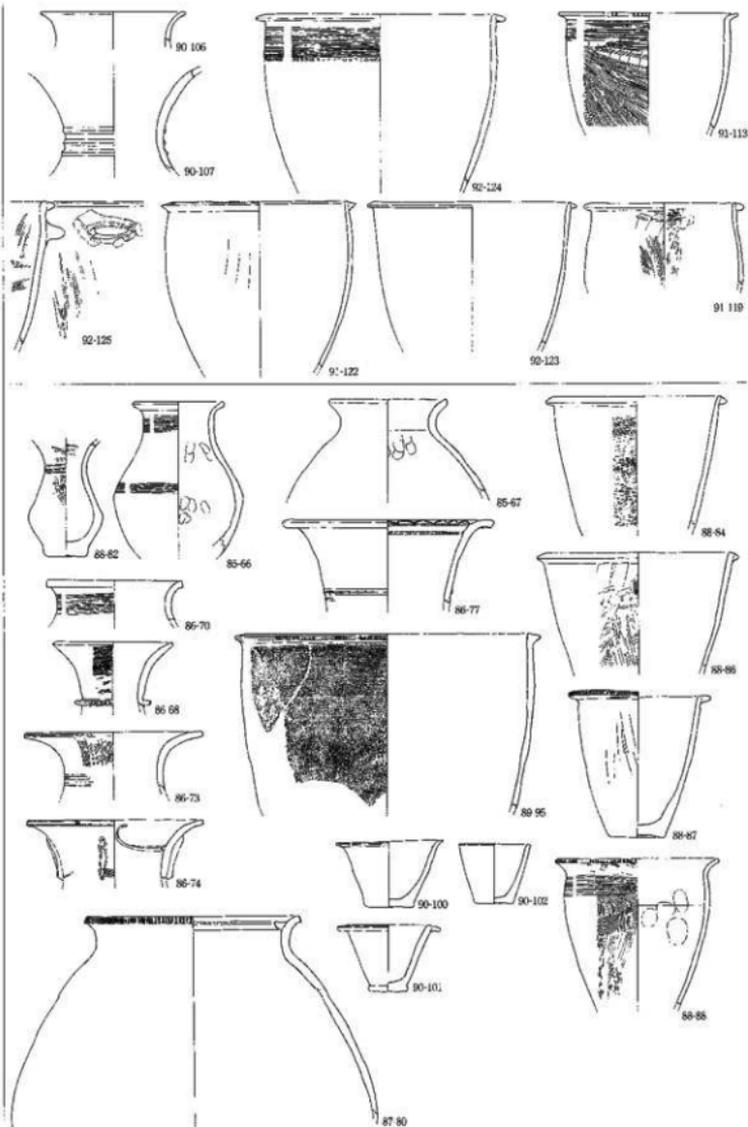


Fig.164 4・5期の遺物群 (S=1/6)

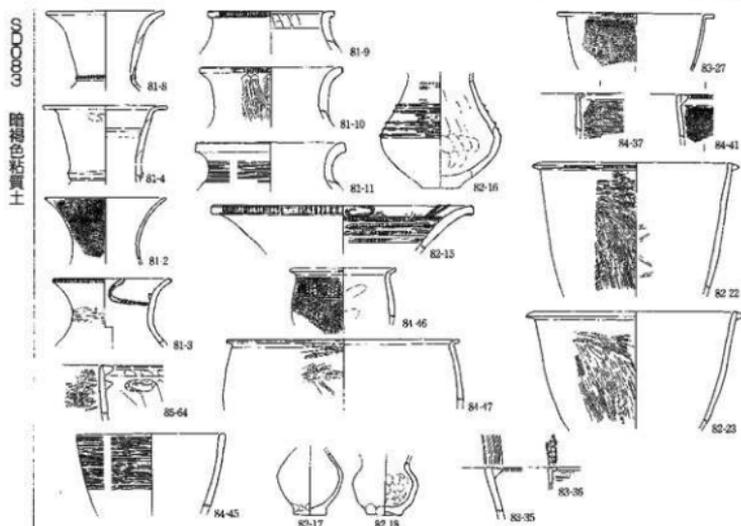


Fig.165 5期の遺物群 (S=1/6)

第5項 各遺構・層位の時期

前項において設定した時期区分をもとに、その他の遺構について時期を推定する。(組成比はTab.7参照)
 ・SD002 (SD134)

遺物の混じりが著しく、各層に渡って4期の遺物が混入している。下層に相当する黒灰色細砂において(40-48)のような広く開く口縁を持つ壺が存在しており、4期に浚深(掘り直し)が行われていたと考える。また、遺物量が少なく層別に数量的比較を行なうことも困難であり、掘削時期を決定することは難しいが、いくつか口縁部・頸部の境界に明確な削り出し突帯系の壺が存在することなどから3期新段階～4期初葉に掘削された可能性がある。最上層の掘り直し内出土の遺物には柳掻き沈線が含まれず、キザミ・沈線の消失した壺が少量であること、I唇部に文様帯の発達した壺がほとんど見られないことなど4期でも古い段階の要素を有する。溝掘削後短期間の内に再掘削され、埋め戻されたと考えられる。

・SD059 (SD167)

やはり各層の安定性は良好でない。土器群の構成要素を見ると、下層・最下層にあたる地山ブロック層・黒色粘土は逆「L」字状口縁を持つ壺の比率においては他と大きな違いはなく、口縁部直下の沈線の数は沈線を持たないものを主体にし、7～10条のものを主体とするという特徴を有する。しかしながら遺物量はいずれも口縁部破片数20個体以内で、数量的検討に耐えるものではない。そこで壺類の型

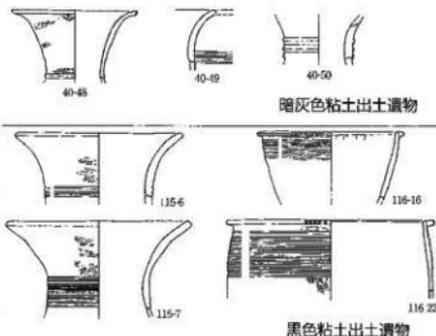


Fig.166 SD002・134下層の遺物と掘直し後の遺物 (S=1/6)

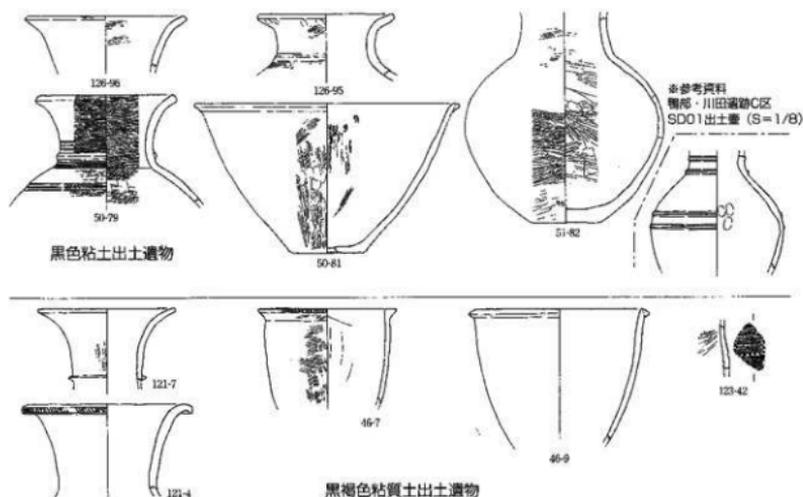


Fig.167 SD059・167下層の遺物と掘直し後の遺物 (S=1/6)

式を検討してみると、黒色粘土出土の壺類はFig.126-95のように3期の要素を強く持つものが存在する。(51-82)はイレギュラーな器形のものであるが、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す点に古い要素を見出すことができる。一の谷遺跡群8土坑出土の刻みを有する貼付け突帯のものや、鴨部・川田遺跡C区SD01出土の4~5期に並行するものなどに先行する器形のものとなる可能性がある^{10) 11)}。(50-79)は頸部と体部の境界が明確化し、境界部に貼付け突帯を持つ点などに新しい要素を見出すことができるが、口縁部の開きが小さい点や、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す点などに古式の要素を残しており、先に述べたSD081明黄褐色粘土出土の壺Fig.63-47の存在を考えると4期に先行するものと考えられる。以上の点より、SD059・167の埋没開始時期は3期新段階~4期初頭に位置づけられる。その後の各層はいずれも4期のうちに位置づけられ、4期段階に連続した浸漬がなされているといえる。他の溝河様、最終的に比較的大規模な掘直しが行われるが、この掘直し部分が埋没開始した時期に当たる黒褐色粘質土からは櫛描き沈線の菱が出上しており、掘直し部分の埋没開始は5期に位置づけられる。

第6項 環濠の変遷

2期 (Fig.166-1)

SD081最下層埋土の堆積が始まる時期である。SD081の開削時期については1期の土坑 (SK185) を切っていることから、それ以前ではない。他の溝はまだ掘られていない。

3期 (Fig.166-2)

古段階においてSD081が人為的に埋められる。その後ほとんど固を置かずSD083が掘られたものと考えられ、新段階には下層埋土の堆積が始まっている。また、SD059の埋没開始も3期新段階~4期初頭に位置づけられる。

4期 (Fig.167-2)

SD059・083は継続して浸漬や小規模な掘直しが行われ、機能している。新たにSD002が掘削されることが推定されるが、002は比較的短期間で埋没したと思われる。

5期 (Fig.167-3)

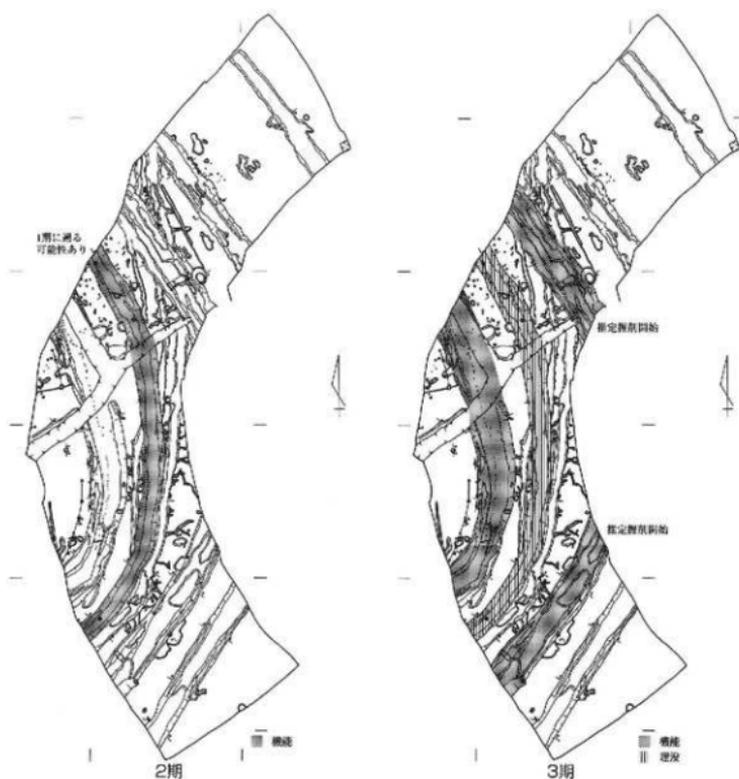


Fig.168 環濠変遷図 (I)

SD059・083において掘り直しが行われ、溝幅が縮小しながら維持される。最終的には5期のうちに大量の遺物を伴って人為的に埋め戻される。

以上が中の池遺跡9次調査における環濠の変遷である。これに加え、既往の調査をふまえて遺構の変遷を概観すると、8次調査で検出した、最内に位置する断面「V」字状を呈する環濠(SD031)は1期以前に掘削され、1期～2期に埋没する⁹⁾。9次調査SD081は8次調査SD031とある時期共存していた可能性がある。8次調査SD031は人為的に埋められるが、その後若干時間をおいて9次調査SD081も埋められ、その直後にSD059・083が掘られる。このプロセスを整理すると、基本的には8次調査SD031の内部空間が外側へと拡張し、3期には大規模な改変を伴ってSD083と059という内濠外濠のセットができあがるといえる。その後4期には新たに外側に溝SD002を設けるが、この段階でSD059・083は浸漬が行われているものの埋没が進み、水をたたえた状況ではなくなっていると考ええる。そしてSD002は短時間で埋没し、5期にはSD059・083において掘り直しが行われるものの、溝群の全てが埋め戻される。このように、中の池遺跡における環濠は、同時期に全ての溝が並存したのではなく、複数時期に渡る溝が、それぞれ異なる環境で掘削・機能(維持)・再掘削・廃絶したものであることが判明した。

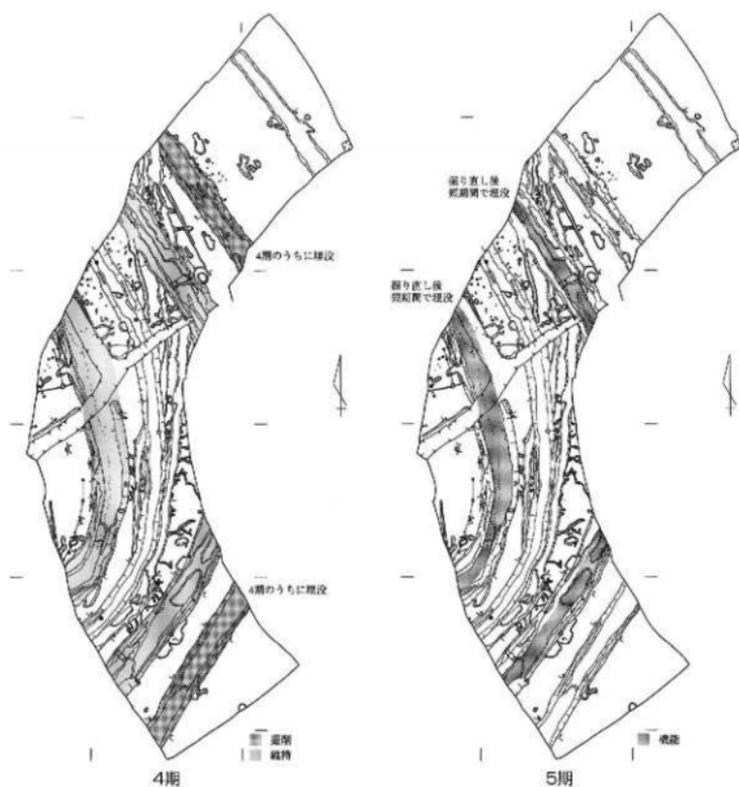


Fig.169 環境変遷図(2)

註

(1) 編年研究は長い研究史を持つが、90年代以降の研究として以下のものがある。本稿では主に森下編年を採用した。

真鍋昌宏 2000『讃岐地域』『弥生土器の様式と編年 四国編』菅原康夫・佐木謙一編 木耳社

宮崎哲治 1995『香川における弥生前期土器の分布』『財団法人香川県歴史文化財調査センター研究紀要』III 財団法人香川県歴史文化財調査センター

森下英治 1998『龍川五条遺跡Ⅰ上前期弥生土器の編年』『龍川五条遺跡Ⅱ 飯野東山崎南遺跡』四国横断自動車道建設に伴う歴史文化財発掘調査報告第29号 香川県教育委員会ほか

乗松真也・森下英治・信里芳紀 2000『讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅲ-前期後半~中期前葉の土器を中心として-』『財団法人香川県歴史文化財調査センター研究紀要』VIII 財団法人香川県歴史文化財調査センター

(2) 瀬戸内地域における地域性発現の問題については、吉田 広氏や秋山浩三氏の研究に詳しい。なかでも吉田氏はいわゆる瀬戸内型を構成する貼付口縁・多糸比叢・外面ミガキについて、それぞれの属性が互いに独立して作用している可能性を指摘されているが(吉田2004)、沈積多糸化と外面ミガキが連動しない状況や、知意状口縁と貼付口縁の比率がある程度で安定化するという本稿での分析はそれを裏付けるのではなからうか。
秋山浩三 1992『弥生前期土器-遺習式土器の地域性と古墳』『吉備の考古学的研究』近藤義郎編 山陽新聞社

吉田 広 2000「瀬戸内地域における濠賢川式土器の解体」『災害文と濠賢川』土器研究会論文集刊行会

2002「無形帯について」『大朝徳大先生古希記念論集 因国とその周辺の考古学』大朝徳大先生古希記念論文集刊行会

2004「因国における地域型変の成立と関関一瀬戸内型帯を中心に」『古代文化』第56巻第4号

(3) 森下・横原・桑松計1文献。これらの遺物は伊予方面の影響下で成立した可能性もあり、直接的系譜を考えることは難しい。しかし、濠賢川式の解体過程に連続においてこの形態の壺が独自に発生し、展開している可能性もまた否定できない。

(4) 森 雄也1997『鴨部・川田遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省因国地方建設局

(5) なお、前掲中の池遺跡8次調査報告書において内厚の貼り付け口縁を有する壺を通常の逆「L」字状壺の先行形態とみなし、これをごく少量含む遺物群を前期IIaに含めて遺構の時期を提示した。逆「L」字状口縁の壺出現を指標として時期区分を行うとするならば、あるいは前期II中期中の時期差と考えるのが妥当とも考えられる。いずれにせよ、逆「L」字状口縁を持つ壺の量比は8次調査SD031が圧倒的に少なく、他の遺構の型式も占相を示していることは事実である。

第2節 環濠に関する所見

前節でも述べたとおり、今回の調査の大きな意義は環濠の形成・変遷について多くの資料を得たことである。本節では、さらに環濠集落研究における重要な注目点である環濠の機能と土層の問題について、調査の所見を整理してみる。

第1項 環濠の機能について

まず環濠の機能についてであるが、これについてはすでに先学により様々な解釈が行われている。大きく分けると、戦闘行為などを伴った防御施設や除害、動物などからの防御といった何らかの実質的機能を有したものとする意見⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾と、外界との精神的境界の明示や地域社会における階層関係明示のモニュメント、大陸から稲作に伴って伝来した農業集落の基本的装置といった抽象的・概念的なものであるという意見⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾の二つに分けられる。おそらく環濠の機能は単一の論理だけではなく、複数の目的・機能を有していたと考えられる。ここでは環濠埋土の観察から得られる環濠機能についての所見を整理する。

まず環濠の掘削当初の環境について、断面観察から得られた情報を整理する。環濠内底部の堆積物の特徴は以下の通りである。

- ・構成物質は粘土・シルトを中心とし、ラミナおよび級化構造がみられる。
- ・砂礫で構成される薄層は見られない。
- ・最下層の生物・人為・植物擾乱は顕著でない。

この堆積物の状況からは、環濠が当初は水を溜えたものであったことを示すが、激しい流水の痕跡などは見られず、基幹水路として機能していた可能性は低い。しかし完全な滞水状況ではなく、ラミナや級化構造の存在から緩やかな水の入れ替わりが存在したことが指摘でき、水が供給される部分が環濠のどこかに存在した可能性がある。

以上の想定を補強すべく、第11次調査においてSD083の延長にあたる溝の最下層から不擾乱土壌サンプルを採取、これを厚さ1cmに削り、軟X線で撮影した(Fig.170・171)。これを観察すると、ベース上直上より肉眼観察でグラデーションと見ていたものが、粒子の大きいものと細かいものの互層であることがわかる。この状況は、黒色粘土という土層が、複数のイベントで形成されたユニットの集合体であることを意味する。また、これらのユニットはいずれも級化もしくは逆級化を示しており、一定量の水が断続的に供給される状況にあったことを示す。そして黒色粘土と暗灰色粘土境界付近からは多くの植物根茎が貫入しており、黒色粘土堆積最終段階には植物が生成する環境になっていたといえる。また、土層観察・遺物の分析で浸漬の存在を強く指摘していたが、写真右上の部分は土層が細かく切断され、角塊状の状態で存在している。擾乱の規模などから、人間の行為に伴うものと考えられる。また、中央付近は土層が切断されており、微小層や角塊状に截断されたブロックが存在する変形構造が見られる。おそらく地震による変形構造であると思われる。⁽⁷⁾

さらに、自然科学分析の結果をみると、いずれの溝のサンプルも最下層は一定量の流水性起源の珪藻が存在し、中層からは滲水性の珪藻が増加、上層からは珪藻そのものの出土が少なくなる傾向があり、結論としていずれの溝も最下層堆積時は流水の影響のあるやや不安定な滞水環境であったという、考古学的検討と一致する結果が得られている。

以上のことから、中の池遺跡の溝はいずれも掘削当初は流水の影響のある不安定な滞水状況を示していたことになる。以上の条件を作り出すための水の供給源として大きな要素となるのが本文中でも指摘した湧水である。弥生時代の湧水レベルが現代とどれほど違っていたかについては検討がないが、海水面の変動を考えるとそれほど大きな差はなかったものと考えられる。すでに指摘している通り、中の池遺跡の環濠は溝底に窪みを掘り込み、意図的に湧水を確保している。また、寄生虫分析の結果、寄生虫卵は見られず、環濠は比較的清潔に保たれていたようである。さらに、2002年に、第11次調査として今回の調査地から200mほど東で調査を行ったが、この調査区は微高地で湧水が一切無いかもかわらず弥生時代の遺構が一切見られなかった。これらの状況から、集落建設の際の占地において、意図的に地下湧水の影響を受け易い場所を選んでいた可能性すらうかがえる。以上のことより、当遺跡において必要以上に多くの溝をめぐらせる理由として、居住域の乾燥化と湧水の利用があったものと考えられる。

その後の環濠の推移であるが、断面観察からは液濠・掘り直しといった維持管理が行われていたことが確認でき、前期末から中期初頭には掘り直しが行われている。しかしこの段階では湧水利用の痕跡が見られず、溝が乾燥化していたものと思われ、建濠分析の結果もこれを裏付ける。また、寄生虫卵は下層同様みられず、環濠が埋め戻される最終段階に至るまで清潔に保たれていたものと考えられる。掘り直し後の溝は幅も狭く、深さも浅いことから、防衛としての機能は与えがたく、やはり環濠そのものが象徴的な意味を持っていたといえそうである。

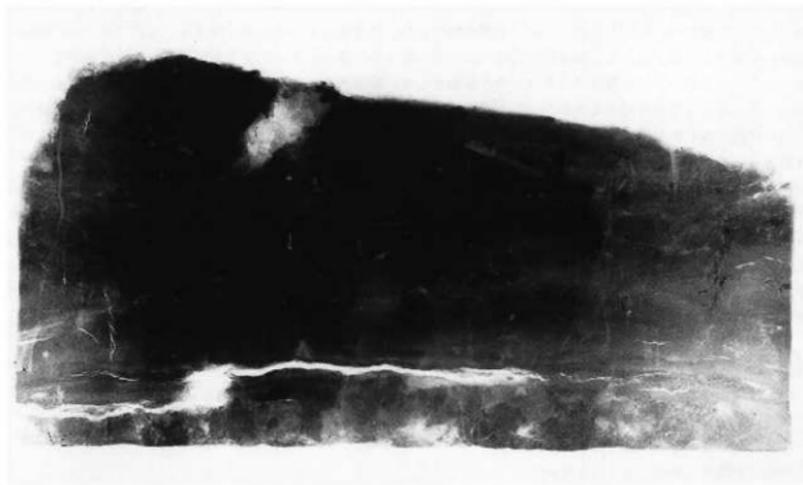


Fig.170 第11次調査SD083延長部分最下層不擾乱土壌軟X線写真 (S=1/5)

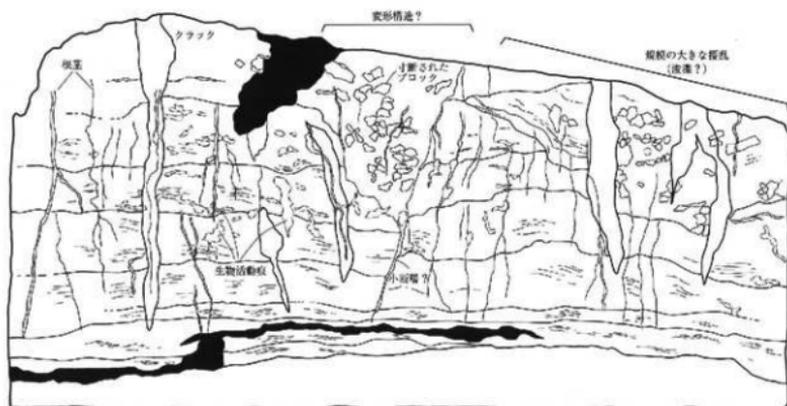


Fig.171 第11次調査SD083延長部分最下層不擾乱土壌資料軟X線写真構造模式図 (S=1/5)

第2項 土塁の存在について

次に環濠に付随する施設についてであるが、これについては第8次調査の報告書において土塁と溝について言及した。第8次調査ではSD031が地山ブロックで人為的に埋められていることから土塁の存在を指摘したが、今回の調査でSD0811においても同様に地山ブロックで埋められていることが判明した。しかし、縦断面を観察したところ、地山ブロックは全周するものではなく、部分的にしか存在していないことが判明し、さらに、地山ブロックで埋められなかった部分は、しばらく開口状態で放置されていたことも明らかになった。つまり、地山ブロックの起源は環濠に付随する土塁ではなく、環濠掘削当時の排土で、部分的に置かれていた置き土に過ぎない可能性が生じたといえる。また、これを裏付けるもう一つの根拠として、環濠最終埋土に関する解釈をあげたい。各環濠の最終段階には人為的な埋没が認められるが、この埋土は土壌化の著しい、土器の碎片を多量に含む土である。土器片には古い時期のものも大量に含まれ、例えば先述のFig.97-186の土鍾のように、下層遺物と接合関係を有するものが複数ある。この前提条件のもとこの土の起源として最も合理的に説明できるのは、これが溝浚深時の泥を起源としているということである。これが成り立つとすれば、埋め戻しに際して土塁に手をつけず、周囲に積んであった浚深時の泥を利用してということになる。溝を埋め戻すという行為は、集落の完全な終焉を明示する象徴的な行為（例えば中世館における自焼のような）、もしくは集落域の耕地化のような新たな土地利用を見込んだ土地改変に伴う行為である。その場合、溝のみを埋め、土塁を残すことは考えにくい。仮説の上に仮説を積むことになるが、環濠を埋め立てるにあたり、浚深土を使い土塁に一切手をつけないという状況は想定しがたく、むしろ土塁そのものがはじめから存在していなかった可能性が考えられよう。

第3項 まとめ

以上、今回の調査で判明した環濠に関する所見をまとめてみると、以下に集約される。

- ・環濠掘削当初は流水影響のある不安定な滞水状態であり、上層へ行くほど乾燥化する。
 - ・環濠内は比較的清浄に保たれていた。
 - ・環濠は乾燥化した後も割りなおされる。
 - ・以上の条件から帰結される環濠の機能としては、土地の乾燥化と湧水の利用という実利的機能、区画の明示といった象徴的機能の二側面が想定できる。
 - ・環濠を埋める地山ブロックは土塁ではなく置き土である可能性が高い。
 - ・環濠は溝浚深土でも埋められると考えられる。
 - ・以上の仮定から環濠に土塁が伴っていなかった可能性が高い。
- いまだ完全な論証がなされたとは思わないが、環濠集落の多様な一面を提示できたと考え、今後の調査における検証を期待したい。

註

- (1) 郡山北円志 1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29巻4号
 - (2) 佐原 真 1987『大浜日本の歴史』1 小学館
 - (3) 春成秀樹 1990『弥生時代の始まり』東京大学出版会
 - (4) 武本純一 1990「北部九州の環濠集落」『乙姫重隆先生古高記念 九州上代文化論集』乙姫重隆先生古高記念論文集刊行会
 - (5) 伊藤 実 1991「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」『古文化論叢 児嶋隆人先生喜寿記念論集』児嶋隆人先生喜寿記念事業会
 - (6) 吉賀秀敏 1994「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』第33集 九州古文化研究会
 - (7) 池田重徳については松田順一郎氏の考察を手がかりとした。
- 松田順一郎 1995「新家遺跡発掘調査地（その6）における沼原堆積物の地震による変形構造」『新家遺跡 第6次発掘調査報告書』大坂府文化財調査研究センター調査報告書第2集 大坂府文化財調査研究センター ほか

第3節 中の池遺跡における石器組成とその特徴

第9次中の池遺跡の調査で総点数5033点出土している。石器組成については (Tab.8) にまとめた。弥生時代の石器の組成は近年の報告書で精力的に行われ、地域間での比較が可能なほどデータの蓄積がなされてきている。遺跡間の組成の違いは集団の個性を表すとともに、地域間の傾向を示しているといえる。

本論では中の池遺跡における石器組成の特徴を取り上げ、中の池遺跡の集団の理解を試みたい。

第1項 各遺構の石器組成の特徴

<SD002・134>

石器の出土量は少なく両溝を合わせても6.5%で、石器組成の器種のバリエーションも少ない。これは溝が比較的短期間に埋没したためと考えられる。SD134の黒色粘土のA区にやや集中的な出土が認められるが、それ以外に集中して出土する層や地区はない。

<SD059・167>

石器組成全体に占める割合は両溝合わせて20.3%で器種も多様である。こうした傾向は、溝の存続時間が比較的長かったためと考えられる。SD167の出土量がSD059に比べ多いのは黒褐色粘質土のB区に集中的に石器が投棄されていたためである。

<SD081>

石器の出土が一定量みられ、石器組成全体に占める割合は13.2%で器種のバリエーションも豊富であるが、溝の

		遺構名										合計	石器組成中に占める割合
		SD002	SD059	SD081	SD083	SD134	SD167	SD131	水田塚	SK185	その他の遺構		
狩猟・武器類	打製石鏃(朱製品)	3(1)	2	12(5)	37(10)	4(2)	11(3)	2(2)	1	1	4(1)	76(24)	12.9%
	(平基式)			5	7	1	2				2		
	(凹基式)	2	2	1	12	1	5		1		1		
	(凸基式)			1	4		2						
工具	石鏃(朱製品を含む)		1	3	18(3)		3				1	25	4.2%
	石鏃(朱製品を含む)		1	1(1)	2		5(1)					10	1.7%
	スクレイパー	20	32	86	111	10	29	2	1	2	2	275	46.6%
	石小刀		1									1	0.17%
石斧 (加工斧)	ノッチ				2		1					3	0.51%
	柱状片刃石斧		1		13		1				15	2.55%	
	扁平片刃石斧	2		1	5		2				10	1.7%	
	小型片状石斧				2						2	0.34%	
石斧 (快落斧)	小型門柱状石斧			1	1						2	0.34%	
	磨製石斧(大型給刃石斧)	1		3	5(1)					1	10	1.7%	
	磨製石包丁(朱製品を含む)	4	1	2(1)	14	2	6		1	1	31	5.2%	
	打製石包丁	2	2	3	16	3	8		4	1	38	6.4%	
道具	磨製石鏃			1	1						1	0.17%	
	打製石鏃			1							1	0.17%	
漁撈具	石鏃						1				1	0.17%	
	石鏃・磨石	2	4	4	11	3	1				25	4.24%	
調理具	くぼみ石	3	7	6	37	2	4	1			60	10.18%	
	磨石				1						1	0.17%	
貯蔵具	磨石				1						1	0.17%	
	磨石				1				1		1	0.17%	
その他	磨石				1						1	0.17%	
	不明石製品				1						1	0.17%	
小計		38	51	103	275	24	72	5	9	2	10	589	
石器組成中に占める割合		6.45%	8.65%	17.49%	46.69%	4.07%	12.22%	0.85%	1.53%	0.34%	0.17%		100.00%

		遺構名										合計	石器組成中に占める割合
		SD002	SD059	SD081	SD083	SD134	SD167	SD131	水田塚	SK185	その他の遺構		
石器製作具	石核	15	12	50	128	8	20	1	2		1	237	5.3%
	楔形石核	10	18	47	216	6	60	1	3		3	354	8.19%
	削片類	82	194	403	2116	116	527	11	21	33	21	3524	79.36%
	(板状削片)	(8)	(17)	(38)	(80)	(4)	(8)	(1)	(1)			(157)	
	(サヌカイ以外の削片)	(1)	(2)	(7)	(14)	(2)	(2)	(1)	(1)	(1)	(2)	(5)	
	二次加工ある削片	8	23	46	119	12	29	1	3	2	7	249	5.6%
	磨石	2	5	4	5	4	1	1				20	0.45%
	磨石				1							1	0.02%
	硯石	2	7	10	22	3	1	1	1	1	2	49	1.16%
	小計		117	259	582	488	149	638	15	30	36	34	4444
石器製作具中に占める割合		2.63%	5.63%	12.85%	58.60%	3.35%	14.36%	0.34%	0.68%	0.81%	0.77%		100.00%
合計計		155	310	685	2879	173	710	20	39	38	44	5033	
石器組成全体に占める割合		3.08%	6.16%	13.21%	57.20%	3.44%	14.11%	0.40%	0.77%	0.76%	0.87%		100.00%

Tab.8 遺構別石器組成表

存続期間の割に石器の出土量が少ない傾向にある。これは石器を最も包含していると考えられる上層を、古墳時代の溝SD082・SD084・SD085が切っているためと考えられる。明黄褐色粘土のD区に集中して出土しているほかは、石器が集中して出土する層や地区はない。

<SD083>

石器および石器類の出土量が最も多く、また器種も多様で、大陸系磨製石器の器種が磨製石鏃を除きすべて揃う。特に暗褐色粘質土のG区と暗褐色砂質土のA区に集中的に石器類の投棄がみられる。SD083の暗褐色粘質土は人為的に埋め戻されたと思定されるが、その際に完形の遺物も含めて廃棄されたものと考えられる。

<SD131>

石器の出土は少なく、石器組成に占める割合は0.4%で石器の器種も少ない。これは溝の堆積が浅く、また自然堆積であることに起因すると考えられる。

<水田域>

水田域出土の石器は石器組成全体の1%にも満たない。打製石包丁が他の遺構に比べて高率で出土しているほかは、石核や剥片類も出土しているものの、各グリッドにまばらにみられる程度で、水田域での石器生産を示すほどのものではない。水田域出土の石器で特筆できるのは、磨製石包丁と砥石がセットで出土していることである。磨製石包丁の使用の際には研ぎ直しが頻繁に行われていたことを示しているといえる。また環状石斧も水田域から出土しており、形態から機能が確定しにくい器種であるが、その使用方法を考える上で出土地点が重要な要素となりうると考えられる。

<SK185>

土器との共伴関係から一括性の高い資料であると考えられる。スクレイパーと剥片類、砥石が出土しているが、石核や敲き石の出土はない。土器を廃棄する際に石器や剥片類もまとめて廃棄したものと考えられる。

第2項 狩猟・武器類

第8次調査では層灰岩製の磨製石剣が出土しているが⁴⁾、第9次調査では狩猟具武

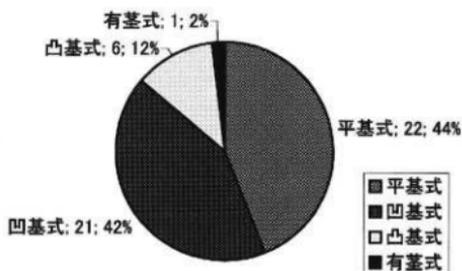
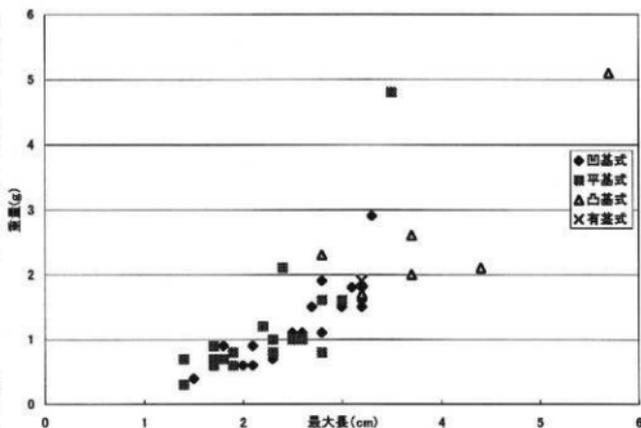


Fig.172 石鏃形態の比率



器に相当する石器は石鏃のみである。石鏃の石材はすべてサヌカイトで、他の石材は使用されていない。磨製石包丁に転用されたと考えられる磨製石剣あるいは石戈が出土しているが、完形あるいは形態がわかる状態で石剣や石戈、投擲等は出土していない。

<石鏃>

石鏃は52点出土している。形態が欠損で不明のものを除いた形態別の割合は（Fig.172）に示した。平基式と凹基式で43点、全体の86%を占め、平基式と凹基式の割合はほぼ同数である。凸基式が6点で全体の12%、有茎式が1点、全体の2%である。有茎式の石鏃（Fig.78-219）は、基部は鏃身の下半部の両側縁に深く大きい剝離を一回施した後、さらに方向を変化させて調整を加えることで刃縁と茎部の境界点を明瞭に作り出しており、松木武彦氏のA技法とC技法の折衷型のような技法である⁹⁾。

石鏃の全長は2.0cm未満のものが全体の50%を占め、3.0cm以上の大型の石鏃も27%確認できる。重量は1.0g未満のものが24点・44%で主体を占め、2.0gを超える大型の石鏃も10点・23%を占める。一部を欠損しているものもこの分析内を含めているため、復元を行うと大型石鏃の割合はもう少し増えると考えられるため、中の池遺跡の石鏃は1.0g前後の石鏃と2.0gを超える大型の石鏃とはほぼ二分される傾向にある。また刃部を鋭歯状に調整したのも全体の15%を占める。

第3項 工具

工具類は石鏃、石匙、スクレイパー、石小刀、ノッチ、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、小型方柱状石斧、小型円柱状石斧、磨製石斧、大型磨刃石斧が出土している。

<スクレイパー>

石器組成中に占めるスクレイパーの割合は高く47%を占めている。石器組成のほぼ半分を占めており、中の池遺跡の石器製作の中心はスクレイパーの製作であったといえる。石材はすべてサヌカイトで、素材となっている剥片類は多様な形態を示しており、特定の剥片を意識的に剝離・選択した様子はない。刃部は剥片の端部に両面調整あるいは片面調整によって作り出されており、体部に素材面を残すことが多い傾向にある。背部は自然面や折れ面のほかに、刃直し加工が施されることが多い。

香川県の弥生時代前期の遺跡の石器組成中でスクレイパーの割合が高いことはすでに指摘されており、坂出市下川津遺跡の報告ではスクレイパーが万能の器具として多用されたためこのような多さを示すと理解されている¹⁰⁾。中の池遺跡においてもスクレイパーが石器組成中に占める割合は非常に高率であることから、その傾向によく符合している。しかし万能器具としたスクレイパーの中に打製石包丁にみられるような光沢面のある例は確認できていない。これは打製石包丁のような大型の

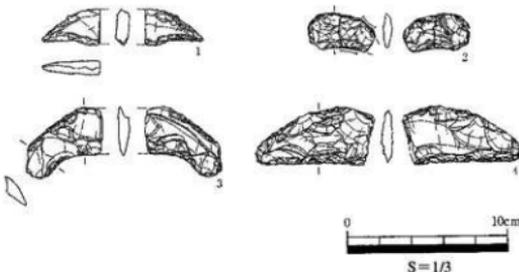


Fig.174 香川県下出土の石小刀

図録番号	遺跡名	報告書 資料番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	埋蔵時期	出土地点	報告書名	副題
1	中の池遺跡	52-97	2.2	(3.7)	0.9	(7.0)	サヌカイト	中期初葉	SD059 香川県遺跡 第10次調査	中の池遺跡 第10次調査	総合遺跡公開情報集巻7に伴う 香川県文化財保護課調査報告書
2	下川津遺跡	560-15	4.2	2.4	0.5	22.7	サヌカイト	前期前半	SDR2 K17区	下川津遺跡	香川県文化財保護課調査報告書Ⅶ 下川津遺跡
3	輪廊・川田遺跡	225-058	(4.2)	4.4	0.9	(14.0)	サヌカイト	前期後半	C区 SD01出土	輪廊・川田遺跡	高松県遺跡調査に伴う 香川県文化財保護課調査報告書7期 香川県文化財保護課調査報告書Ⅶ
4	大瀬浜遺跡	148-19	3.6	7.4	0.7	23.1	サヌカイト	前期	K-36	大瀬浜遺跡	香川県文化財保護課調査報告書Ⅶ 香川県文化財保護課調査報告書Ⅶ

Tab.9 香川県下出土の石小刀

スクレイパー以外は取換具として用いられていなかったか、あるいは用いられるとしても光沢面が付着するほどの使用がなされていなかったためと考えられる。

<石小刀>

石小刀は弥生時代前期から後期初頭にかけて畿内を中心に瀬戸内と東海地方に分布する「両面調整尖頭削器のうち外湾する外側の刃部と、内湾もしくは直線形の内側の刃部を対辺にもつ縦長い石器である」と定義されている¹³⁾。石材はサヌカイトを用いるが、例外的に愛知県清洲町朝日遺跡では下呂石製の石小刀が1点出土している。石小刀の形態は多様であるが、個体による差はあれども形態をもとに、全体に弧を描くI類、先端近くで折れ曲がるII類、内刃側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くIII類に分類できる¹⁴⁾。さらに調整から、特別な調整を施さないa類、内刃側に突起を作り出すb類、刃部と基部の調整が異なるc類に分類できる。このうちI類については突起を作り出すb類は確認できない。

Ia類…全体が弧を描くもの。

Ic類…全体が弧を描くもので、刃部と基部の調整が異なるもの。

IIa類…先端近くで折れ曲がるもの。

IIb類…先端近くで折れ曲がるもので、内刃側に突起があるもの。

IIc類…先端近くで折れ曲がるもので、刃部と基部の調整が異なるもの。

IIIa類…内刃側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くもの。

IIIb類…内刃側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くもので、突起があるもの。

IIIc類…内刃側はほぼ直線的であるが、外刃側が弧を描くもので、刃部と基部の調整が異なるもの。

香川県下における石小刀の出土例は少なく（Fig.174, Tab.9）、時期は弥生時代前期から中期初頭に集中している。畿内では石小刀の出土数の多い中期中葉から後葉にかけては確認できない。香川県下出土の石小刀を個別にみていくと、中の池遺跡出土例は、内刃の形態は直線状で、刃部先端にかけて両面調整が施されている。素材面を残し、調整は刃部先端にかけて丁寧になっている。基部は折損するが形態分類のIIIc類に相当するものと考えられる。下川津遺跡出土例は両面調整が施され、素材面は確認できない。刃部と基部の境界はなく、IIIa類に属する。他の遺跡で出土している石小刀にくらべ小形で薄形である。鴨部・川山遺跡出土例は先端近くで折れ曲がる形態で、素材面を大きく残し、刃部は両面調整されている。基部付近の調整は欠損しているため不明であるが、残存している基部の調整は刃部とは異なる大きな剥離面である。IIc類に属する。大浦浜遺跡出土例は報告書ではスクレイパーと報告されているが、完全に両面調整が施されており、刃部と基部の調整の違いはなく、IIIa類に属する。畿内においても弥生時代中期に同様の形態の石小刀が多くみられる。

弥生時代中期において石小刀が他地域に比べて卓越する畿内においても弥生時代前期～中期初頭の例は稀である（Fig.175, Tab.10）。大阪府東大阪市友井東遺跡出土例はやや内湾する内刃に突起を有する。また刃部先端と端部を欠損する。両側側面から刃部は鋸歯状を呈する。小突起と相対する刃部の一部は欠損するが、基部よりでは鋸歯縁は認められず、基部は損部までの約2cmの縁は鈍くなっている。刃部先端縁は両辺とも僅かに摩滅している。分類のIIIb・c類に属する。大阪府八尾市久宝寺南遺跡出土例は両面とも稜に至る剥離により断面形は扁平な菱形を呈している。上平面の基部に素材面を残しており、縦

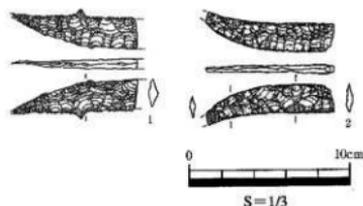


Fig.175 畿内出土の石小刀（前期資料）

図版番号	遺跡名	報告書資料番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	所属時期	出土地点	報告書名	副題
1	友井東遺跡	8-52	(7.8)	2.5	0.7	(9.6)	サヌカイト	前期後半	前期遺	友井東(その2)	近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査成果報告書
2	久宝寺南遺跡	1-55	(7.8)	1.77	0.56	(8.0)	サヌカイト	前期	弥生時代前期 遺跡出土(Ⅴ)期	久宝寺南(その1)	近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査成果報告書

Tab.10 畿内出土の石小刀（前期資料）

長調片を素材としていることが伺える。基部の両側縁には僅かながら磨り落としが認められる。分類のIIIc類に属する。

香川県下出土の石小刀の傾向として体部に素材面を残して調整されていることが多いが、畿内では完全に両面調整される傾向にある。こうした要因は金山産サヌカイトが石理に沿って扁平に割れ、断面が六角形になるという性質に起因し、二上山産サヌカイトを用いたときのように両面調整で断面を菱形に調整することが困難であるためと考えられる。そのため畿内でも出土するような精巧な調整を施したものが少ない。こうした傾向は打製石剣の調整に認められる傾向と一致しており、金山産サヌカイトを用いた石小刀が二上山産サヌカイトを用いた石小刀とは別器種の石器であるということにはならないといえる。

石小刀は弥生時代になって突如として成立するが、縄文時代の石器にその系譜をたどることはできていない。弥生時代の石器組成中では形態的によく似た磨製石鎌や打製石鎌が考えられるが、法量の違いや背部を調整で作り出すなど、両刃で小形の石小刀とは異なる点が多いため略的に結びつけることは困難である。しかし香川県下で石小刀が出土する遺跡では磨製石鎌や打製石鎌が出土しており、組成の点で一定の傾向がみられる。今後、弥生時代前期に属する資料が蓄積されることでその成立を明らかにしていく必要がある。

<石斧>

石斧は伐採斧と加工斧の割合は、伐採斧1.7%、加工斧である扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、小型方柱状石斧、小形片柱状石斧を合わせて4.8%である。伐採斧のうち太型給刃石斧の割合は極めて低く、1点・0.17%で、他の伐採斧も小形のものが多く、石材は太型給刃石斧がヒン岩、その他の磨製石斧は結晶片岩、安山岩である。加工斧は結晶片岩を主体とし、流紋岩と凝灰岩、安山岩系の岩石が含まれている。石斧の未製品は出土していない。また破損品が多く、刃部には使用によると考えられる潰れがみられる。

石斧が石器組成全体に占める割合は伐採斧・加工斧両方を合わせても一割にも満たず、木材の伐採・加工の重要度は遺跡内では相対的に低かったと考えられる。

第4項 農具

農具は磨製石包丁、打製石包丁、磨製石鎌、打製石鎌が出土している。打製石斧は出土していない。

<石包丁>

磨製石包丁と打製石包丁は31点と38点であり、若くは打製石包丁が多い傾向にある。香川県下においては弥生時代前期後半から打製石包丁が定型化し、中期からは打製石包丁が取換具の主体を占め、磨製石包丁はほとんど姿を消すが、中の池遺跡の資料は磨製から両刃の打製石包丁への過渡期的な様相を示しているといえる。

磨製石包丁の石材は安山岩と流紋岩、結晶片岩、粘板岩、シルト岩である。地元で産出される安山岩と流紋岩製のもの、搬入石材である結晶片岩製のものと割合はほぼ半々である。磨製石包丁の形態は外湾片半月形、杏仁形、長方形があり、長方形が主体を占めるが、多形式が併存する傾向を示す。石材と形態に相関関係はみられない。流紋岩製磨製石包丁については未製品が出土しており (Fig108-276)、後に石器製作の項でも述べるが、遺跡内で磨製石包丁の素材となる安山岩・流紋岩・結晶片岩等の剥片類の出土数は少ないため、半製品状態で遺跡内に搬入されたと考えられる。

また転用の可能性が考えられる磨製石包丁と磨製石包丁未製品も出土している (Fig128-115、72-180)。特に (Fig128-115) の石包丁は石剣あるいは石戈からの転用が考えられ、石材も青色の片岩製で他の磨製石器の石材の様相とは明らかに異なっている。

打製石包丁の形態には、両刃の打製石包丁 (I類) と片刃の打製石包丁 (II類)、抉りのない打製石包丁 (III類) がある。I類には最大長が8cm前後の小形の石包丁 (Fig74-191、104-256) と10cm以上の石包丁がみられる。石材はサヌカイトを用い、調整は素材面を大きく残し、背部は背潰し加工を行うことが多いが、(Fig103-255) のように背部に研磨痕を有する例もある。刃部の調整は両面調整で、浅形細部調整のものと同様に極浅細部調整のものがある。また (Fig104-257) のように刃部を鋸歯状に仕上げている例もある。形態・調整ともに多様であるが、形態による時期差は存在しない。多形式の並存は両刃の石包丁への移行段階の過渡期的な様相であると考えられる。

また光沢面を有する例も確認できる。光沢面については使用痕分析を行っておらず、肉眼観察であるが、すべて



Fig.176 香川県下出土の磨製石鏃

図版番号	遺跡名	報告書 頁数番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	所属時期	出土地点	報告書名	副題
1	中の池遺跡	106-266	19.2	4.2	1.1	(27.6)	緑泥片岩	中期初期	SD03 黒褐色粘質土	中の池遺跡 第2・10次発掘	総合調査公開資料集第1巻に付 うま屋文化財発掘調査報告書
2	龍川五条遺跡	27-2516	(12.0)	4.1	0.9	(73.6)	緑泥片岩	前期中期	GD49 最下層	龍川五条遺跡②・ 龍野東分山崎遺跡	四国県新自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書第2巻
3	龍川五条遺跡	192-024	(9.9)	4.6	1.3	(72.1)	結晶片岩	前期中期 一最層	SD50	龍川五条遺跡①	四国県新自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書第2巻
4	鴨部・川田遺跡	57-4336	15.6	3.6	1.0	86.5	結晶片岩	前期後葉	SD01 3区中央層 最下層	鴨部・川田遺跡②	四国県新自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書第2巻
5	鴨部・川田遺跡	256-1264	(11.3)	5.9	1.2	(53.4)	流紋岩	前期	CR8 包含層	鴨部・川田遺跡①	埋蔵文化財発掘調査報告書第2巻

Tab.11 香川県下出土の磨製石鏃

の打製石包丁に光沢面が確認できるわけではない。

<石鏃>

中の池遺跡出土の磨製石鏃は緑泥片岩素材で、大型の刃部直線型である。全面に丁寧な研磨が施され、柄への装着部と考えられる浅い切りがある。刃部は袈裟部から先端に向かって約9.8cmの間に設けられているが、先端部約2.2cm間には刃部は作り出されておらず、先端は使用の際の機能部ではなかったと考えられる。また光沢面は確認できない。打製石鏃はサヌカイト製で、背面体部に自然面を大きく残し、背部にも一部自然面が残る。背部は刃漬し加工が、刃部には両面調整が施されている。背部から腹面全体にかけて強い光沢面がみられる。

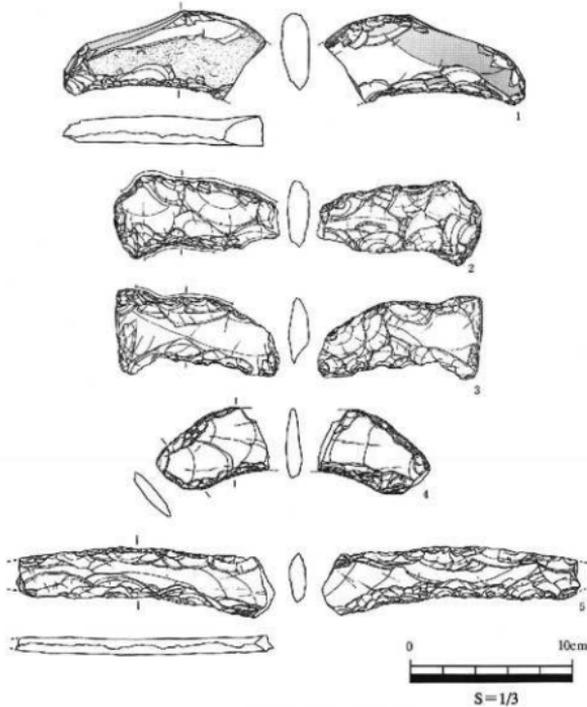


Fig.177 香川県下出土の打製石録

図版番号	遺跡名	報告書 資料番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	所属時期	出土地点	報告書名	副題
1	中の池遺跡	111-288	(12.3)	5.5	1.7	(130.5)	サヌカイ	弥生時代 前期後半	SD083 黒灰色粘土	中の池遺跡 第9・10次調査	総合運動公園整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
2	下川津遺跡	131-1	10.0	5.2	1.3	77.0	サヌカイ	弥生時代 前期前半	44区、11層下	下川津遺跡	瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告
3	下川津遺跡	131-2	10.0	5.3	1.2	71.2	サヌカイ	弥生時代 前期前半	#12区、84層	下川津遺跡	瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告
4	輪部・川田遺跡	269-1094	(6.9)	5.1	0.9	(34.8)	サヌカイ	弥生時代 前期後半	C区 S405	輪部・川田遺跡	高松東道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告第7号
5	川津一ノ又遺跡	202-2238	(15.8)	3.7	1.1	(78.3)	サヌカイ	弥生時代 中期中葉 一葉期初	中央部包含層 第1-2層	川津一ノ又遺跡	中小河川大東川改修事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

Tab.12 香川県下出土の打製石録

香川県下で出土している磨製石録と打製石録の集成を以下の表にまとめた (Fig.176・177, Tab.11・12)。磨製石録の出土は各遺跡1・2点ほどで、時期は前期中葉から中期初葉にかけてである。前期中葉が四国地域における磨製石録の出現期と考えられ、龍川五条遺跡出土例と田村遺跡群Loc.44で出土している磨製石録が相当する。前期の段階の磨製石録は全面研磨を行う例は稀で、部分研磨のものが多くという傾向にある。

打製石録も磨製石録と同様の傾向がみられ、各遺跡数点の出土である。時期は弥生時代前期前半から弥生後期初

頭である。打製石鎌は縄文時代後期からみられるが、縄文時代の打製石鎌は、15cm前後の中型と12～14cm前後の小型であり、これに対して弥生時代の磨製石鎌は20cm前後の大型のものが出現する。大型の磨製石鎌は縄文時代以来の打製石鎌の継承と人陸、特に朝鮮半島からの磨製石鎌の伝播の影響があると考えられている⁹⁾。しかし弥生時代においても打製石鎌は小型と中型で占められている。こうした傾向は打製石器の素材であるサヌカイトを用いて20cm前後の製品を作ることが非常に困難であることと関連している。打製石剣では20cm前後の製品を確認できるが、打製石剣は武器としての機能のほか、いわゆる威信財的な要素をもっていたと考えられており、実用の農具である打製石鎌の大型品を製作する必要はなかったものと考えられる。

第5項 調理具

石皿と磨石、くぼみ石があり、ともに地元で産出する砂岩製である。石皿は硬質の砂岩製で、くぼみ石は軟質の砂岩を使用している。敲き石に分類したもののなかにも軟質の砂岩製のものも含まれ、堅果類用の調理具であった可能性が考えられる。砂岩は遺跡の東側を流れる土器川と西側を流れる金倉川で採集が可能で、石器製作の台石や砥石に用いられている大型の砂岩も同様に川原から採集されたものと考えられる。

第6項 石器製作具

石器製作を示す資料として石核、楔形石器、剥片類、敲き石、台石、砥石が出土している。

<打製石器>

打製石器の石核はサヌカイトが組成のほぼ100%を占め、これにチャートがSD081とSD083で小型の石核が、包含層からチャートの剥片が各1点が出土しているのみである。組成の中で注目されるのは石核と楔形石器、剥片の出土点数である。石核と楔形石器、剥片の石器組成全体に占める割合は82.0%である。石器製作を示す敲き石や線状痕のある台石も出土しており、中の池遺跡で打製石器の製作が行われていたことは間違いない。石核と楔形石器の剥片の剥離状況を観察すると、ほとんどが両極打撃を多用することで不定形な小型の剥片を剥離している。洗谷型剥片剥離技術に相当し¹⁰⁾、剥離された剥片類は小形の打製石器の素材となったと考えられる。また遺跡内で打製石包丁の素材となるような大型の剥片を剥離した痕跡は確認できない。大型の剥片については金山を中心とした遺跡で制作され、板状剥片とセット関係を持ちながら流通し、遺跡内に持ち込まれたと考えられる^{10) 106)}。

石核と楔形石器の素材は板状剥片である。板状剥片の法量はほとんどが10cm前後で、善通寺市龍川五条遺跡や東かがわ市鳴部・川山遺跡で出土しているような20cmを超える大型の板状剥片は出土していない。しかし金山産サヌカイトが非常に折れやすい石材であり、また板状剥片の折れ面に打点をとどめる例が多いことから、大型の板状剥片で搬入された後、遺跡内で分割されたと考えられる。

また板状剥片の体部に広範囲の自然面をとどめる例は稀で、スクレイパーの素材となっている剥片類にも背面全面に自然面をとどめる剥片を素材としたものは確認できず、他の剥片類についても同様の傾向が指摘できる。サヌカイトの原石そのものも出土していない。遺跡内で原石から剥片を剥離すれば自然面を背向全面に残した剥片が相当量出土するはずであるが、そうした剥片の出土は小型の剥片に稀にみられるものの、大型の剥片については確認できなかった。

<磨製石器>

磨製石器の素材となる安山岩や流紋岩、結晶片岩等の剥片は出土しているが、磨製石器の製作を示すほどの数量はなく、磨製石器の破損品と考えられる。先に「石包丁」の項で述べたが、粗製素材の磨製石包丁の本製品が出土していることから、中の池遺跡では剝削段階の磨製石器類からの製作を行っておらず、半製品の研磨を行っていたと考えられる。研削用の砥石は49点・1.1%で砂岩あるいは安山岩、流紋岩製である。石器組成全体に占める割合は少なく、弥生時代中期後半から後期にみられるような高率な組成比は示さない。

第7項 石器組成からみた中の池遺跡の集団理解

<社会>

石鎌の石器組成全体に占める割合は8.8%で、単純に100㎡あたりの絶対量を計算すると1.4個である。森下英治氏

遺跡名	時期	調査面積 (m ²)	対象	石鏡数	単位保有量 (個/100m ²)	環濠	立地
永井	縄文後期～晩期	27,000	調査面積	134	0.5	×	低地
林・坊城	突帯文	約4,000	B地区	12	0.3	×	低地
下川津	前期前半	約24,000	第1・第2微高地	37	0.2	×	低地
龍川五条	前期中葉	約15,000	I～IV区・前池	214	1.4	○	低地
中の池	前期後半	4,500	調査面積	63	1.4	○	低地
五条	前期後半	500	調査面積	23	4.6	○	低地
鴨部・川田	前期後半	5,000	調査面積	146	2.9	○	低地
川津一ノ又	中期前半	12,220	調査面積	285	2.3	×	低地
浴長池	中期前半	14,920	調査面積	22	0.1	×	低地
平岡	中期前半	11,000	調査面積	77	0.7	×	丘陵上
矢ノ塚	中期後半	11,800	調査面積	230	1.9	×	傾斜地
紫雲出山	中期後半	約1,000	面積は276m ²	284	28.4	×	山頂
烏帽子山	中期後半	200	調査面積	23	11.5	×	山頂
久米池南	中期後半	10,000	調査面積	66	0.7	×	丘陵上
北原	後期初頭	600	調査面積	3	0.5	×	丘陵上
太田下須川	後期初頭	25,000	調査面積	14	0.1	×	低地
上天神	後期初頭	24,800	調査面積	29	0.1	×	低地

Tab.13 石鏡出土量の比較(森下 1998を一部改変)

の統計を用いると¹⁰⁾、高地性集落と呼ばれる遺跡の絶対量とは20倍以上の差があることがわかる(Tab.13)。同じ水系で平地に立地する普通寺市龍川五条遺跡と比較すると石鏡の絶対量はほぼ類似するが、大型の石鏡が一定量含まれる点で異なる傾向を示している。中の池遺跡の集団は大型石鏡の保有数の割合から他集団と一定の緊張関係は存在したと考えられるが、石鏡の保有数全体から考えると、長期的かつ大規模な戦闘状態を想定することはできない。こうした線相から中の池遺跡の多量環濠の意義を防御という視点のみでは考えにくく、遺跡内の土地の乾燥化と湧水の利用という実利的な機能と、区画の明示という象徴的機能を考える必要があるといえる。

地元で産出される石材以外の磨製石器については製品で搬入されたと考えられる。これらの中には第8次調査で出土した九州産の石材である層灰岩を用いた磨製石剣もあり、中の池遺跡の集団が広域な交流を持っていたことがうかがえる。また結晶片岩製の磨製石器類はこれまでは阿讃山脈を越えた徳島県の吉野川流域との関係がクローズアップされて考えられてきたが、結晶片岩は愛媛県の中央構造線以南でも産出する石材である。中の池遺跡においては石鏡のような西部瀬戸内地域から北部九州にかけて分布の中心がある石器も出土していることから、西部瀬戸内地域からの搬入ルートをより重要視する必要があるといえる。

<生業>

石斧類は伐採斧の割合が加工斧よりも低く、こうした組成比の差は遺跡周辺の環境によるものと考えられる。花粉分析の結果から遺跡周辺の環境は、周囲は樹木花粉よりも草木花粉の占める割合が高く、周辺は二次林のコナラ属アカガシ連属、コナラ属コナラ重属といった広葉樹が分布していたことが確認されている。このことは遺跡周辺にはすでに森林が残っておらず、また遺跡の背後に山地がないことから、広範囲の森林を中の池遺跡の集団は有していなかったと想定できる。伐採斧と加工斧の石器組成の一割合にも満たない保有率からみても木製品の集約的な伐採・加工を想定できず、中の池遺跡の集団は遺跡内で必要な木材の伐採、木製品の加工のみを行っていたと考えられる。

また他の弥生時代前期の遺跡の組成に一定量確認できる打製石斧の出土がない。これまで打製石斧と石鏡は畑作と関連付けて考えられてきたが^{10) 11)}、中の池遺跡においては石鏡は出土しているが打製石斧が出土しておらず、両者が同じ目的で使用されたものではないことが指摘できる。さらに中の池遺跡は低湿地に位置し、畑作に適した乾燥した耕地はなく、背後に丘陵地や山地を持たない。また花粉分析の結果ではムギ・アワ・ヒエといった畑作の

可能性を示す花粉は確認されていない。以上のことから中の池遺では畑作を行っておらず、石鎌については稲作に利用されたと考えられる。

よって中の池遺跡の生産は組成の約12%を占める磨製・打製石包丁を用いた水田稲作が主体を占め、それに狩猟採集と打穴石錘や十鏝、軽石を利用した漁業が組み合わさっていたと想定できる。

<石器生産>

中の池遺跡の石器組成の特徴は、大陸系磨製石器の器種が磨製石鎌を除きすべて揃うことである。香川県下の遺跡では大陸系磨製石器は前期前半においては一部を受容するだけで、すべての器種が揃うわけではなく、前期中葉から後半にかけて器種が揃う傾向にある。中の池遺跡の石器組成はこうした前期中葉から後半にかけての香川県下の様相とよく符合している。また香川県下では中期以降は磨製石包丁が姿を消し、打製石包丁が急速に普及することが指摘されているが¹⁰⁶、中の池遺跡の打製石包丁の割合が磨製の割合よりもやや多く、弥生時代前期から中期への過渡期的な様相を帯びているといえる。また他の拠点集落では前期中葉から磨製石器の生産を遺跡内で行っているが、中の池遺跡では一定量の磨製石器類の出土がみられるにもかかわらず、磨製石器生産を遺跡内で行っていた痕跡はみられない。磨製石器類は他の遺跡から半製品あるいは製品で搬入されたと考えられる。

磨製石器とは反対に打製石器の生産を行っていたことは多量に出土しているササカイトの石核や剥片から確認できる。しかし石核や剥片に広範囲の自然面を確認することはできないことから、小礫にいたるまで遺跡内に原石の搬入はなく、板状剥片の状態で搬入されたと考えられる。金山まで日帰りで行業を行うことができる距離圏に位置する中の池遺跡に小礫を含めて原石がまったく持ち込まれないという現象は、中の池遺跡の集団が完全に板状剥片のみを金山から持ち帰ったか、あるいは板状剥片の搬入そのものが供給ラインに乗ってもたらされていたものと想定できる。金山産ササカイトは縄文時代後期から弥生時代中期にかけて板状剥片の状態で瀬戸内を中心として山陰や畿内においても出土している。縄文時代後期では金山産ササカイトは板状剥片のほか原石を併せて出土しており¹⁰⁷、各遺跡から直接金山に石材獲得に赴いていたと考えられる。ところが弥生時代前期中葉から中期初葉の中の池遺跡では、金山近郊に位置しているにもかかわらず原石の出土がなく、板状剥片のみの出土を確認することができた。こうした石材獲得の変化から、弥生時代では金山を取り巻く環境が縄文時代の入会地的な様相から変化した可能性が想定できる。この可能性については他の時期や遺跡を含めた剥片類のより詳細な検討が必要であり、今回は可能性のみを指摘し今後別の論文にまとめた。

第8項 おわりに

今回の調査出土の石器を通じて、中の池遺跡の集団の様相が明らかになりつつあるが、今後の調査の石器資料を通じて、中の池遺跡の廃絶の周回も考えていく必要があるといえる。香川県下では弥生時代前期の集落遺跡が中期に廃絶することが知られているが、こうした前期から中期への社会構造の変化をたどるうえで、中の池遺跡の環濠に大量に廃棄された完形の石器類は、集団のその後の動きを考える上で重要な資料になりうると考えられる。

また石器生産と石材の流通については、板状剥片と磨製石器の生産、搬入、流通システムについて広範囲の遺跡を含めたより詳細な検討が必要といえる。今回はその可能性の提示のみに終わったが、今後の課題として改めて考察にまとめた。

引用・参考文献

- (1) 西井謙一 1989 「初期農耕開始活動の跡形」『文化財学報』7 奈良大学文学部文化財学科
- (2) 第8次調査の報告書では、シルト岩盤と報告したが、その後の検討で九州で産出する磨製石製の可能性が考えられた。
- (3) 松本武彦 1989 「弥生時代の石製武器の発達と地域性 一管に打製石鎌について」『考古学研究』35-4
- (4) 藤好史郎・西村寿人 編 1990 『瀬戸大橋建設に伴う縄文文化財発掘調査報告書Ⅵ 下川津遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県縄文文化財センター・本州四国連絡橋公団
- (5) 森本 新 1985 「石小刀」『弥生文化の研究』4 藤山園
- (6) 井井 啓 1991 「石小刀」『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社
- (7) 松尾幸子 1984 「弥生時代の磨製石鎌について」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』山口大学文学部考古学研究室

- (8) 竹広文明 1988 「中四地方縄文時代の剥片石器—その組成・剥片剥離技術」『考古学研究』35-1
- (9) 森下英治 2002 「石器の生産と流通—四国の弥生石器の概観と金山がサマカイト」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』第16回古代学協会四国支部研究大会研究発表要旨集
- (10) 井上勝之 1980 「サマカイト製石器の製作法—金山東麓のサマカイト集積地とその遺物—」『香川県自然科学館研究報告』2 香川県自然科学館
- (11) 森下英治 1998 「石器の特徴と組成について」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29冊 龍川五条遺跡①・瓶野東分山崎南遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- (12) 平井 勝 1991 「石鏡」『弥生時代の石器』ニューサイエンス社
- (13) 甲元真之 1981 「磨製石鏡についての二つの問題」『続藤本郷遺跡発掘調査報告書第1集』下関市教育委員会
- (14) 森下英治 2002 「石器の生産と流通—四国の弥生石器の概観と金山サマカイト」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』第16回古代学協会四国支部研究大会研究発表要旨集
- (15) 谷若倫朗 2003 「金山サマカイトの海上移動」『道具の生産流通と地域関係の形成』古代学協会中国四国支部合同大会
- 下條信行 2002 「瀬戸内における石包丁の形式展開と文化交流」『因国とその周辺の研究』大淵徹夫先生古事記念論文集刊行会
- 菅原太郎 1992 「弥生時代の石器生産と流通—讃岐平野における一様相と近畿地域との関連性—」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV
- 高田浩司 2001 「古備における弥生時代中期の石器生産と流通」『古代古備』23
- 竹広文明 2003 「サマカイトと先史社会」淡水社
- 福里方紀 2000 「北四国における弥生文化の成立—讃岐地方を中心として—」『弥生文化の成立—各地域における弥生文化成立期の具体像—』黒塚文化財研究会
- 2002 「讃岐地域における弥生時代前期末から中期前半の様相」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』第16回古代学協会四国支部研究大会研究発表要旨集
- 藤田 等 1964 「大陸系石器—特に磨製石鏡について—」『日本考古学の諸問題』河出書房新社
- 松本武彦 2002 「讃岐平野における打製石鏡の長期的変化」『四国とその周辺の研究』大淵徹夫先生古事記念論文集刊行会
- 水島俊夫 1985 「石鏡」『弥生文化の研究』4
- 森下英治 1995 「瀬戸内の大陸系磨製石器」『考古学ジャーナル』391
- 森本 晋 1986 「石鏡」『弥生文化の研究』9
- 1991 「ごみの捨て方—石器製作と廃棄—弥生時代河内の事例—」『考古学研究』38-3

Tab.14 石器報告遺物一覧表 (1)

原産地 遺物 番号	遺物 番号	出土層位	種類名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考		
41	57	SD002	黒色粘土	石鏝	2.3	1.5	0.3	0.8	サヌカイ	凹基式	
41	58	SD002	黒色粘土	石鏝	4.3	7.2	1.0	27.1	サヌカイ		
41	59	SD002	黒色粘土	スクレイパー	3.0	5.3	0.8	8.8	サヌカイ		
41	60	SD002	黒色粘土	磨製石包丁	(8.2)	(4.2)	(0.5)	(18.8)	安山岩または流紋岩		
41	61	SD002	黒色粘土	石鏝	5.6	3.3	1.1	40.0	流紋岩		
41	62	SD002	黒色粘土	石鏝	8.4	6.7	4.2	214.0	サヌカイ		
42	63	SD002	黒褐色細砂	磨製石包丁	(6.9)	4.6	(0.7)	(32.6)	安山岩		
42	64	SD002	黒褐色細砂	柱状片刃石鏝	(3.6)	(3.3)	(1.4)	(38.8)	磨石片岩		
42	65	SD002	黒褐色細砂	打製石包丁	(4.6)	4.5	(1.8)	(25.5)	サヌカイ		
42	66	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	5.8	(4.8)	(1.8)	(38.7)	サヌカイ		
42	67	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	3.5	4.2	1.2	13.5	サヌカイ		
42	68	SD002	黒褐色細砂	楔形石鏝	3.6	7.7	1.2	25.2	サヌカイ		
42	69	SD002	黒褐色細砂	楔形石鏝	7.0	4.7	2.0	54.4	サヌカイ		
43	70	SD002	黒褐色細砂	磨製石包丁	(8.5)	7.4	5.2	(473.0)	安山岩		
43	71	SD002	黒褐色細砂	石鏝	34.8	(27.5)	10.1	(14920.0)	安山岩		
44	72	SD002	黒褐色細砂	磨製石包丁	(6.0)	5.4	0.7	(32.0)	安山岩		
44	73	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	2.6	4.9	1.0	8.2	サヌカイ		
44	74	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	4.7	6.8	1.1	24.8	サヌカイ		
44	75	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	(3.5)	(4.0)	(1.3)	(18.5)	サヌカイ		
44	76	SD002	黒褐色細砂	スクレイパー	4.6	8.3	1.8	51.5	サヌカイ		
44	77	SD002	黒褐色細砂	石鏝	11.6	17.1	3.9	845.0	サヌカイ		
45	78	SD002	暗灰色粘土	スクレイパー	(4.3)	4.7	0.7	(14.7)	サヌカイ		
45	79	SD002	暗灰色粘土	スクレイパー	5.1	8.2	0.9	33.9	サヌカイ		
45	80	SD002	暗灰色粘土	石鏝	(3.5)	2.7	0.8	(4.8)	サヌカイ		
45	81	SD002	暗灰色粘土	スクレイパー	3.5	7.2	0.8	20.5	サヌカイ		
45	82	SD002	暗灰色粘土	石鏝	5.7	5.6	4.0	49.9	サヌカイ		
52	97	SD059	黄褐色砂質土	石小刀	(5.7)	2.2	0.5	7.0	サヌカイ	凹基式	
52	98	SD059	黄褐色砂質土	打製石包丁	(4.8)	4.9	(1.2)	(31.6)	サヌカイ		
52	99	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	(3.7)	(5.3)	0.7	(5.6)	サヌカイ		
52	100	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	(3.2)	(5.4)	(0.7)	(11.7)	サヌカイ		
52	101	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	3.8	3.7	1.1	27.6	サヌカイ		
52	102	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	5.9	7.4	1.5	82.0	サヌカイ		
52	103	SD059	黄褐色砂質土	スクレイパー	4.8	(7.1)	1.5	(43.7)	サヌカイ		
53	104	SD059	黄褐色粘質土	石鏝	1.9	1.3	0.3	0.8	サヌカイ		
53	105	SD059	黄褐色粘質土	スクレイパー	4.9	7.2	1.3	45.4	サヌカイ		
53	106	SD059	黄褐色粘質土	石鏝	3.3	6.5	0.9	21.9	サヌカイ		
53	107	SD059	黄褐色粘質土	石鏝	6.1	3.6	1.2	32.2	サヌカイ		
53	108	SD059	黄褐色粘質土	石鏝	20.8	12.3	4.7	1840.0	砂岩		
54	109	SD059	暗灰色砂質土	スクレイパー	(4.1)	(5.2)	(1.0)	(22.9)	サヌカイ		
54	110	SD059	暗灰色砂質土	スクレイパー	3.8	(7.7)	1.2	(28.5)	サヌカイ		
54	111	SD059	暗灰色砂質土	石鏝	4.1	6.7	1.2	28.2	サヌカイ		
54	112	SD059	暗灰色砂質土	石鏝	3.8	7.1	1.8	45.7	サヌカイ		
54	113	SD059	暗灰色砂質土	磨製石鏝	(0.3)	4.9	(2.8)	(240.8)	流紋岩		
54	114	SD059	暗灰色砂質土	磨製石包丁	(9.7)	(11.7)	6.0	(994.0)	砂岩		
54	115	SD059	暗灰色砂質土	石鏝	22.3	13.3	4.1	1540.0	砂岩		
55	116	SD059	暗灰色粘土	スクレイパー	5.2	(6.5)	1.3	(35.8)	サヌカイ		
55	117	SD059	暗灰色粘土	スクレイパー	4.9	(7.5)	1.0	(37.0)	サヌカイ		
55	118	SD059	暗灰色粘土	打製石包丁	11.7	5.9	1.1	78.5	サヌカイ		
55	119	SD059	暗灰色粘土	磨製石鏝	8.6	8.4	1.7	90.0	サヌカイ		
56	120	SD059	暗灰色粘土	磨製石鏝	8.0	4.7	4.3	181.8	砂岩		
56	121	SD059	暗灰色粘土	磨製石包丁	(10.3)	5.8	4.4	(392.0)	砂岩		
57	122	SD059	暗灰色粘質土	石鏝	5.8	7.8	1.3	49.0	サヌカイ		
57	123	SD059	暗灰色粘質土	スクレイパー	4.0	6.9	1.1	28.6	サヌカイ		
57	124	SD059	暗灰色粘質土	スクレイパー	4.7	6.9	1.2	43.9	サヌカイ		
57	125	SD059	暗灰色粘質土	スクレイパー	5.2	7.1	1.8	49.0	サヌカイ		
57	126	SD059	暗灰色粘質土	くぼみ石	(9.8)	9.1	4.4	(540.0)	砂岩		
58	127	SD059	黒色粘土	石鏝	2.8	2.5	0.3	1.9	サヌカイ	凹基式	
58	128	SD059	黒色粘土	磨製石鏝	8.0	4.9	1.9	72.7	サヌカイ		
58	129	SD059	黒色粘土	磨製石鏝	11.5	7.3	2.3	193.6	サヌカイ		
59	130	SD069	暗灰色地山ブロック土	スクレイパー	(4.2)	(5.7)	0.9	(18.8)	サヌカイ		
59	131	SD059	暗灰色地山ブロック土	スクレイパー	4.9	(6.1)	1.4	(38.1)	サヌカイ		
59	132	SD059	暗灰色地山ブロック土	スクレイパー	5.2	6.5	1.1	35.9	サヌカイ		
72	176	SD081	暗褐色粘質土	石鏝	3.3	(2.1)	0.6	(2.8)	サヌカイ		凹基式
72	176	SD081	暗褐色粘質土	石鏝未製品	3.3	2.3	0.6	8.1	サヌカイ		
72	177	SD081	暗褐色粘質土	石鏝未製品	(2.6)	1.0	0.5	(1.6)	サヌカイ		
72	176	SD081	暗褐色粘質土	石鏝	3.1	1.1	0.5	1.8	サヌカイ		
72	178	SD081	暗褐色粘質土	石鏝未製品	3.6	6.6	8.5	20.9	サヌカイ		
72	180	SD081	暗褐色粘質土	磨製石包丁未製品	(7.7)	5.6	1.5	(91.0)	サヌカイ		
72	181	SD081	暗褐色粘質土	二次加工ある側片	6.6	6.7	1.1	59.8	サヌカイ		
72	182	SD081	暗褐色粘質土	二次加工ある側片	5.6	1.5	1.1	11.5	安山岩		
73	183	SD081	灰褐色細砂	スクレイパー	5.0	(7.3)	0.8	(28.3)	サヌカイ		
73	184	SD081	灰褐色細砂	磨製石鏝	6.0	7.9	1.8	92.2	サヌカイ		
74	185	SD081	明黄褐色粘土	石鏝	1.7	1.9	0.4	(0.8)	サヌカイ	凹基式	
74	186	SD081	明黄褐色粘土	石鏝	3.0	(1.8)	0.5	(1.6)	サヌカイ		
74	187	SD081	明黄褐色粘土	石鏝未製品	2.6	2.2	0.7	4.1	サヌカイ		
74	188	SD081	明黄褐色粘土	石鏝未製品	3.5	2.0	0.4	2.0	サヌカイ		
74	189	SD081	明黄褐色粘土	石鏝未製品	3.9	2.4	0.7	4.4	サヌカイ		
74	190	SD081	明黄褐色粘土	石鏝	(4.7)	1.4	0.7	(3.4)	サヌカイ		
74	191	SD081	明黄褐色粘土	打製石包丁	7.8	4.7	1.0	44.8	サヌカイ		
74	192	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.9	(3.6)	0.8	(3.3)	サヌカイ		
74	193	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.2	5.0	1.0	16.5	サヌカイ		
74	194	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.7	(4.4)	1.3	(22.6)	サヌカイ		
74	195	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	4.6	7.2	0.8	23.0	サヌカイ		
74	196	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	3.9	(4.9)	0.7	(14.8)	サヌカイ		
75	197	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	5.5	6.4	0.8	32.5	サヌカイ		
75	198	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	5.6	(7.8)	1.3	(49.4)	サヌカイ		
75	199	SD081	明黄褐色粘土	スクレイパー	(4.4)	8.2	1.1	(38.1)	サヌカイ		

Tab.15 石器報告遺物一覧表 (2)

図録 番号	遺物 番号	遺種	出土層位	器種名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
75	200	SD081	明貴褐色粘土	スクレイパー	(4.7)	(8.5)	1.3	(45.3)	ヤサカ石	
76	201	SD081	明貴褐色粘土	スクレイパー	0.6	8.3	1.7	81.6	ヤサカ石	
76	202	SD081	明貴褐色粘土	ノコ	4.7	3.9	1.2	8.1	ヤサカ石	
76	203	SD081	明貴褐色粘土	楔形石鏝	4.4	(7.4)	1.2	(56.3)	ヤサカ石	
76	204	SD081	明貴褐色粘土	楔形石鏝	6.3	3.9	1.1	28.3	ヤサカ石	
76	205	SD081	明貴褐色粘土	石核	3.9	5.8	1.4	31.2	ヤサカ石	
76	206	SD081	明貴褐色粘土	石核	0.3	8.4	2.8	128.7	ヤサカ石	
76	207	SD081	明貴褐色粘土	石核	7.8	5.5	2.2	81.4	ヤサカ石	
76	208	SD081	明貴褐色粘土	石核	7.1	10.9	1.7	176.5	ヤサカ石	
77	209	SD081	明貴褐色粘土	磨製石包丁	(8.1)	4.8	0.8	(32.5)	花崗岩	長方形
77	210	SD081	明貴褐色粘土	扁平片刃石斧	7.7	(1.3)	(1.2)	(21.0)	結晶片岩	
77	211	SD081	明貴褐色粘土	不明石製品	(13.8)	3.5	1.5	(94.9)	点紋黒色片岩	
77	212	SD081	明貴褐色粘土	磁石	(8.4)	(5.7)	4.0	(322.0)	安山岩	
77	213	SD081	明貴褐色粘土	くぼみ石	10.7	8.0	2.4	241.0	砂岩	
77	214	SD081	明貴褐色粘土	磁石	17.4	4.7	4.8	515.0	砂岩	
77	215	SD081	明貴褐色粘土	磁石	(17.3)	(10.1)	(7.2)	(1640.0)	安山岩	
78	218	SD081	暗灰色粘土	石鏝	(1.7)	1.8	0.4	(0.7)	ヤサカ石	平基式、刃部直線状
78	217	SD081	暗灰色粘土	石鏝	(2.2)	(1.8)	0.5	(1.2)	ヤサカ石	平基式
78	218	SD081	暗灰色粘土	石鏝	2.8	1.8	0.4	1.8	ヤサカ石	平基式
78	219	SD081	暗灰色粘土	石鏝	(3.2)	(1.4)	0.8	(1.9)	ヤサカ石	有基式
78	220	SD081	暗灰色粘土	石鏝未製品	4.2	2.8	0.8	7.1	ヤサカ石	
78	221	SD081	暗灰色粘土	石鏝未製品	5.8	3.8	0.5	11.3	ヤサカ石	
78	222	SD081	暗灰色粘土	スクレイパー	3.4	8.5	1.2	21.7	ヤサカ石	
78	223	SD081	暗灰色粘土	打製石包丁	(7.8)	8.7	1.1	(58.8)	ヤサカ石	
78	224	SD081	暗灰色粘土	打製石包丁	10.8	4.8	1.2	85.1	ヤサカ石	頭、先沢面あり
78	225	SD081	暗灰色粘土	楔形石鏝	8.5	10.8	4.2	153.8	ヤサカ石	
78	226	SD081	暗灰色粘土	石核	4.0	4.6	2.8	82.7	ヤサカ石	
78	227	SD081	暗灰色粘土	石鏝	14.7	15.5	2.8	(1150.0)	砂岩	
99	201	SD083	暗褐色地質土	石鏝	1.4	1.4	0.3	0.3	ヤサカ石	平基式
99	202	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(1.5)	(1.5)	0.3	(0.4)	ヤサカ石	凹基式
99	203	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(1.5)	(1.3)	(0.3)	(0.6)	ヤサカ石	凹基式
99	204	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(1.8)	1.7	0.3	(0.5)	ヤサカ石	凹基式
99	205	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(1.8)	1.5	0.3	(0.8)	ヤサカ石	平基式
99	206	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(1.8)	1.5	0.3	(0.7)	ヤサカ石	平基式
99	207	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(1.8)	1.7	0.2	(0.7)	ヤサカ石	平基式
99	208	SD083	暗褐色地質土	石鏝	1.8	1.5	0.4	0.8	ヤサカ石	凹基式
99	209	SD083	暗褐色地質土	石鏝	2.1	1.7	0.2	0.6	ヤサカ石	凹基式
99	210	SD083	暗褐色地質土	石鏝	2.3	1.5	0.5	0.7	ヤサカ石	凹基式、刃部直線状
99	211	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(2.1)	(1.5)	0.3	(0.8)	ヤサカ石	凹基式
99	212	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(2.7)	(1.8)	0.5	(1.5)	ヤサカ石	凹基式
99	213	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(2.4)	(1.8)	0.7	(2.0)	ヤサカ石	凹基式
99	214	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(3.8)	2.2	0.4	(1.5)	ヤサカ石	凹基式
99	215	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(3.1)	2.3	0.4	(1.8)	ヤサカ石	凹基式、刃部直線状
99	216	SD083	暗褐色地質土	石鏝	3.2	1.9	0.5	1.8	ヤサカ石	凹基式、五角形頭
99	217	SD083	暗褐色地質土	石鏝	3.2	2.0	0.4	1.5	ヤサカ石	凹基式、刃部直線状
99	218	SD083	暗褐色地質土	石鏝	2.8	1.5	0.6	2.3	ヤサカ石	凸基式
99	219	SD083	暗褐色地質土	石鏝	2.8	1.2	0.4	1.0	ヤサカ石	凸基式
99	220	SD083	暗褐色地質土	石鏝	3.2	1.3	0.5	1.7	ヤサカ石	凸基式、刃部直線状
99	221	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(3.7)	1.2	0.6	(2.0)	ヤサカ石	凸基式
99	222	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(3.7)	1.2	0.7	(2.6)	ヤサカ石	凸基式
100	223	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	2.5	2.1	0.4	1.3	ヤサカ石	
100	224	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	2.5	1.9	0.4	1.4	ヤサカ石	
100	225	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	2.0	2.1	0.4	2.7	ヤサカ石	
100	226	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	2.3	2.0	0.5	1.5	ヤサカ石	
100	227	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	2.8	2.8	0.8	3.0	ヤサカ石	
100	228	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	2.8	1.7	0.5	1.9	ヤサカ石	
100	229	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.2	2.5	0.7	4.9	ヤサカ石	
100	230	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.5	2.5	0.5	3.7	ヤサカ石	
100	231	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.2	1.1	0.4	1.3	ヤサカ石	刃部直線状
100	232	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.3	1.8	0.5	1.8	ヤサカ石	石鏝か？
101	233	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(2.4)	1.0	0.7	(1.4)	ヤサカ石	
101	234	SD083	暗褐色地質土	石鏝	3.2	1.5	0.8	2.3	ヤサカ石	
101	235	SD083	暗褐色地質土	石鏝	3.5	1.3	0.7	1.4	ヤサカ石	
101	236	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(3.6)	1.7	0.5	(2.4)	ヤサカ石	
101	237	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(4.1)	1.7	0.6	(3.0)	ヤサカ石	
101	238	SD083	暗褐色地質土	石鏝	4.5	1.8	0.9	4.8	ヤサカ石	
101	239	SD083	暗褐色地質土	石鏝	(5.2)	1.2	0.8	(4.5)	ヤサカ石	石鏝か？
101	240	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	(3.6)	2.3	0.8	(4.3)	ヤサカ石	
101	241	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.5	2.1	0.9	6.0	ヤサカ石	
101	242	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.7	1.2	1.5	4.7	ヤサカ石	
101	243	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	4.0	1.5	0.8	5.0	ヤサカ石	
101	244	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	3.5	1.3	0.8	3.2	ヤサカ石	
101	245	SD083	暗褐色地質土	石鏝未製品	5.5	2.5	0.9	8.7	ヤサカ石	
102	246	SD083	暗褐色地質土	石鏝	4.4	5.4	0.5	9.8	ヤサカ石	
102	247	SD083	暗褐色地質土	スクレイパー	6.4	4.0	1.0	23.1	ヤサカ石	
102	248	SD083	暗褐色地質土	スクレイパー	2.9	8.8	0.9	20.9	ヤサカ石	
102	249	SD083	暗褐色地質土	スクレイパー	8.8	10.5	1.3	55.5	ヤサカ石	
102	250	SD083	暗褐色地質土	スクレイパー	5.7	8.4	2.3	102.7	ヤサカ石	
103	251	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	12.1	4.5	1.1	58.3	ヤサカ石	頭端、先沢面あり
103	252	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	10.0	4.7	1.2	61.8	ヤサカ石	頭端、先沢面あり
103	253	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	(9.7)	4.8	1.1	(54.2)	ヤサカ石	先沢面あり
103	254	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	(7.2)	4.5	1.5	(28.0)	ヤサカ石	
103	255	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	11.3	4.5	1.5	73.5	ヤサカ石	
104	256	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	8.8	4.9	1.4	53.8	ヤサカ石	頭端、
104	257	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	10.0	5.0	1.1	59.0	ヤサカ石	頭端、
104	258	SD083	暗褐色地質土	打製石包丁	(8.5)	5.3	1.1	(67.8)	ヤサカ石	先沢面あり
104	259	SD083	暗褐色地質土	楔形石鏝	5.9	(17.1)	2.8	(356.0)	ヤサカ石	

Tab.16 石器報告遺物一覧表 (3)

図版番号	遺物番号	遺層	出土層位	器種名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
105	280	SD083	暗褐色粘質土	楕円片	14.8	10.4	1.7	319.5	ササカハト	
105	281	SD083	暗褐色粘質土	楕円石包丁	10.3	13.1	2.9	348.2	ササカハト	
106	262	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁	6.07	(5.77)	0.7	51.1	流紋岩	外周刃半月形
106	263	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁	8.11	(5.5)	0.9	44.7	結晶片岩	
106	264	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁木製品	11.3	4.7	1.2	64.8	流紋岩	打製石包丁か?
106	265	SD083	暗褐色粘質土	扁平片刃石斧	(5.1)	(4.0)	1.1	(27.6)	結晶片岩	
106	266	SD083	暗褐色粘質土	磨製石鏃	19.2	4.2	1.3	(148.9)	結晶片岩	
106	267	SD083	暗褐色粘質土	大型片刃石斧	(12.3)	6.9	4.7	(666.0)	ヒンゴ	
106	268	SD083	暗褐色粘質土	磨製石包丁	(8.5)	6.6	(2.2)	(128.5)	結晶片岩	
107	269	SD083	暗褐色粘質土	鋭き石	9.2	5.4	3.6	224.0	砂岩	
107	270	SD083	暗褐色粘質土	くぼみ石	8.5	6.4	4.7	255.5	砂岩	
107	271	SD083	暗褐色粘質土	砥石	(13.6)	(9.8)	(4.5)	(813.0)	砂岩	
107	272	SD083	暗褐色粘質土	砥石兼鋭き石	9.8	9.5	5.3	590.0	砂岩	
107	273	SD083	暗褐色粘質土	鋭石	11.8	(4)	3.6	(88.7)	砂岩	
107	274	SD083	暗褐色粘質土	打石	31.5	19.0	9.5	7095.0	砂岩	
108	276	SD083	黒褐色粘土	スクレイパー	(5.0)	3.3	0.8	(14.2)	ササカハト	
108	278	SD083	黒褐色粘土	磨製石包丁木製品	11.1	8.7	1.4	112.2	流紋岩	
108	277	SD083	黒褐色粘土	石鏃	10.5	11.7	3.4	444.0	ササカハト	
108	278	SD083	黒褐色粘土	スクレイパー	9.3	(14.6)	2.0	(243.5)	ササカハト	
109	279	SD083	黒褐色粘質土	磨製石包丁	(8.7)	4.7	8.5	(44.9)	結晶片岩	長方形
109	280	SD083	暗褐色砂質土	スクレイパー	4.4	6.9	1.2	24.8	ササカハト	
109	281	SD083	暗褐色砂質土	スクレイパー	4.5	12.5	1.8	77.8	ササカハト	
109	282	SD083	暗褐色砂質土	二次加工ある副片	9.8	15.3	1.1	175.4	ササカハト	
109	283	SD083	暗褐色砂質土	柱状片刃石斧	(13.2)	3.2	1.6	(141.0)	結晶片岩	
109	284	SD083	暗褐色砂質土	柱状片刃石斧	13.5	3.2	2.4	182.2	流紋岩	
110	285	SD083	暗褐色砂質土	扁平片刃石斧	11.0	5.2	1.7	(109.5)	結晶片岩	
111	286	SD083	褐色粘土	石鏃	2.4	1.9	0.8	2.1	ササカハト	平凸式
111	287	SD083	褐色粘土	スクレイパー	8.9	9.8	1.7	(98.8)	ササカハト	
111	288	SD083	褐色粘土	打製石鏃	(12.3)	5.5	1.7	(120.5)	ササカハト	先沢面あり
111	289	SD083	褐色粘土	磨製石斧	11.4	(6.2)	(3.0)	(287.5)	結晶片岩	
111	290	SD083	褐色粘土	石鏃	5.7	5.5	0.7	44.4	結晶片岩	
112	291	SD083	褐色粘質土	扁平片刃石斧	(11.8)	3.5	1.4	(108.6)	結晶片岩	
112	292	SD083	褐色粘質土	磨製石包丁	8.4	4.8	0.8	(24.0)	火山岩	
112	293	SD083	褐色粘質土	石鏃	3.4	2.4	0.5	2.4	ササカハト	
112	294	SD083	褐色粘質土	スクレイパー	8.3	5.5	1.1	34.8	ササカハト	
112	295	SD083	褐色粘質土	小型円柱状石斧	(10.7)	1.5	1.4	(21.8)	火山岩	
112	296	SD083	褐色粘質土	スクレイパー	4.2	7.6	1.2	28.5	ササカハト	
113	297	SD083	出土層位不明	磨製石包丁	(5.0)	4.4	0.8	(24.4)	流紋岩	長方形
119	55	SD134	黒色粘土	石鏃	(1.4)	1.4	0.5	(0.7)	ササカハト	平凸式
119	56	SD134	黒色粘土	石鏃	(2.1)	1.5	0.4	(0.9)	ササカハト	凹面式
119	57	SD134	黒色粘土	石鏃兼磨製	2.9	2.5	0.8	3.8	ササカハト	凸凹式
119	58	SD134	黒色粘土	磨製石包丁	(11.4)	5.5	0.8	(64.0)	流紋岩	杏仁形
119	59	SD134	黒色粘土	打製石包丁	(6.0)	5.4	(8.9)	(27.8)	ササカハト	
119	60	SD134	褐色粘質土	鋭き石	6.7	6.9	5.2	316.0	砂岩	
119	61	SD134	褐色粘質土	砥石	(9.4)	(8.1)	4.2	(430.0)	流紋岩または火山岩	
120	62	SD134	褐色粘質土	磨製石包丁	(2.8)	4.3	(0.7)	(13.1)	結晶片岩	
120	63	SD134	褐色粘質土	スクレイパー	5.2	6.5	1.2	38.7	ササカハト	ローリングを受けている
120	64	SD134	褐色粘質土	磨製石包丁	(4.9)	4.5	0.8	(24.7)	火山岩	凹面あり
127	102	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(1.9)	1.5	0.3	(0.8)	ササカハト	凹面式
127	103	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(1.7)	1.4	0.3	(0.8)	ササカハト	平凸式
127	104	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	2.3	1.7	0.3	1.9	ササカハト	平凸式
127	105	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	2.5	(1.8)	0.5	(1.0)	ササカハト	平凸式
127	106	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(2.8)	1.8	0.5	(1.1)	ササカハト	凹面式
127	107	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	2.8	1.2	0.3	0.8	ササカハト	平凸式
127	108	SD167	黒褐色粘質土	石鏃兼磨製	3.4	2.7	0.7	5.0	ササカハト	
127	109	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(4.4)	1.4	0.6	(2.1)	ササカハト	凸凹式。刃部磨製状
127	110	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(5.7)	1.8	0.9	(5.1)	ササカハト	凸凹式。石鏃か?
127	111	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(3.4)	1.4	0.8	(3.0)	ササカハト	
127	112	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	(3.9)	2.2	0.8	(3.1)	ササカハト	
127	113	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	4.7	7.0	0.8	22.2	ササカハト	
127	114	SD167	黒褐色粘質土	スクレイパー	(5.0)	7.2	1.2	(31.4)	ササカハト	
128	115	SD167	黒褐色粘質土	磨製石包丁	(6.7)	3.5	(6.8)	(28.2)	結晶片岩	石鏃・石文の軽用品の可能性あり
128	116	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	(8.7)	4.7	1.1	64.4	ササカハト	長方形
128	117	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	(8.7)	4.1	0.9	(33.7)	ササカハト	先沢面あり
128	118	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	(6.8)	4.8	1.2	(46.9)	ササカハト	先沢面あり
128	119	SD167	黒褐色粘質土	打製石包丁	13.7	5.4	1.5	107.0	ササカハト	凹面。先沢面あり
129	120	SD167	黒褐色粘質土	楕円石鏃	10.9	7.7	2.4	241.0	ササカハト	
129	121	SD167	黒褐色粘質土	柱状片刃石斧	(14.4)	(4.8)	(1.4)	(120.5)	結晶片岩	
129	122	SD167	黒褐色粘質土	鋭き石	7.8	6.9	3.8	243.0	砂岩	
129	123	SD167	黒褐色粘質土	石鏃	19.3	24.8	4.3	3010.0	砂岩	
130	124	SD167	褐色粘質土	打石石鏃	5.5	4.8	1.2	31.6	結晶片岩	
142	18	水田城	黒色粘土	石鏃	(1.9)	1.5	0.5	(0.8)	ササカハト	平凸式
142	19	水田城	黒色粘土	楕円石斧	(9.2)	(5.8)	(3.0)	(110.8)	砂岩	
142	20	水田城	褐色粘質土	打製石包丁	12.8	5.2	1.2	68.1	ササカハト	凹面。先沢面あり
142	21	水田城	褐色粘質土	磨製石包丁	(8.5)	4.6	0.8	(58.3)	火山岩	長方形
142	22	水田城	褐色粘質土	砥石	7.1	5.1	5.1	334.0	火山岩	
143	23	水田城	褐色粘質土	打製石包丁	11.7	4.7	1.0	54.8	ササカハト	凹面
148	5T203			石鏃	(2.6)	1.6	0.4	(1.1)	ササカハト	凹面式

Tab.17 中の池遺跡第9次調査遺物一覧表(1)

北区

赤土・赤成土

赤生土層	鉢・甕(逆「L」あり)・壺
須恵器	壺
土師器	甕
白磁	皿
須産陶器	カイル・透性カイル
染付	瓶(彫柄・波文見)
瓦質土器	鉢
石器	割片・スクレイパー・石鏝・チャート製割片・打製石包丁・くぼみ石・磨製石斧
石製品	不明品(板石)
瓦類	灰瓦
その他	焼土

褐色粘質土

赤生土層	壺
土師器	不明品(中世以降)
青磁	皿
須産陶器	皿
染付	瓶
石器	割片・スクレイパー

暗褐色粘質土

赤生土層	壺(逆「L」あり)・壺・鉢
須恵器	杯身
須産陶器	壺・ひょうそく
石器	打製石包丁・割片・石鏝・磨製石・石鏝・スクレイパー・楔形石器・石鏝・磨製石斧
その他	ガラス瓶(滲入)・とりば

S D 002 褐色粘土

赤生土層	壺・甕・甕(内面尖帯あり)
石器	磨製石斧・磨製石包丁・石鏝・楔形石器・スクレイパー・扁平片刃石斧・石鏝・石杖・板状割片・二次加工ある割片・割片・微細割層状のある割片・磨り石・すり石
瓦類	近現代瓦

S D 003 黒褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢・壺(内面尖帯あり)・てづくね
石器	割片・尖型輪刃石斧・楔形石器・スクレイパー・磨製石包丁・石杖・打製石包丁・二次加工ある割片・板状割片・微細割層状のある割片・扁平片刃石斧・磨り石・くぼみ石
土製品	円板

S D 004 褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢・小壺
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石鏝・石杖・割片・板状割片・微細割層状のある割片・磨製石包丁
土製品	円板
その他	炭

S D 005 褐色粘土

赤生土層	壺・甕
石器	スクレイパー・割片・磨製石斧・石杖

S D 002 褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢
石器	楔形石器・スクレイパー・石鏝・石杖・二次加工ある割片・割片・板状割片・微細割層状のある割片
土製品	円板

S D 004 高土層位不明

赤生土層	壺・甕
------	-----

S A 049

赤生土層	割片・壺
------	------

S A 060

赤生土層	割片・壺
------	------

S 058

赤生土層	割片
石器	割片・石鏝・二次加工ある割片

S D 054 黒褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢
須恵器	円蓋
石器	石小刀・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石杖・打製石包丁・磨き石・二次加工ある割片・割片・微細割層状のある割片・磨石

S D 059 黒褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢・ミニチュア壺・高坏・壺(内面尖帯あり)
石器	石鏝・楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石杖・石鏝・二次加工ある割片・割片・磨石

S D 056 褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石杖・柱状片刃石斧・二次加工ある割片・割片・微細割層状のある割片・石皿・磨き石・磨石・石鏝

S D 059 褐色粘土

赤生土層	壺・甕・甕
石器	楔形石器・楔形石器付随物・スクレイパー・石杖・二次加工ある割片・割片・磨製石包丁・磨き石・磨石・くぼみ石

S D 059 褐色粘土

赤生土層	壺・甕・鉢・甕
石器	くぼみ石・石杖・楔形石器付随物・スクレイパー・磨製石斧?・二次加工ある割片・割片
その他	焼土

S D 059 褐色粘土

赤生土層	鉢・甕・壺
石器	楔形石器付随物・石鏝・割片・板状割片・微細割層状のある割片・くぼみ石
土製品	約指輪

S D 059 褐色粘土

赤生土層	壺・甕
石器	楔形石器・スクレイパー・二次加工ある割片・割片・板状割片・磨石

Tab.19 中の池遺跡第9次調査遺物一覧表 (3)

SD085

弥生土器	壺・甕・ミニチュア壺
須恵器	坏
石器	石鏃・スクレイパー・割片

S086

弥生土器	壺
------	---

SX088

弥生土器	割片・甕 (逆「L」あり)・壺
石器	石鏃・割片

S108

弥生土器	割片
------	----

S P 110

弥生土器	割片
------	----

S114

弥生土器	割片
石器	割片

S P 117

弥生土器	壺・甕 (逆「L」あり)
------	--------------

S121

弥生土器	壺
------	---

SD121 黒灰色燧砂

弥生土器	壺・甕
石器	楔形石鏃付随物・石鏃・磨き石・二次加工ある割片・割片
土製品	円板

SD121 暗褐色燧砂

弥生土器	壺・甕・鉢・甕
石器	楔形石鏃付随物・くぼみ石・スクレイパー・石鏃未製品・割片
土製品	円板

SD121 暗褐色燧砂

弥生土器	壺・甕
須恵陶器	磨鉢

S122 (複式)

弥生土器	割片
染付	近世

SD124 黒色粘土

弥生土器	壺・甕・楽堂・鉢・甕
須恵器	坏
石器	石鏃・楔形石鏃・楔形石鏃付随物・スクレイパー・石鏃・石鏃未製品・石鏃・打製石包丁・磨き石・砥石・二次加工ある割片・割片・磨鉢附磨盤のある割片・陶器割片
その他	焼土

SD124 暗褐色燧砂

弥生土器	壺・甕・鉢
石器	くぼみ石・磨き石・砥石・割片

SD124 暗褐色粘質土

弥生土器	壺・甕
------	-----

SD124 黒灰色燧砂

弥生土器	壺・甕・鉢
石器	石鏃・磨製石包丁・くぼみ石・スクレイパー・石鏃・二次加工ある割片・割片
その他	焼土

SD124 暗褐色燧砂質土 (塊山ブロック含む)

弥生土器	壺・甕
石器	磨製石包丁・割片・石鏃

SD124 出土層位不明

弥生土器	壺・甕
須恵陶器	磨鉢磨鉢

S125 (複式)

弥生土器	壺・甕
須恵器	壺
石器	石鏃・割片

S128 (複式)

弥生土器	壺・甕
須恵陶器	鉢・磨鉢磨鉢・磨鉢蓋 (近世)
染付	陶器
石器	石鏃・割片・磨製石包丁
瓦類	平瓦

S127 (近世遺物)

弥生土器	割片・壺
染付	近世
石器	割片

S128 (近世遺物)

弥生土器	割片
須恵陶器	磨鉢
石器	石鏃

S129 (近世以降遺物)

弥生土器	割片・壺
石器	割片

SD141 (表層遺)

弥生土器	割片
須恵陶器	小室洗鉢
染付	陶 (近代)
石器	割片

S142

弥生土器	割片
染付	陶器
瓦類	割片

S147

弥生土器	割片
------	----

S148

弥生土器	割片
------	----

S149

石器	割片
----	----

S150

弥生土器	割片
------	----

Tab.20 中の池遺跡第9次調査遺物一覧表(4)

S151 (埋蓋)	赤生土器 破片	S D167 黄灰色粘土(下層)	赤生土器 壺・壺・ミニチュア壺
石器 割片		石器 模形石器・模形石器付随物	
S152 (埋蓋)	赤生土器 破片	S D167 黄灰色粘土	赤生土器 壺・壺・鉢・高坪・雙蓋
石器 割片		石器 打欠石器・模形石器・模形石器付随物・スクレイパー・石織半製品・二次加工ある割片・割片	
S K151	赤生土器 壺・壺	S D167 黒色粘土	赤生土器 壺・壺・雙蓋・鉢
石器 割片		石器 割片	
S A155	赤生土器 破片	S D167 灰白色地山ブロック土	赤生土器 破片・壺
S157 (埋蓋)	赤生土器 破片	石器 スクレイパー・石織半製品・石槌	
S158 (埋蓋)	赤生土器 破片	S D167 出土層位不明	赤生土器 壺・壺・鉢・てづくぬ
S159 (埋蓋)	赤生土器 破片	赤生土器 破片・壺	
陶産陶器 不明		S K169	赤生土器 破片
S160 (埋蓋)	赤生土器 破片	S170 (表層遺)	赤生土器 破片
S161 (埋蓋)	赤生土器 破片	陶産陶器 扁箱	
瓦器 平瓦		S171	赤生土器 破片
S163 (埋蓋)	赤生土器 破片	S172	赤生土器 壺
S164 (埋蓋)	赤生土器 破片	石器 破片	
S166	赤生土器 破片	S174 (埋蓋)	赤生土器 壺・破片
石器 石槌		S K176	赤生土器 破片
S D167 黒褐色粘土	赤生土器 壺・壺・鉢(内面突帯あり)・高坪	S178 (埋蓋)	赤生土器 壺・壺
赤付 直産陶	石織・石器・石織半製品・石皿・模形石器・模形石器付随物・くぼみ石・スクレイパー・石織・石織半製品・石槌・打製石包丁・鎌形石・柱状片刃石片・二次加工ある割片・フッチ・割片・黄褐色層のある割片・扁平片刃石片・磨製石包丁	陶産陶器 磨洋鉢・瓦質土器(ホウラク)	赤付 近世
石器		石器 割片・石槌	瓦器 平瓦
土製品 円板・貯妊壺		S K179	赤生土器 壺・破片
その他 焼土		石器 割片	
S D167 黄灰色粘土	赤生土器 壺・壺・鉢	S180	赤生土器 破片
石器 模形石器・模形石器付随物・スクレイパー・石織・石槌・割片・磨製石包丁		S181	赤生土器 破片
S D167 黄灰色粘土	赤生土器 壺・壺・鉢・雙蓋・壺(内面突帯)	S182	赤生土器 破片
石器 石織・模形石器・模形石器付随物・スクレイパー・石槌・打製石包丁・鉢石・二次加工ある割片・割片		赤生土器 破片	
土製品 円板		石器 割片	
その他 焼土			

Tab.21 中の池遺跡第9次調査遺物一覧表 (5)

S 183 (高麗産)		S D 208 黄灰色粘土	
弥生土器 燧片		弥生土器 燧	
石器 割片		石器 割片	
S 184		S D 209 黄灰色磁砂	
弥生土器 燧片		弥生土器 燧・壺・罐片	
S K-185		須恵器 坪	
弥生土器 燧・壺・ミニチュア壺		石器 磨製石斧・割片	
石器 狭形石部付雑物・スクレイパー・砥石・二次加工ある割片・割片		S D 209 灰褐色磁砂	
その他 焼土		弥生土器 燧	
S 187		石器 スクレイパー	
須恵器 燧片		S D 210 黄褐色磁砂	
石器 割片		弥生土器 燧・壺	
S 188		石器 スクレイパー	
石器 割片		S D 210 出土層位不明	
S 189		弥生土器 燧・罐片	
弥生土器 燧片		S D 210	
S 194		弥生土器 燧片	
弥生土器 燧・壺		須恵器 坪・壺	
須恵陶器 不明品(近世)		石器 割片	
石器 割片		S D 211	
S X 187		木製品 不明品	
弥生土器 燧片		S 214	
南区		弥生土器 燧片	
S 188-a (小ビット群)		S 215	
石器 割片		石器 割片	
S 199-t (小ビット群)		S 218	
弥生土器 燧片		弥生土器 燧片	
S 201		S 217	
弥生土器 燧片		弥生土器 燧片	
石器 石核		S D 218	
S T 202		弥生土器 燧・燧片	
弥生土器 燧片		S 219	
石器 二次加工ある割片・石核		弥生土器 燧片	
S D 204		S 220	
弥生土器 燧・壺		弥生土器 燧片	
石器 狭形石器・割片・打製石包丁		石器 割片	
S D 205		S 221	
弥生土器 燧		弥生土器 燧片	
石器 割片		S 222	
S 206		弥生土器 燧	
弥生土器 燧片		S 223	
石器 割片		弥生土器 燧片	
S 207		S 224	
弥生土器 燧片		弥生土器 燧片	
石器 割片			
S 208			
弥生土器 燧片			

Tab.22 中の池遺跡第9次調査遺物一覧表(6)

S K 116	弥生土器 壺	西区 深淵断面図中11層	木製品 不明
S 116	須磨器 壺	2区2層(出土地点・層位不明)	弥生土器 壺・甕・鉢・漆器
S 117	弥生土器 縄片 須磨器 縄片	土製品 紡錘車	その他 焼土
S 118	古式土師器 縄片		
水田地区 出土層位不明(3区断ち割り2層)	弥生土器 縄片 石器 割片		
水田地区 出土層位不明(AV-3グリッド断ち割り2層)	弥生土器 縄片 石器 割片		
水田地区 出土層位不明(3区セクションC2層)	弥生土器 縄片		
水田地区 暗灰色粘質土	弥生土器 縄片 石器 割片・石核		
水田地区 暗黄褐色織紗	弥生土器 壺・甕 石器 楕形石錐付器物、割片・スクレイパー、二次加工ある割片 土製品 門板		
水田地区 暗褐色粘質土	弥生土器 壺・甕片 石器 割片		
水田地区 黒灰色粘土	弥生土器 壺・甕・縄片 土師器 壺 石器 割片・石錐・打製石包丁・石核		
水田地区 黄灰色粘土	弥生土器 縄片・壺・甕・漆器 石器 楕形石錐・割片・打製石包丁、二次加工ある割片		
水田地区 2区2層(後込み埋土)	弥生土器 壺・甕 その他 焼土		
水田地区 暗灰色粘質土	須磨器 埴		
水田地区 暗黄褐色粘土	弥生土器 壺 石器 割片		
水田地区 暗赤褐色粘土	弥生土器 壺 石器 楕形石包丁・砥石		

Tab.23 中の池遺跡9次調査遺構一覧表(1)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
001		土坑	弥生?	AiN4~AiN3	
002	SD002	溝	最内から4本目、2区S134と同一	AiN3~AiN10	
003		ピット	005→003	AiN4	
004		ピット	004→005	AiN4	
005		土坑	004→005→003	AiN4	
006	欠				
007	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる	AgN3	
008	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→008	AgN3	
009	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→009	AgN4	
010	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→011→110	AgN4	
011	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→011→110	AgN4	
012	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→013→112	AgN4	
013	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→013→112	AgN4	
014	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→015→114	AgN4	
015	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→015→014	AgN4	
016	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→016	AgN4	
017	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→017	AkN4	
018	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→019→018	AhN5	
019	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→019→018	AhN5	
020	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→021→020	AhN5	
021	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→021→020	AhN5	
022	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→023→022	AhN5	
023	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→023→022	AhN5	
024	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→024→025	AhN5	
025	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→024→025	AhN5	
026	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→026→027	AhN6	
027	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→026→027	AhN6	
028	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→028→029	AhN6	
029	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→028→029	AhN6	
030	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→030→031	AiN6	
031	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→030→031	AiN6	
032	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→032→033	AiN6	
033	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→032→033	AiN6	
034	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→034→035	AiN6	
035	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→034→035	AiN6	
036		ピット	弥生の埋土に類似 002→036	AiN7	
037	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→038→037	AiN7	
038	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→038→037	AiN7	
039	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→040→039	AiN7	
040	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→040→039	AiN7	
041	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→042→041	AiN7	
042	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→042→041	AiN7	
043	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→044→043	AiN8	
044	SA050	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→044→043	AiN8	
045	SA049	ピット	埋土色調弥生と異なる 002→046→045	AiN8	
046		ピット	埋土色調弥生と異なる 002→046→045	AiN8	
047		ピット	埋土色調弥生と異なる 002→047	AiN8	
048		ピット	埋土色調弥生と異なる 002→048	AiN9	
049		溝列	埋土色調弥生と異なる 002→050→049	AgN3~AiN9	
050		溝列	埋土色調弥生と異なる 002→050→049	AgN4~AiN8	
051		自然地形	深さ2~3cm、自然地形のくぼみ	AiN3	
052	欠				
053	欠				
054	欠				
055		ピット		AgN4	
056		ピット		AgN4	
057	欠				
058		自然地形	深さ5cm程度。自然地形のくぼみと考えられる 62→58	AgN6	
059	SD059	溝	064→097→059 058→059・062→059	AeN4~AhN12	
060	欠				
061	欠				
062		自然地形	深さ2cmほど。自然地形 062→058→059	AgN6~AhN7	

Tab.24 中の池遺跡9次調査遺構一覧表(2)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
063		ビット		AeN7,8	
064		樹根	起伏激しく、樹根と考えられる 064→97→59	AfN7,8	
065		欠			
066		欠			
067		欠			
068		欠			
069		樹根		AgN8	
070		樹根		AgN8	
071		樹根	059→071→082	AgN8,9	
072		ビット		AgN9	
073		樹根	073→082	AgN9	
074		樹根		AgN9	
075	SK075	土坑	S-059埋没途中で掘削か? 128→075→059	AhN10	
076		欠			
077		自然地形	深さ2cm、自然地形	Ah10,11	
078		欠			
079		自然地形	深さ2cm、自然地形	AhN11	
080		土坑		AhN12	
081	SD081	溝	081→084→082,085 弥生環濠	AdN6~AeN24	
082	SD082	溝	195,186→081→084→082,085,→071 073→124→087 飛鳥時代	AdN6~AeN28	
083	SD083	溝	113,130,127→083→194,138,139,117 弥生環	AcN8~AcN21	
084	SD084	溝	081→084→082,085 飛鳥時代	AdN16~AeN10	
085	SD085	溝	081→084→082,085 飛鳥時代	AdN11~AeN25	
086		樹根	086→001 樹根 飛鳥時代	AgN11	
087		樹根	087→082	AgN12	
088		87と同一	087→082	AgN12	
089		溝	089→082,084	AfN8	
090		欠			
091		ビット	S-059の層に存在する小穴 S-059掘削後検出	AfN8	
092		ビット	S-059の層に存在する小穴 S-059掘削後検出	AkN8	
093		ビット	S-059の層に存在する小穴 S-059掘削後検出	AfN8	
094		ビット	S-059の層に存在する小穴 S-059掘削後検出	AfN8	
095		ビット	S-059の層に存在する小穴 S-059掘削後検出	AfN7	
096		ビット	S-059の層に存在する小穴 S-059掘削後検出	AgN7	
097		ビット		AdN8	
098	SX098	ビット	大型のビット	AdN11	
099		ビット	S-156-a 099→100	AcN10	
100		ビット		AcN10	
101		ビット	S-156b	AcN10,11	
102		自然地形	深さ2cmの自然地形	AcN11	
103		樹根	樹根	AcN11	
104		ビット		AcN11	
105		ビット	S-156c	AcN11	
106		溝	099・107→106 灰色の埋土 中世?	AcN10,11	
107		ビット	100・107→106 灰色の埋土 中世?	AbN12,AcN10	
108		ビット	S-156d	AdN12	
109		ビット		AdN12	
110	SP110	ビット		AdN12	
111		ビット	S-156e	AdN12	
112		ビット	S-156f	AdN13	
113		ビット	S-113→083	AeN12	
114		溝	083→114→085	AeN15,AfN14	
115		樹根	115→081・085	AfN14	
116		ビット	大型のビット	AdN14	
117	SP117	ビット	大型のビット	AcN15	
118		樹根	118→083・085	AfN14	
119		樹根	119→085	AfN15	
120		溝	120→083	AeN16,AfN16	
121		樹根	121→082	AgN16	
122		樹根	122→081・082	AgN15,16	
123		樹根	123→082	AgN15,	
124		樹根	124→082	AgN10	

Tab.25 中の池遺跡9次調査遺構一覧表(3)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
125		ビット	125→059	AgN8	
126		ビット		AdN13	
127		ビット	127→083	AdN13	
128		ビット	128→075	AhN10	黒色の埋土で真質
129		ビット	129→059	AhN10	
130		ビット	130→083	AeN13	
131	SD131	溝	169・168→131	AjN32~AhN26	弥生時代の溝
132		土坑	近世	AjN27 AkN27	
133		土坑	近世	AkN27	
134	SD134	溝	134→82	AgN28~AjN22	SD002と同一
135		カクラン		AcN21~AeN17	
136		カクラン	評境	AbN14~AiN21	
137		溝	近世以降の寒堀溝	AcN20~AdN19	083→137→135
138		溝	近世以降の寒堀溝	AcN18	
139		溝	近世以降の寒堀溝	AbN18~AdN19	145,083→139→135
140		溝	S139の延長?	AbN18	
141	SD141	溝	坪境溝(近世以降)	AbN15~AdN17	141→136
142		ビット	近・現代	AbN17	147→142
143		ビット	S155d	AcN19	
144		ビット	S155c	AcN19	
145		ビット	S155a	AcN18	145→139
146		ビット	S155a	AcN17	
147		ビット	147→142	AbN17	
148		ビット		AbN18	
149		ビット		AbN17	
150		ビット		AbN17	
151		溝	カクラン(埋土ガレキと粘土の混在土)	AiN25	
152		ビット		AcN18	152→139
153		溝	カクラン(151と埋土類似)	AgN23,24	
154	SK154	土坑	埋土灰色で新しい	Ah,AiN22,23	167→154
155	SA155	溝列		AcN17~19	
156		溝列		AbN10~AdN13	
157		ビット	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AeN19	
158		ビット	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AeN20	
159		ビット	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AeN20	
160		土坑	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AdN21	
161		ビット	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AdN21	
162		ビット	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AdN21	
163		ビット	現代の稲かけ穴(ビニール等入る)	AdN22	
164		ビット	時期不明	AdN22	
165		ビット	現代の稲かけ穴	AdN22	
166		自然地形	深さ2cm	AiN21-22	
167	SD167	溝	082,084,085,151~154→167	AhN21~AiN26	SD059と同一
168	SK168	土坑	168→131	AmN29	
169	SK169	土坑	169→131	AiN29	
170		溝	185→081→170→178	AiN19~AkN20	S139の続き?
171		樹根	171→082,084	AgAk18,19	
172		樹根	171→082,085	AkN20	
173		土坑	173→167→082→170	Ag,AkN20	
174		ビット	083→174	AdN21	現代稲かけ穴
175		土坑		AmN30	
176	SK176	土坑	176→083	AdAeN20	
177		欠			
178		土坑	カクラン(現代湯水車設置場)	Ae,AiN19	
179	SK179	土坑	時期不明	AkN23	
180		ビット		AeN24	
181		ビット		AcN24	
182		溝	自然地形か?	AcN23	
183		溝	084→183	AgN20	中世?埋土灰色
184		土坑	近世? 132と埋土同じ	AiN28	
185		土坑	185→081→170	AiN19	
186		土坑	186→081	AeN20	
187		樹根	187→082	AhN24	須恵器出土

Tab.26 中の池遺跡9次調査遺構一覧表(4)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
188		樹根	188→082、084	AgAhN17	
189		樹根	189→082、084	AfAgN26	
190		ピット	S-167暗褐色粘質土直下より貫入 構と関連?	AhN22	
191	197d	ピット	167完掘後検出 切り合い不明	AhN22	
192	197c	ピット	168完掘後検出 切り合い不明	AhN22	
193		ピット	193→167	AgN22	
194		土坑	083→194	AdN17	
195	197d	ピット	167完掘後検出 切り合い不明	AhN22	
196	197b	ピット	168完掘後検出 切り合い不明	AhN22	
197	SX197	溝	167暗褐色粘質土直下より設置の可能性大	AhN22	
198		Az-9の小穴群		Az-9	
199		小穴群		Az-10	
200		小穴群		Ay-10	
201		小穴群		Ay-8	
202		自然地形		Am,An-2	
203	ST203	木棺墓	203→202	Am-2	
204	SD204	溝		Am-5~Ap-5	
205	SD205	溝		Ao-4~Ap-3	
206		小穴群		Ay-9	
207		小穴群		Aw-10	
208		小穴群		Aw-7	
209	SD209	溝	弥生前	Bi-5、6~Bk-5、6	
210	SD210	溝		Bk-4、5	
211		溝		Ap-2~Aq-1	
212	SD212	溝		Aq-4~Aw-3	
213	ST213	木棺墓		Am-1	
214		小穴群		Bg-7	
215		小穴群		Bg-8	
216		小穴群		Bf-7	
217		小穴群		Bf-8	
218	SD218	溝		Av-3~Aq-3	
219		小穴群		Be-9	
220		小穴群		Be-8	
221		小穴群		Bd-9	
222		小穴群		Bd-8	
223		小穴群		Bd-7	
224		小穴群		Bc-6	
225	SK225	土坑	225→002,005	Ah-4	
226		小穴群		Bb-11	
227		小穴群		Bc-9	
228		小穴群		Bb-6	

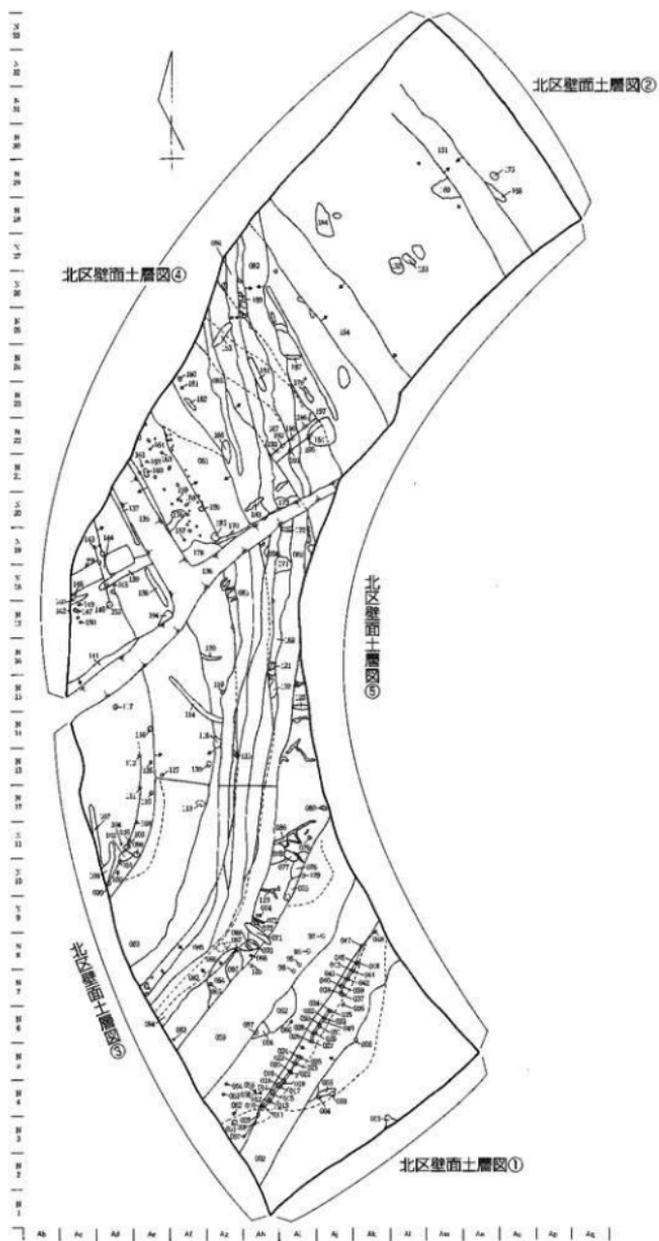


Fig.178 中の池遺跡第9次調査北区遺構配置略図 (S=1/400)



Fig.179 中の池遺跡第9次調査南区選構配置略図 (S=1/400)

写真図版

遺物写真に付した数字は
Fig.番号-遺物番号
の順である。



北区遠景（南東から）



SD002 東壁（西から）

Pla.2



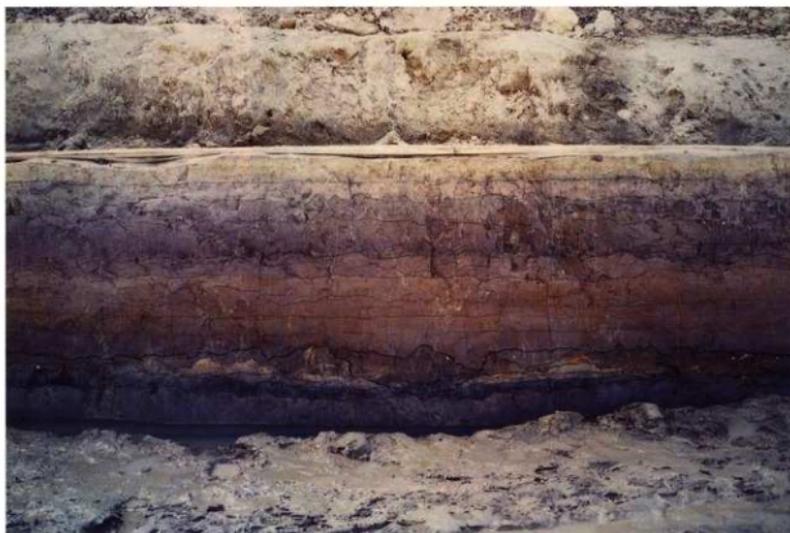
SD059 西壁（東から）



SD081 西壁（東から）



SD083 西壁（東から）



水田城西壁

Pla.4



調査前 (南から)



北区東壁1 (西から)



北区東壁2 (西から)



北区深掘状況 (北から)



SD002 セクションA南半
(西から)



SD002 セクションA北半
(東から)

Pla.6



SD002 セクションB南半
(東から)



SD002 セクションB北半
(西から)



SD002 セクションC南半
(西から)

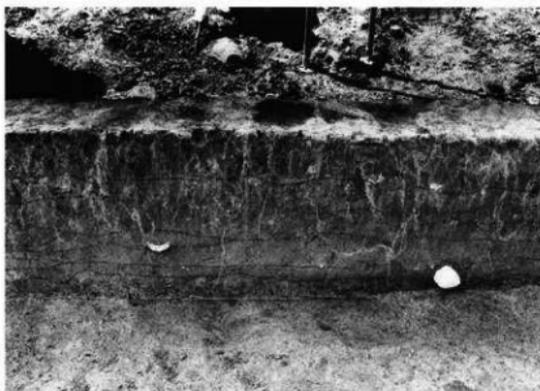
SD002 セクションC北半
(東から)



SD002 セクションB-C間
縦断面1 (南から)



SD002 セクションB-C間
縦断面2 (南から)



Pla.8



SD002 セクションB-C間
縦断面3 (南から)



SD002 セクションB-C間
縦断面4 (南から)



SD002 完掘 (東から)

SD059 セクションB北半
(西から)



SD059 セクションB南半
(東から)



SD059 セクションC南半
(東から)



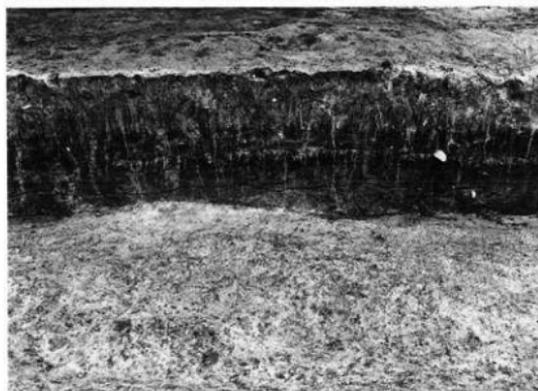
Pla.10



SD059 セクションC北半
(西から)



SD059 C-D間縦断面1
(北から)



SD059 C-D間縦断面2
(北から)

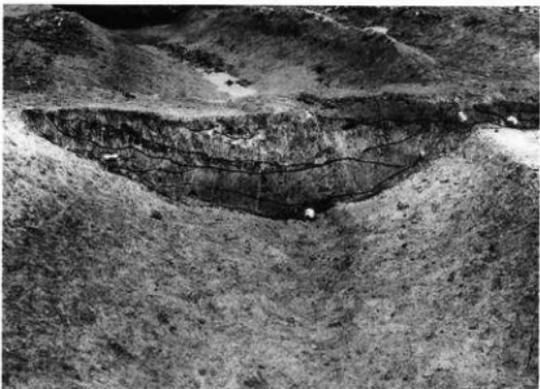
SD059 C-D間縦断面3
(北から)



SD059 完掘



SD081 セクションB
(南西から)



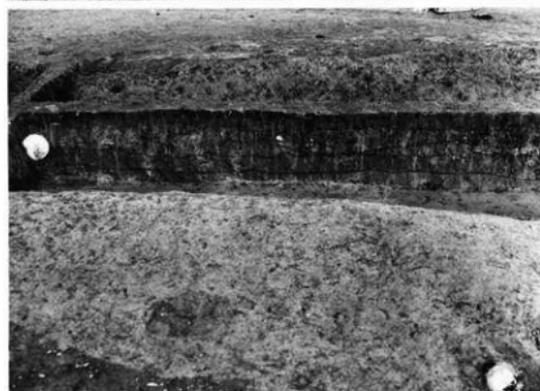
Pla.12



SD081 セクションC
(南西から)



SD081 セクションE
(南から)



SD081 セクションD-E間
縦断面1 (西から)

SD081 セクションD-E間
縦断面2 (西から)



SD081 セクションD-E間
縦断面3 (西から)



SD081 セクションD-E間
縦断面4 (西から)



Pla.14



SD081 セクションA付近遺物出土状況（北東から）



SD081 北端完掘（南東から）

SD083 セクションB西半
(北から)



SD083 セクションB東半
(南から)



SD083 セクションC西半
(南から)





SD083 セクションA以西
縦断面 (南から)

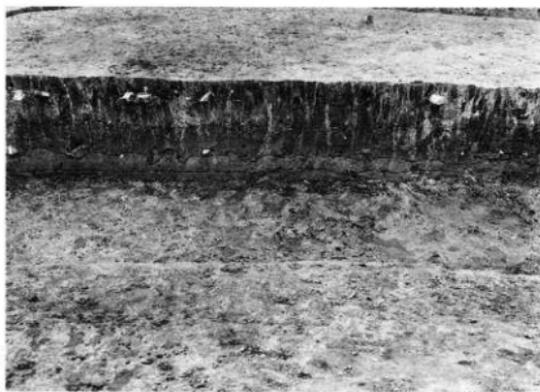


SD083 セクションB-C間
縦断面1 (西から)



SD083 セクションB-C間
縦断面2 (西から)

SD083 セクションB-C間
縦断面3 (西から)



SD083 セクションB-C間
縦断面4 (西から)



SD083黒褐色粘土遺物出土状況

